

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第12輯

近畿自動車道和歌山線建設に伴う

信太山遺跡

—— 発掘調査報告書 ——

昭和62年3月31日

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第12輯

近畿自動車道和歌山線建設に伴う

しの だ やま
信 太 山 遺 跡

—— 発掘調査報告書 ——

昭和62年 3 月31日

大阪府教育委員会

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会





1 信太山2号窯



2 信太山4号窯灰原

序 文

かの清少納言の『枕草子』に、「もりは信太のもり」とうたわれた信太山丘陵には、個性豊かな埋蔵文化財が数多く分布している。泉州を代表する群集墳の信太千塚古墳群、「信太臣」の建立になる信太寺、弥生時代の高地性集落として著名な惣の池遺跡などがそうであるが、なかでもここにその一端を報告する陶邑窯跡群は、わが国最大の須恵器の窯跡群として学界ではつとに有名である。

陶邑窯跡群は信太山丘陵をはじめ、泉北丘陵一帯にひろがるが、窯跡の分布はいくつかの地形的なまとまりをみせる。それらは従来、支群としてグルーピングされてきたが、大野池支群はもっとも大阪湾に近いところに位置しており、比較的初期の窯が営まれていたようである。

今回は大野池支群に所属する5基の窯跡の発掘調査をおこなったが、1基のみが奈良時代の終わりごろで、ほかの4基は予想に違わず、古墳時代の中期にふくまれる古い時期のものであった。

5基のうち、2号窯、4号窯とよばれている5世紀後半ごろの窯では、灰原が良好なかたちでみつかった。ことに2号窯の灰原からは、遺物収納箱600箱あまりの須恵器が採集された。これら膨大な量の遺物については、時間的な制約もあり、少しずつ整理・分析を進めているところである。遺跡・遺物に閉じ込められた古代からの豊じょうなメッセージを、とりだし、歴史にまで高めていくためには、十分な時間やスタッフが必要なことはいうまでもない。より研さんを積んでいきたい。

今回の発掘調査は近畿自動車道と歌山線の建設にともなうものであった。この道路はいうまでもなく、昭和68年春に開港が予定されている関西国際空港の主要なアクセス道路であって、その建設が急がれているものである。したがって本府教育委員会としても、建設予定地内に所在する文化財の調査には、全力をそそいでいる。今後とも関係各位のご協力をお願いする次第である。

昭和62年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 吉 房 康 幸

序 文

本協会が関西国際空港建設に伴う各種公共事業に先立つ埋蔵文化財の発掘調査を実施する機関として設立されて2年を経過することができ、その間に調査事業を行う必要な体制をも充実することができたことは、大阪府教育委員会をはじめ近畿の各府県市教育委員会のご指導並びにご支援の賜ものであります。

今回、報告いたします信太山遺跡は、和泉市の信太山丘陵に所在しており、近畿自動車道と歌山線建設に先立つ発掘調査であり、日本道路公団大阪建設局から委託を受けて実施した調査事業であります。本遺跡の発掘調査は、協会が発足し最初に手掛けた遺跡でもあり調査は、遺跡の範囲を確認する試掘調査を実施後必要な範囲について発掘調査することとなった。

調査は昭和60年5月～7月にかけて試掘調査を8月～昭和61年3月まで発掘調査を行った。その後遺物整理を昭和61年4月～昭和62年3月まで行いその成果纏めたのが本報告書であります。

今回の調査結果は、泉北丘陵一帯に広がる陶邑古窯跡群の一部にあたる窯跡群が5基検出された、その内訳は古墳時代中期頃の窯跡が4基、奈良時代の窯跡が1基であります。その他の遺構では弥生時代・古墳時代等の土壙・溝等を検出され信太山丘陵一帯について歴史的な知見が得られた。

本調査を実施するにあたり、日本道路公団大阪建設局・大阪建設局岸和田工事事務所・大阪府教育委員会・和泉市教育委員会・堺市教育委員会、その他地元関係者に多大のご協力、ご支援をいただいたことに深く謝意を表します。今後も本協会の調査事業にご支援、ご指導をお願い申し上げます。

昭和62年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄

例 言

- 1 この報告書は大阪府和泉市小野町にある信太山遺跡の発掘調査報告である。
- 2 調査区は4分割して北からA地区、B地区、C地区、D地区と命名した。各地区の調査と報告書作成の担当は下記の通りである。

A地区 第4班 吉川義彦 森井貞雄

B地区 第6班 武内雅人 小谷正樹 白井宏子

C地区 第4班 西藤清秀 宮原晋一 林部 均

D地区 第6班 駒井正明 張 洋一

- 3 この報告書は7章からなり、各調査区を章とした。本書の内容はできるだけ統一を計ったが不統一の部分は担当者の意思によるもので、文責は各担当者にある。

本書の執筆分担は下記の通りである。

第一章

吉川義彦

第二章

第一節 森井貞雄、第二節 駒井正明

第三章

第一節、第二節、第三節 2, 4 森井貞雄、第三節 1, 3 吉川義彦

第三節 1-e, f, 5 宮原晋一、第四節 吉川義彦

第四章

第一節 1, 2 武内雅人、3 白井宏子

第二節 1 白井宏子、2 武内雅人、3, 4 小谷正樹

第三節 武内雅人

第五章

第一節 西藤清秀、第二節 宮原晋一、第三節 林部 均、第四節 西藤清秀

第六章

張 洋一

第七章

吉川義彦

凡 例

- * 本文中の遺構の番号は各地区毎に1から始まっているが、報告書を作成する際にA地区1481-OKに限り調査時の番号の他に信太山4号窯という名称を付け加え、この報告書に記載されている他の窯の名称と合わせた。B地区の窯跡は調査時のままの記号である。
- * 番号の後ろに付いている記号はこの協会独自の遺構分類記号である。
OS：溝 OO：土壇 OK：窯跡 OX：その他
- * 図中に使用している方位、座標値は第VI座標系によるものである。
- * 本文中の土層の色調に関する記述は「新版標準土色帖」5版の標記に従った。
- * 土器は各地区とも共通の通し番号とし、図版番号、写真図版番号等の番号は一致する。石器、木製品はそれぞれ番号を付けている。
- * 土器の実測図は1/4を原則にしているが甕などの大型の遺物は縮尺を変更している。縮尺は各図中に表示した。
- * A地区とB地区の胎土、口縁の形態、甕の分類などは同一の分類基準である。
- * 巻末の表は本文中の遺物に関する個別の記述の不備を補うものである。
- * 付章の熱残留磁気に関する文章は分析を依頼した結果の報告である。

目 次

第一章	調査経過	
	調査の経緯	1
	調査経過	1
	調査方法	1
	地区割	2
	調査関係者	4
第二章	遺跡の沿革	
	第一節 地理的環境	5
	第二節 歴史的環境	5
	遺跡分布図と参考文献一覧表について	7
	遺跡分布地名表	10
	参考文献一覧	13
第三章	A地区の調査成果	
	第一節 A地区の調査経過と概要	45
	1 位置と調査経過	45
	2 基本層序	46
	第二節 遺構	48
	1 土 壌	48
	2 須恵器窯跡	50
	第三節 遺物	53
	1 4号窯出土遺物	53
	2 遺構以外の出土遺物	62
	3 遺物の計測	67
	4 ヘラ記号	70
	5 燃料材	78
	第四節 まとめ	80
第四章	B地区の調査成果	83
	第一節 B地区の概況	83

1	概 要	83
2	「西ノ谷」埋没谷の状況	83
3	丘陵部	91
第二節	各窯跡	91
1	信太山1号窯	91
2	信太山2号窯	93
3	信太山3号窯	117
4	遺構外出土遺物	122
第三節	まとめ	123
1	「西ノ谷」の埋没過程	123
2	各窯跡出土遺物の編年観	124
第五章	C地区の調査成果	
第一節	調査経過と概要	129
1	位置と調査経過	129
2	基本層序	129
第二節	遺 構	
1	方形周溝状遺構	130
2	溝	130
3	焼土壇	132
4	その他の遺構	132
第三節	遺 物	132
第四節	まとめ	135
第六章	D地区の調査成果	
第一節	調査経過と概要	137
1	位置と調査経過	137
2	基本層序	137
第二節	遺 構	137
第三節	遺 物	138
第四節	まとめ	139
第七章	総 括	141

付 章	1・2・3号窯跡の考古地磁気測定	143
-----	------------------	-----

挿入図版目次

第1図	遺跡分布図	8
第2図	遺跡分布図	9
第3図	A地区微地形図	46
第4図	A地区西壁土層図(部分)	47
第5図	162-OO出土礫	49
第6図	162・240-OO遺構図	49
第7図	遺構出土土器	50
第8図	灰原の広がりと遺物の数量分布	51
第9図	1481-OK灰原土層断面	52
第10図	杯蓋(部分)	54
第11図	須恵器甕(83)	56
第12図	須恵器甕(85)	56
第13図	壺・甕形態別法量表	57
第14図	壺・甕形態別法量表	58
第15図	第2層出土土器	63
第16図	灰原上層出土土器	64
第17図	製塩土器	64
第18図	出土石器	65
第19図	遺構・遺物分布図	66
第20図	4-OK(1481-OK)灰原出土遺物器形別出土破片数	68
第21図	杯身・杯蓋の口径・器高測定グラフ	68
第22図	口径・器高・立ち上がり部の度数分布	69
第23図	ヘラ記号の分類	70
第24図	ヘラ記号拓本	71
第25図	ヘラ記号拓本	72
第26図	ヘラ記号拓本	73
第27図	ヘラ記号拓本	74

第28図	4号窯(1481-OK)出土遺物	75
第29図	ヘラ記号と杯身の手法との関係	77
第30図	ヘラ記号と灰層の関係	77
第31図	灰層と杯身の関係	78
第32図	燃料材片の分布図	79
第33図	B地区「西ノ谷」窯跡周辺地形測量図	85
第34図	11・12・701・702・703-OX断面図	86
第35図	12・702・703-OX出土遺物	89
第36図	701-OX出土遺物	90
第37図	2号窯(2b-OK)北壁に残る指頭痕	93
第38図	第40図のB-B'延長土層図	94
第39図	2号窯(2a・2b-OK)灰原断面	96
第40図	2a・2b-OK灰原出土土器の構成比	98
第41図	杯蓋・杯身法量表	98
第42図	杯蓋タイプ別ヘラケズリ範囲	99
第43図	高杯の蓋と鈕の接合部	100
第44図	高杯脚部の接合部	101
第45図	甕・壺口縁部形態別数量比	102
第46図	甕口縁部分類概念	103
第47図	壺口縁部分類概念	103
第48図	甕口縁部タイプ別法量表	104
第49図	壺口縁部タイプ別法量表	105
第50図	壺底部外面の回転カキ目	107
第51図	2号窯(2a・2b-OK)窯体及び関連施設出土遺物	113
第52図	灰原層位別土器出土破片数	113
第53図	杯蓋タイプ別出土層位(個体数)	113
第54図	甕・壺タイプ別出土層位(破片数)	114
第55図	器台(241)の地区・層間接合関係	114
第56図	2号窯(2a・2b-OK)灰原地区割	115
第57図	2号窯(2a・2b-OK)灰原出土須恵器ヘラ器号	116

第58図	甕・壺底部の火ダスキ	117
第59図	154・155-OO 出土須恵器	118
第60図	B地区出土石器	121
第61図	3号窯（3-OK）灰原検出縄文土器	122
第62図	丘陵部出土遺物	122
第63図	方形周溝状遺構（1-OX）遺構図	131
第64図	溝3-OS 東壁断面	131
第65図	焼土壇4・5-OO 遺構図	132
第66図	C地区出土遺物（1）	133
第67図	C地区出土遺物（2）	134
第68図	C地区出土遺物数量表	135
第69図	65・68-OO 遺構図	138
第70図	染付・天保銭	139
第71図	D地区出土須恵器	139

図 版 目 次

図版一	遺跡調査区全体図
図版二	遺跡A地区 遺跡平面図1
図版三	遺跡A地区 遺跡平面図2
図版四	遺跡A地区 遺跡平面図3
図版五	遺跡A地区 遺跡平面図4
図版六	遺跡B地区 遺跡平面図5
図版七	遺跡B地区 遺跡平面図6
図版八	遺跡B地区 遺跡平面図7
図版九	遺跡C地区 遺跡平面図8
図版一〇	遺跡D地区 遺跡平面図9
図版一一	遺跡D地区 遺跡平面図10
図版一二	遺跡A・B地区 土層抽出図
図版一三	遺跡C・D地区 土層抽出図
図版一四	遺跡A地区 信太山4号窯

- | | | |
|------|-------|------------------|
| 図版一五 | 遺跡B地区 | 信太山1号窯 |
| 図版一六 | 遺跡B地区 | 信太山2号(旧)窯地形測量図 |
| 図版一七 | 遺跡B地区 | 信太山1・2号(新)窯地形測量図 |
| 図版一八 | 遺跡B地区 | 信太山2号窯 |
| 図版一九 | 遺跡B地区 | 信太山3号窯地形測量図 |
| 図版二〇 | 遺跡B地区 | 信太山3号窯 |
| 図版二一 | 遺物A地区 | 信太山4号窯灰原出土遺物 |
| 図版二二 | 遺物A地区 | 信太山4号窯灰原出土遺物 |
| 図版二三 | 遺物A地区 | 信太山4号窯灰原出土遺物 |
| 図版二四 | 遺物A地区 | 信太山4号窯灰原出土遺物 |
| 図版二五 | 遺物A地区 | 信太山4号窯灰原出土遺物 |
| 図版二六 | 遺物A地区 | 信太山4号窯灰原出土遺物 |
| 図版二七 | 遺物A地区 | 信太山4号窯灰原出土遺物 |
| 図版二八 | 遺物A地区 | 信太山4号窯灰原出土遺物 |
| 図版二九 | 遺物A地区 | 信太山4号窯灰原出土遺物 |
| 図版三〇 | 遺物A地区 | 信太山4号窯灰原出土遺物 |
| 図版三一 | 遺物A地区 | 信太山4号窯灰原出土遺物 |
| 図版三二 | 遺物B地区 | 信太山1号窯出土遺物 |
| 図版三三 | 遺物B地区 | 信太山2号窯灰原出土遺物 |
| 図版三四 | 遺物B地区 | 信太山2号窯灰原出土遺物 |
| 図版三五 | 遺物B地区 | 信太山2号窯灰原出土遺物 |
| 図版三六 | 遺物B地区 | 信太山2号窯灰原出土遺物 |
| 図版三七 | 遺物B地区 | 信太山2号窯灰原出土遺物 |
| 図版三八 | 遺物B地区 | 信太山2号窯灰原出土遺物 |
| 図版三九 | 遺物B地区 | 信太山2号窯灰原出土遺物 |
| 図版四〇 | 遺物B地区 | 信太山2号窯灰原出土遺物 |
| 図版四一 | 遺物B地区 | 信太山2号窯灰原出土遺物 |
| 図版四二 | 遺物B地区 | 信太山2号窯灰原出土遺物 |
| 図版四三 | 遺物B地区 | 信太山2号窯灰原出土遺物 |
| 図版四四 | 遺物B地区 | 信太山2号窯灰原出土遺物 |

図版四五 遺物B地区 信太山2号窯灰原出土遺物

図版四六 遺物B地区 信太山2号窯灰原出土遺物

図版四七 遺物B地区 信太山3号窯灰原出土遺物

写真図版目次

- 巻頭カラー 1 信太山2号窯
2 信太山4号窯灰原
- 写真図版一 遺跡 A地区全景(南から)
- 写真図版二 遺跡A地区 1 C07区調査前の状況(北から)
2 C22区調査前の状況(南から)
- 写真図版三 遺跡A地区 1 C05区全景(北から)
2 C05区全景(南から)
- 写真図版四 遺跡A地区 1 C07、C12区全景(北から)
2 C07、C12区全景(南から)
- 写真図版五 遺跡A地区 1 C17区全景(北から)
2 C17区全景(南から)
- 写真図版六 遺跡A地区 1 C22区全景(北から)
2 C22区全景(南から)
- 写真図版七 遺跡A地区 1 C07区土層断面(南東から)
2 C12区土層断面(東から)
- 写真図版八 遺跡A地区 1 C12区塹壕(東から) 1365-OX
2 C05区塹壕(西から) 228-OX
- 写真図版九 遺跡A地区 1 C12区塹壕(東から) 1301-OX
2 C22区塹壕(南から) 1541-OX
- 写真図版一〇 遺跡A地区 1 240-OO(南から)
2 240-OO遺物出土状況
- 写真図版一一 遺跡A地区 1 162-OO(北から)
2 162-OO(東から)
- 写真図版一二 遺跡A地区 1 1480-OO(南から)
2 C22区掘削風景(南から)

写真図版一三	遺跡A地区	1	4号窯(1481-OK)検出状況(南から)
		2	4号窯(1481-OK)灰層検出状況(南から)
写真図版一四	遺跡A地区	1	4号窯(1481-OK)灰原検出状況(東から)
		2	4号窯(1481-OK)灰原検出状況(北西から)
写真図版一五	遺跡A地区	1	4号窯(1481-OK)第4層上面遺物検出状況(東から)
		2	4号窯(1481-OK)灰原南北断面(東から)
写真図版一六	遺跡A地区	1	4号窯(1481-OK)灰原断面第1・2層(東から)
		2	4号窯(1481-OK)灰原断面第3～第10層(東から)
写真図版一七	遺物A地区		4号窯(1481-OK)出土遺物
写真図版一八	遺物A地区		4号窯(1481-OK)出土遺物
写真図版一九	遺物A地区		4号窯(1481-OK)出土遺物
写真図版二〇	遺物A地区		4号窯(1481-OK)出土遺物
写真図版二一	遺物A地区		4号窯(1481-OK)出土遺物
写真図版二二	遺物A地区		4号窯(1481-OK)出土遺物
写真図版二三	遺物A地区		4号窯(1481-OK)出土遺物
写真図版二四	遺物A地区		4号窯(1481-OK)出土遺物
写真図版二五	遺物A地区		4号窯(1481-OK)出土遺物
写真図版二六	遺物A地区		4号窯(1481-OK)出土遺物
写真図版二七	遺物A地区		遺構出土遺物
写真図版二八	遺物A地区	1	C22区灰原第3層出土
		2	C22区灰原第1層出土
写真図版二九	遺物A地区	1	ナイフ型石器
		2	石器
写真図版三〇	遺物A地区		須恵器ヘラ記号
写真図版三一	遺物A地区		須恵器ヘラ記号
写真図版三二	遺物A地区		4号窯(1481-OK)出土木片
写真図版三三	遺物A地区		4号窯(1481-OK)出土木片
写真図版三四	遺跡B地区	1	「西ノ谷」付近調査前の状況(南から)
		2	「西ノ谷」付近調査後の状況(北から)
写真図版三五	遺跡B地区		窯跡と「西ノ谷」の状況(上方が北)

- 写真図版三六 遺跡B地区 1 埋没谷 (11-OX) (北西から)
2 同上断面 B-B' (北西から)
- 写真図版三七 遺跡B地区 1 埋没谷 (12-OX) (北から)
2 同上断面 A-A' (北から)
- 写真図版三八 遺跡B地区 1 埋没谷 (701-OX) (南東から)
2 同上断面 C-C' (南西から)
- 写真図版三九 遺跡B地区 1 埋没谷 (702-OX) (東から)
2 同上断面 D-D' (南西から)
- 写真図版四〇 遺跡B地区 1 埋没谷 (703-OX) F-F' 土層断面 (南東から)
2 埋没谷 (701-OX) 机天板出土状況 (西から)
- 写真図版四一 遺跡B地区 1 G11・12区遺構検出状況 (北から)
2 G16区遺構検出状況 (南から)
- 写真図版四二 遺跡B地区 1 1号窯 (1-OK) 調査前状況 (南東から)
2 1号窯 (1-OK) 全景 (南東から)
- 写真図版四三 遺跡B地区 1 1号窯 (1-OK) 最終床面 (南東から)
2 1号窯 (1-OK) 床面たちわり断面 (南東から)
- 写真図版四四 遺跡B地区 1 崖面に露呈した2号窯 (2a・b-OK) 窯体 (東から)
2 2号窯 (2a-OK) と灰原 (東から)
- 写真図版四五 遺跡B地区 1 2号窯 (2b-OK) 全景 (東から)
2 同上 (西から)
- 写真図版四六 遺跡B地区 1 2号窯 (2b-OK) 排水溝 (383-OS) (北から)
2 同上断面 (南から)
- 写真図版四七 遺跡B地区 1 2号窯 (2b-OK) 床面の重なり (南から)
2 同上 (東から)
- 写真図版四八 遺跡B地区 1 2号窯 (2b-OK) 全景 (東から)
2 2号窯 (2b-OK) 断面 (東から)
- 写真図版四九 遺跡B地区 1 2号窯 (2a・2b-OK) 床面の重なり (東から)
2 同上
- 写真図版五〇 遺跡B地区 1 2号窯 (2a・2b-OK) 灰原断面 A-A' (南から)
2 同上 B-B' (東から)

写真図版五一	遺跡B地区	1	3号窯(3-OK) 調査前状況
		2	3号窯(3-OK) 焚口検出状況
写真図版五二	遺跡B地区	1	3号窯(3-OK) 窯壁
		2	3号窯(3-OK) C-C'断面
写真図版五三	遺跡B地区	1	3号窯(3-OK) 最終床面検出状況
		2	3号窯(3-OK) 床面下ピットと154・155-OO
写真図版五四	遺跡B地区	1	154-OO 土層断面(西から)
		2	155-OO 土層断面(西から)
写真図版五五	遺物B地区	1	1号窯(1-OK) 出土遺物
写真図版五六	遺物B地区	1	1号窯(1-OK) 出土遺物
		2	1号窯(1-OK) 出土遺物
写真図版五七	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版五八	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版五九	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版六〇	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版六一	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版六二	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版六三	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版六四	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版六五	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版六六	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版六七	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版六八	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版六九	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版七〇	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版七一	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版七二	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版七三	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版七四	遺物B地区	2	2号窯(2a・2b-OK) 灰原出土遺物
写真図版七五	遺物B地区	3	3号窯(3-OK) 灰原出土遺物

- 写真図版七六 遺物B地区 3号窯（3-OK）灰原出土遺物
- 写真図版七七 遺物B地区 1 3号窯（3-OK）灰原出土遺物・遺構外出土遺物
2 B地区出土石器
- 写真図版七八 遺跡C地区 調査区全景（空撮）
- 写真図版七九 遺跡C地区 1 調査前全景（北から）
2 調査前全景（南から）
- 写真図版八〇 遺跡C地区 1 調査地全景（北から）
2 調査地全景（北から）
- 写真図版八一 遺跡C地区 1 溜池211-OG周辺（東から）
2 方形周溝状遺構1-OX（北から）
- 写真図版八二 遺跡C地区 1 掘立柱建物210-OB（東から）
2 溝3-OS（北から）
- 写真図版八三 遺物C地区 1 石器
2 須恵器
3 土師器・黒色土器
4 陶磁器
5 平瓦・丸瓦
- 写真図版八四 遺跡D地区 調査地池北側全景（空撮）
- 写真図版八五 遺跡D地区 調査地池南側全景（空撮）
- 写真図版八六 遺跡D地区 1 池北側全景
2 畝溝

第一章 調査経過

調査の経緯

近畿自動車道和歌山線の建設にともない信太山古墳群を含めた信太山遺跡の一部が道路予定地に含まれることが判明した。このため、大阪府教育委員会と日本道路公団岸和田工事事務所とが協議した結果、建設工事に先立って埋蔵文化財の調査を実施することになった。大阪府教育委員会の指導により財団法人大阪府埋蔵文化財協会が調査の委託を受けて現地の発掘調査を実施することになった。

調査経過

信太山の調査は試掘調査と発掘調査の2回に分けて実施した。試掘調査は、発掘調査に先立ち昭和50年5月20日から実施した。幅2メートルのトレンチを1.5キロメートルにおよぶ調査対象地域全体に設定した。試掘調査の結果、土層の厚さに関する情報に加えて各地区で弥生土器、石器などを検出するなど、発掘調査に必要な資料を得ることができた。試掘調査は昭和60年7月31日に終了した。

試掘調査の資料を参考にして昭和60年8月1日から発掘調査を開始した。調査対象地域は東西40メートルで南北に細長く、延長は1.5キロメートルに及ぶ。この調査区を4区に区分して北からA地区、B地区、C地区、D地区と命名した。この調査区分割は諸般の事情によるもので、学術的な観点から分割したものではないため考古学的には不合理な点があるが、これまでに存在が明らかになっている窯跡のある谷筋についてはB地区に含まれるよう多少の配慮をした。

調査開始は各地区ともほぼ同一であるが、道路の付け替えなどの各地区毎の事情により調査終了は同一ではない。A地区で調査終了間際に新たな窯跡が発見されたため、調査終了が遅れ最終的に全ての調査が終わったのは昭和61年3月15日である。

調査方法

発掘調査の開始に当っては大阪府教育委員会の指導を仰ぎ、現在大阪府が採用している発掘調査工事請負方式に従い、調査区を4分割して調査工事の入札を行った結果、現場の調査工事を請け負う4業者と、調査区の航空測量を請け負う測量業者が3社決定した。

財団法人大阪府埋蔵文化財協会は大阪府教育委員会、奈良県教育委員会、和歌山県教育委員会、大阪市教育委員会、池田市教育委員会、堺市教育委員会から出向した職員と協会

固有の職員から構成されている。発掘調査は大阪府教育委員会に全面的に指導を仰いでいるが、調査の方法や記録方法などに各出身母体特有の方法があり、これらを一定の範囲に収まるように調整しなければ、組織的な調査活動に支障をきたす恐れがあるため、協会独自の調査規程を作成し、これに従って調査した。

地区割

トレンチ名、地区名などは遺跡名とともに組織的に管理しなければ大混乱を招く原因となる。遺跡の位置表示には第IV座標を使用してX、Yの座標で示す。遺構の位置は座標で示す場合と地区名で示す場合がある。現地での作業の場合は遺構の中心的な地区名で表示する。等分の場合は北西を優先する。遺物を取り上げる単位は4m×4m（16㎡）を最大とする。特に位置を表示する必要のある遺物についてはX、Yの座標値を記入する。座標値の記入には地区割りの、角の座標値を利用する。

地区割りの基本は1/2500地形図（都市計画図）である。この地図を12等分して500mの方形区画を作る。この区画にAからLまでの記号を付ける。次に、この区画を25等分して100mの方形区画を作る。この区画は2桁の数字で示す。数字は桁数を揃えるために01から25までを使用する。100mの方形区画を625等分して4m四方の区画を作る。この区画は2文字のアルファベットで表現する。縦方向に25行、横方向に25列あり、表示の際は縦方向を優先する。基準が1/2500の地図なので各地区の四隅の座標は簡単に求めることができる。

区画の名称はD 18GMのように5桁の英数字で表現される。文字の間に-などを記入すると桁数が変わるので必ず5桁で表現すること。区画名は北西角の杭の名称と同一である。従って、D 18GMと記入された杭の上にとって南を向いた場合左前方がD 18GMの区画である。



500mの区画

A	B	C	D
E	F	G	H
I	J	K	L

100mの区画

01	02	03	04	05
06	07	08	09	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

4 mの区画

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	列 (横方向)
A																										
B																										
C																										
D																										
E																										
F																										
G																										
H																										
I																										
J																										
K																										
L																										
M																										
N																										
O																										
P																										
Q																										
R																										
S																										
T																										
U																										
V																										
W																										
X																										
Y																										

行 (縦方向)

地区割りの方法

調査関係者

調査に際しては地元や自衛隊など土地の所有者、管理者との交渉には日本道路公団岸和田工事事務所のお世話になった。また、調査期間中には橿原考古学研究所、泉州の遺跡と文化財を守る連絡協議会の皆様に助言と御教示をいただいた。

御教示をいただいた方々。(敬称略)

石野博信、泉森 皎、泉 拓良、植野浩三、岡田 博、玉村登志夫、田中英夫、田中清美、浪貝 毅、野上丈助

協会を構成する職員は毎年変化し昭和60年度の調査体制を記す。()内は出向元。

調査課長 井藤徹 (大阪府)

調整係長 泉本知秀 (大阪府)

調査第1班 班長 高島 徹 (大阪府)

久米雅雄 (大阪府)、小山田宏一 (大阪府)、西村 歩 (協会職員)

岡本武司 (協会職員)、岡戸哲紀 (協会職員)

調査第2班 班長 藤田憲司 (協会職員)

黒田慶一 (大阪市文化財協会)、禰宜田佳男 (大阪府)

蜂屋晴美 (協会職員)、田中晋作 (池田市)

調査第3班 班長 渡辺昌宏 (大阪府)

渋谷高秀 (和歌山県)、田中一広 (協会職員)、富加見泰彦 (和歌山県)

岡本圭司 (協会職員)、宮野淳一 (大阪府)

調査第4班 班長 吉川義彦 (協会職員)

西藤清秀 (奈良県)、宮原晋一 (奈良県)、林部 均 (奈良県)

森井貞雄 (大阪府)、西村尋文 (大阪府)

調査第5班 班長 岩崎二郎 (大阪府)

田中龍男 (協会職員)、服部みどり (協会職員)

松尾信裕 (大阪市文化財協会)

調査第6班 班長 武内雅人 (和歌山県)

小谷正樹 (堺市)、駒井正明 (協会職員)、白井宏子 (協会職員)

張 洋一 (堺市)

第二章 遺跡の沿革

第一節 地理的環境

信太山遺跡は、洪積台地である信太山丘陵の一角に位置する。信太山丘陵は、一般に泉北丘陵と総称される泉州地方北部に広がる丘陵地の中で、和田川・甲斐田川と槇尾川に挟まれた地域をさす。具体的には、和泉市和田付近を基点として、堺市大森～草部～和泉市尾井～黒鳥を結ぶ扇形に開いた独立した地形をなし、南北約7km、東西約3kmを測る。

この丘陵は、地形分類上は高位段丘に相当し、表面は段丘礫層に覆われるが、段丘崖には基盤である大阪層群が露出している。また開折谷の発達が著しく、樹枝状に入り組んだ支丘に別れるが、段丘の上面は、比較的起伏の少ない本来の地形面を留めている。標高は北側で35～45m、北側へ進むにつれ徐々に高度を増し和田付近で90mを測る。現代の土地利用は、台地上は畑地、段丘崖は落葉広葉樹の雑木林、谷底は水田、溜池となっている。

今回調査を実施した場所は、信太山丘陵の南寄り、2本の開折谷で丘陵が、両側へ別れる分岐点に位置している。北方へ伸びる支脈は、その背稜部を父鬼街道が走り、和田川と槇尾川の分水嶺をなしており、菱木銅鐸出土地、山田遺跡が位置している。北北西へ伸びる支脈はやや幅が狭いが、その先端には和泉黄金塚古墳が築かれる。この支脈の東を画する開折谷は通称西ノ谷と呼ばれ、谷口に鶴田池が位置する。また西側の開折谷の谷口には大野池が位置する。西北へ伸びる支脈は山荘町付近で多数枝分れし、最も広い面積を占める。信太千塚古墳群、丸笠山古墳、聖神社などが位置し、槇尾川方面の眺望はすこぶる良好である。

第二節 歴史的環境

今回調査を行った信太山遺跡は、大阪府和泉市東部に広がる信太山丘陵に位置する。同丘陵は、明治以後陸軍の駐屯地となり、第2次世界大戦直後は一時進駐軍が駐留し、現在は陸上自衛隊の演習地となっている。

この信太山丘陵に点在する遺跡を最初に調査したのは、大阪府立泉大津高校地歴部であった。同校地歴部は、1954年から雑誌『和泉考古学』を順次刊行し、調査成果を発表した。その後、1970年代初頭まで和泉市による信太千塚古墳群の調査、惣ガ池遺跡等の調査も行

われたが、ここ10数年間はほとんど調査・研究成果が発表されず今日に至る。

信太山丘陵周辺には、明治初期に土器の出土が報じられて以来、第2阪和国道建設時に大規模な保存運動が展開された池上曽根遺跡をはじめ、多数の遺跡が存在する。それらは、ほとんど戦後に本格的調査がなされたものばかりである。戦後40年余りの間に発掘調査技術も進展し、多方面からの膨大な調査資料が蓄積されている。例えば最近（財）大阪文化財センターから刊行された『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』に記述されている総合的な泉州の歴史的環境の復元は、その成果であろう。

本節でも、本来ならば信太山周辺の歴史的環境を記述しなければならないのであるが、結果的に諸先学の見解を再論することになる。そこで本報告内では、信太山周辺の遺跡に関する戦後刊行された文献をできる限り集め、各々を市町村単位でまとめることにしたので、それを参考にしてもらいたい。以下代表的な遺跡数例を簡単に紹介するとどめる。

泉州北部には先土器時代遺跡として、堺市鈴の宮遺跡、高石市大園遺跡等があり、また、縄文時代遺跡として、最近発掘調査が行われた仏並遺跡等が存在する。しかし、泉州地域の遺跡で代表的なものは、先述の和泉市と泉大津市にまたがる池上曽根遺跡、堺市四ツ池遺跡であろう。この両遺跡はいずれも弥生時代を中心とする遺跡で、出土した土器類等は、泉州地域の弥生時代研究の中核を占める。特に池上曽根遺跡は環濠を伴う大集落遺跡で、1976年にはその一部が国史跡に指定されている。

古墳時代の遺跡としては、堺市にある大山古墳・ミサンザイ古墳等、陵墓とされる大型前方後円墳を中心とする百舌鳥古墳群、同じ堺市東部から和泉市にかけて群在する陶邑窯跡群、そして高石市を中心に展開する大園遺跡等がある。これら古墳時代遺跡の研究は、古墳形態論、須恵器生産、集落論等多岐にわたり、今後の進展が期待される。

なかでも陶邑窯跡群の一連の調査研究は、古墳時代以降の土器研究を飛躍的に発展させた。まず陶邑窯跡群調査以後、須恵器の型式分類と編年が確立し、いわゆる地方窯研究、初期須恵器研究、須恵器生産地同定とその製品分布論等の研究が大きく進展した。また、その後の調査で、陶邑窯跡群は大きく7地区（陶器山、高蔵寺、梅、大野池、富蔵、光明池、谷山池）に分かれ、その分布と時期的変遷の把握から実態解明が徐々にされつつある。今回信太山遺跡で発見された窯跡5基は、この陶邑窯跡群の大野池支群に属する。

これらの諸遺跡は、学史上いずれも重要な位置を占めるものばかりで、各々の遺跡が持つ意義は非常に大きい。現在もなおこれらの遺跡は、大阪府教育委員会や各市教育委員会を中心に調査が行われ、多くの成果を得ている。

しかしこれらの成果は、いずれも大規模な開発に伴って得られたものばかりであり、その開発に伴って学史に残る保存運動が展開されたことも見逃せない事実である。その運動の経過が、雑誌『考古学研究』、『古代学研究』等に継続的に報告されたことは、まだ記憶に新しい。このような文化財保護運動は、現在も「泉州の自然と文化財を守る連絡会議」に代表される地道な活動が継続している。大阪府は、全国的にみても年間発掘件数がトップクラスであり、今後の文化財行政のゆくえが注目されるところである。

遺跡分布図と参考文献一覧表について

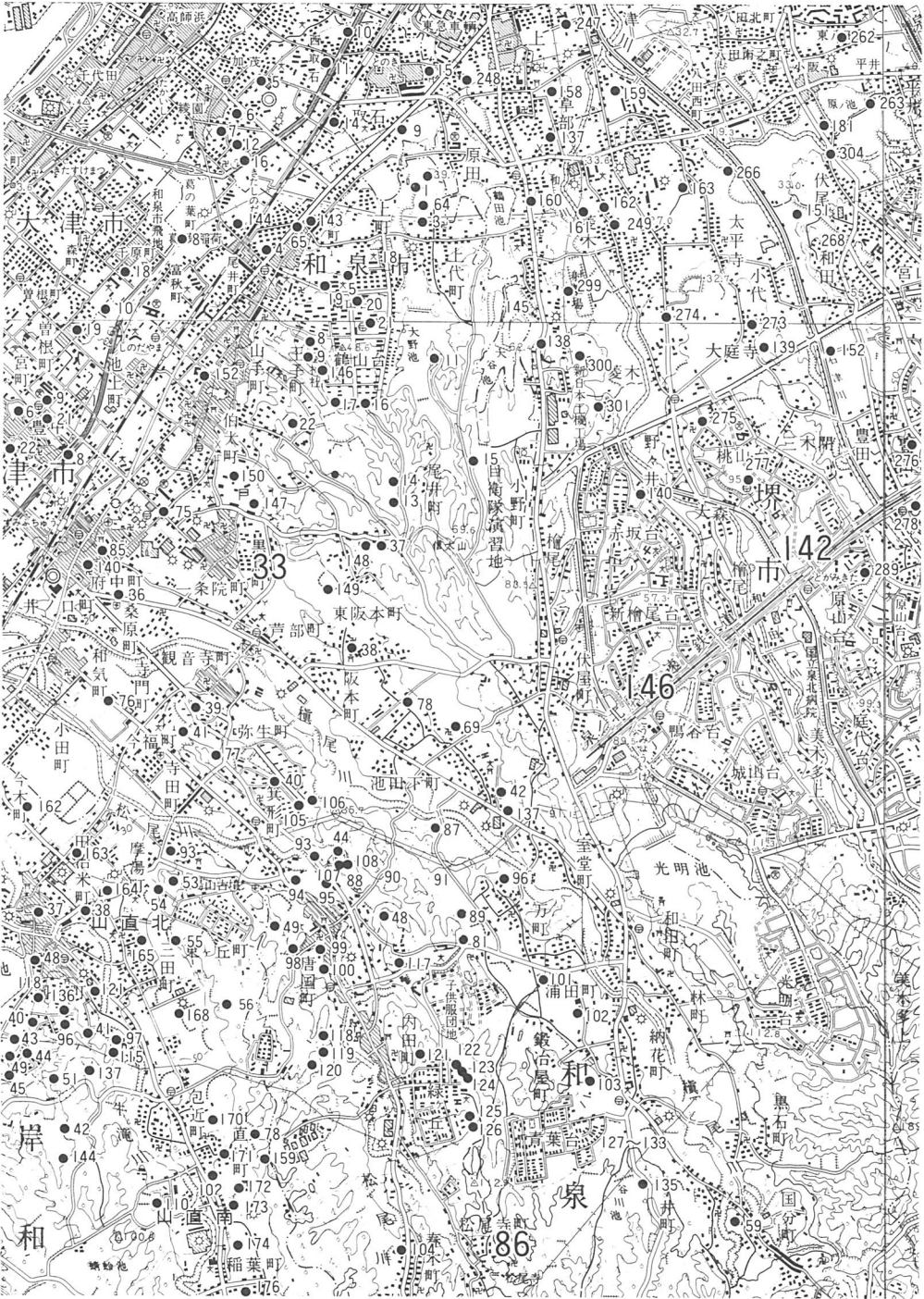
今回掲載した信太山周辺遺跡分布図は、1986年度大阪府教育委員会で新たに作成した『大阪府文化財分布図』を基礎として、国土地理院発行5万分の1地形図に記入したものである。これは、信太山周辺に所在する201遺跡を、陶邑窯跡群ならびに古墳群以外は点で表記したものである。分布図地名表は、遺跡番号、遺跡名のみ記入し、遺跡名は『大阪府文化財分布図』のものを踏襲しているが、遺跡名にルビを付すことを省略した。また各遺跡の所在地、時期、性格については、現在一覧表が未発行のため、今回の記載は見合わせた。

参考文献一覧表は、同地域に関連する戦後～1986年末までに発行された報告書、雑誌等を収集したものであり、その数はのべ約600にのぼる。この一覧表は、市町村単位にまとめたもので、各遺跡を五十音順にならべ、遺跡番号をつけて分布図地名表に対応させている。各文献は、まず文献番号、発行年を記載し、次に報告書は紙面の都合上編著者を省略し書名を、その他は著者・编者、文名、書名を記し、最後に発行所を記載している。遺跡名は先の大阪府分布図記載の名称を採用している。文名の項には基本的に論文名を記しているが、遺跡名を記しているものはその書物内での名称である。1冊の書物に複数遺跡が記述されている場合は、原則として各々の遺跡に記載する。また、『大阪府史』、『堺市史 続編』に関しては、特に遺跡単位で記述されていないのでそのページを記した。なお複数の市にまたがる陶邑窯跡群、池上曾根遺跡、大園遺跡、豊中遺跡について、混乱を避けるために陶邑窯跡群は堺市、池上曾根遺跡は泉大津市、大園遺跡は高石市、豊中遺跡は泉大津市にそれぞれ紹介しているので注意されたい。

この参考文献一覧表はすべてを網羅したものではなく、逸脱したものも多く存在する。今後も調査研究上収集活動を続けるので、お気付きの点等があれば御教示下さるようお願い致します。



第1図 遺跡分布図（縮尺5万分の1）



第2図 遺跡分布図 (縮尺5万分の1)

遺跡分布地名表

1. 堺市

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
130	陶器千塚	247	上遺跡	280	片蔵遺跡
131	御坊山古墳	248	原田遺跡	285	陶器城跡(北村砦跡)
137	御山古墳	249	菱木遺跡	286	小角田遺跡
138	山田遺跡	262	東八田遺跡	287	上之遺跡
139	野園池古墳	263	平井遺跡	288	陶荒田神社遺跡
140	野々井古墳	264	東山遺跡	289	西山城跡
142	牛石古墳群	266	大平寺遺跡	290	上池東遺跡
146	檜尾塚原古墳群	267	辻之遺跡	291	岡田寺跡
151	伏尾遺跡	268	小代古墳群	292	倉谷・富蔵遺跡
152	深田橋遺跡	269	深阪遺跡	293	泉田中古墳群
158	草部遺跡	270	田園遺跡	295	塚山古墳
159	万崎遺跡	271	田園城跡	296	寺池遺跡
160	鶴田池東遺跡	273	大庭寺遺跡	297	泉田中遺跡
161	西浦橋遺跡	274	菱木上遺跡	298	富蔵東遺跡
162	菱木下遺跡	275	野々井遺跡	299	山田北遺跡
163	万崎池遺跡	276	小谷城跡	300	昭和池古墳
181	小阪遺跡	277	野々井南遺跡	301	狐池南遺跡
185	野田城跡	278	豊田遺跡	302	遠里小野遺跡
246	陶邑窯跡群	279	東山城跡	304	関宿陣屋跡

2. 高石市

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
5	水源池遺跡	8	大園遺跡	12	清高小学校校庭遺跡
6	綾井東遺跡	10	無名塚古墳	14	取石遺跡
7	綾井今池遺跡	11	富木車塚古墳	16	大園古墳

3. 泉大津市

No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名
6	穴師遺跡	10	池上曾根遺跡	19	曾根城跡
8	豊中遺跡	(14)	大園遺跡)	21	大福寺跡
9	七ノ坪遺跡	18	千原城跡	22	刈田城跡

4. 和泉市

No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名
1	番所塚古墳	37	黒鳥山荘遺跡	(86)	陶邑窯跡群)
2	黄金塚古墳	38	禅寂寺 (阪本寺跡)	87	池田下遺跡
3	観音寺跡 (信太寺跡)	39	観音寺城跡	88	池田山古墳群
4	貝吹山古墳	40	観音寺山遺跡	89	万町北遺跡
5	菩提池廃寺	41	狐塚古墳	90	ウトジ池古墳群
(7)	池上曾根遺跡)	42	明王院跡 (池田寺跡)	91	向代古墳群
8	聖神社 2号墳	44	池田山遺跡	93	A 87地点遺跡
9	聖神社境内 1号墳	48	明神原古墳	94	A 1 地点遺跡
11	大野池遺跡	49	マイ山古墳	95	A 81地点遺跡
13	原作 1号墳	59	和泉国分寺跡	96	A 105地点遺跡
14	原作 2号墳	64	上代遺跡	98	A 15地点遺跡
15	阿闍梨池西古墳	65	上町遺跡	99	A 17地点遺跡
16	惣ヶ池古墳	69	妙法寺跡	100	A 20地点遺跡
17	惣ヶ池遺跡	75	府中遺跡 (伯太遺跡)	101	A 124地点遺跡
18	道田池古墳群	76	和気遺跡	102	A 129地点遺跡
19	菩提池古墳	77	寺門古墳・古墓	103	A 134地点遺跡
20	次郎池東古墳	78	願成遺跡	104	A 54地点遺跡
21	太之坊池火葬墓	81	万町遺跡	105	B 25号古墳
22	丸笠山古墳	(83)	大園遺跡)	106	B 26号古墳
33	信太千塚古墳群	(84)	豊中遺跡)	107	B 24号古墳
36	和泉寺跡	85	和泉国府跡	108	B 23号古墳

No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名
117	B13号古墳	127	B33号古墳	143	カニヤ塚古墳
118	B 2号古墳	128	B34号古墳	144	葛葉遺跡
119	B 3号古墳	129	B35号古墳	145	山田古墳群
120	B 4号古墳	130	B36号古墳	146	聖神社遺跡
121	B12号古墳	131	B37号古墳	147	辻塚
122	B 9号古墳	132	B38号古墳	148	狐塚古墳
123	B10号古墳	133	B39号古墳	149	鍋塚古墳
124	B11号古墳	135	B32号古墳	150	王塚古墳
125	B 7号古墳	137	池田寺遺跡	152	伯太藩陣屋跡
126	B 8号古墳	140	国府城跡		

5. 岸和田市

No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名	No.	遺 跡 名
37	田治米廃寺	55	東山古墳	144	箱谷古墳
38	田治米宮内遺跡	56	三田古墳	159	白鳥遺跡
40	松尾池尻埴輪窯跡	78	儀平山古墳	162	軽部池西遺跡
41	西山古墳	93	イナリ古墳	163	山ノ内遺跡
42	お立場古墳	96	岡山御坊跡	164	山直北遺跡
43	馬塚古墳	97	楠本神社古墳	165	三田遺跡
44	小金塚古墳	102	土居城跡	168	上フジ遺跡
45	重の原古墳	110	石塚（五塚）古墳	170	水込遺跡
48	岡山矢取遺跡	115	高山古墳（伝楠本城）	171	黒石遺跡
49	重の原遺跡	118	狐塚古墳	172	山直中遺跡
51	どぞく遺跡	121	川原古銭出土地	173	蓮華光寺跡
53	摩湯山古墳	136	岡山遺跡	174	芝ノ垣外遺跡
54	馬子塚古墳	137	三田墓地	176	土井ノ木遺跡

参考文献一覧

1. 堺市

泉田中古墳群 293

- 1 1974 「泉田中古墓群」『長峯丘陵遺跡分布調査概要―堺市片蔵・泉田中・富蔵・釜室所在―』大阪府文化財調査概要1973-1 大阪府教育委員会

上池東遺跡 290

- 2 1974 「上池東遺跡」『長峯丘陵遺跡分布調査概要―堺市片蔵・泉田中・富蔵・釜室所在―』大阪府文化財調査概要1973-1 大阪府教育委員会

牛石古墳群 142

- 3 1978 「牛石古墳群」p.784,912,943『大阪府史』第1巻 大阪府
- 4 1978 「陶邑II」『大阪府文化財調査報告書29』（財）大阪文化財センター
- 5 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「牛石古墳群」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社

岡田寺跡 291

- 6 1974 「岡田寺跡」『長峯丘陵遺跡分布調査概要―堺市片蔵・泉田中・富蔵・釜室所在―』大阪府文化財調査概要1973-1 大阪府教育委員会
- 7 1984 『記された世界―大阪府下出土の墨書土器・文字瓦と木簡展―』大阪府立泉北考古資料館
- 8 1985 「岡田廃寺」『春季特別展 堺の遺跡と出土品』堺市博物館

片蔵遺跡 280

- 9 1974 「片蔵遺跡」『長峯丘陵遺跡分布調査概要―堺市片蔵・泉田中・富蔵・釜室所在―』大阪府文化財調査概要1973-1 大阪府教育委員会

上遺跡 247

- 10 1985 『上遺跡発掘調査概要―堺市上・草部所在―』大阪府教育委員会
- 11 1985 「上遺跡」『春季特別展 堺の遺跡と出土品』堺市博物館
- 12 1986 渡辺昌宏「泉州の縄文時代」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
- 13 1986 「上遺跡 1984年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議

倉谷・富蔵遺跡 292

- 14 1974 「倉谷遺跡」『長峯丘陵遺跡分布調査概要一堺市片蔵・泉田中・富蔵・釜室所在一』大阪府文化財調査概要1973-1 大阪府教育委員会
- 15 1985 「長峯地区ほ場整備事業に伴う 長峯丘陵遺跡発掘調査概要・I」『大阪府文化財調査概要1984年度』 大阪府教育委員会

小角田遺跡 286

- 16 1985 「小角田遺跡」『春季特別展 堺の遺跡と出土品』 堺市博物館
- 17 1986 「小角田遺跡 1984年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議

小阪遺跡 181

- 18 1986 服部文章「初現的須恵器陶工集団と集落—小阪遺跡（その3）の調査を中心として—」『第4回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』（財）大阪文化財センター

御坊山古墳 131

- 19 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「御坊山古墳」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社
- 20 1986 『堺市の文化財』 堺市教育委員会

陶邑窯跡群 246

- 21 1954 「光明池の窯跡」『和泉考古学』1 大阪府立泉大津高校地歴部
- 22 1958 森 浩一「和泉河内窯の須恵器編年」『世界陶磁全集』1 小学館
- 23 1961 石部正志「堺市光明池古窯跡群の発掘」『考古学研究』30 考古学研究会
- 24 1962 森 浩一「大阪府南部須恵器窯跡群の今夏の調査」『先史学研究』4 同志社大学先史学会
- 25 1962 「陶器山須恵器窯跡の調査」『大阪府の文化財』 大阪府教育委員会
- 26 1963 『陶器山周辺地域窯跡調査概報1963』 大阪府教育委員会
- 27 1964 『陶器山周辺地域窯跡調査概報1964』 大阪府教育委員会
- 28 1965 『陶器山周辺地域窯跡調査概報1965』 大阪府教育委員会
- 29 1965 「四、和泉と窯業生産」『和泉市史』第1巻 大阪府和泉市役所
- 30 1966 藤沢一夫「陶邑窯址群」『大阪府教育委員会月報』18-1 大阪府教育委員会
- 31 1966 藤沢一夫「泉北ニュータウン計画地域の須恵器窯跡群の発掘調査」『大阪府教育委員会月報』18-11 大阪府教育委員会
- 32 1966 『陶邑須恵器窯跡群調査概要1』 大阪府教育委員会
- 33 1966 「濁り池窯跡」『信太山遺跡調査概報』 信太山遺跡調査団

- 34 1966 「大野池西窯跡」『信太山遺跡調査概報』 信太山遺跡調査団
- 35 1966 「太之坊池窯跡」『信太山遺跡調査概報』 信太山遺跡調査団
- 36 1966 「志保池窯跡」『信太山遺跡調査概報』 信太山遺跡調査団
- 37 1967 『和泉光明池地区窯跡群発掘調査概要（日本住宅公団 光明池団地）』大阪府教育委員会
- 38 1967 藤沢一夫「光明池地区須恵器窯跡群の発掘調査」『大阪府教育委員会月報』19-2 大阪府教育委員会
- 39 1968 石部正志「和泉の古窯址群と三大弥生遺跡の現状―「泉州文化財を守る連絡会議」の歩み―」『考古学研究』56 考古学研究会
- 40 1970 『陶邑 堺市泉北ニュータウン内埋蔵文化財調査概要』 大阪府教育委員会 大阪府企業局
- 41 1971 「陶邑」 p.75-76,87-96,98-103 『堺市史 続編』第1巻 堺市
- 42 1971 『陶邑 堺市泉北ニュータウン内泉ヶ丘地区埋蔵文化財調査概要』 (財)大阪文化財センター
- 43 1972 『高蔵寺窯跡発掘調査概報―TK244・245・246・247―』 堺市教育委員会
- 44 1973 辻川陽一「阪南古窯址群出土の硯」『古代学研究』70 古代学研究会
- 45 1975 中村 浩「堺市大野池34号窯発掘調査概要」『節香仙』26 大阪府教育委員会
- 46 1976 「陶邑Ⅰ」『大阪府文化財調査報告書28』 (財)大阪文化財センター
- 47 1976 「陶邑」古窯跡群の検討」『古代を考える』4 古代を考える会
- 48 1976 田中豊一「陶邑と須恵器生産について」『摂河泉文化資料』2 北村文庫会
- 49 1977 「陶邑Ⅱ」『大阪府文化財調査報告書29』 (財)大阪文化財センター
- 50 1977 中村 浩「須恵器生産に関する一考察 和泉陶邑窯における陶工組織について」『考古学雑誌』63-1 日本考古学会
- 51 1978 「陶邑Ⅲ」『大阪府文化財調査報告書30』 (財)大阪文化財センター
- 52 1978 中村 浩「奈良時代後期の須恵器生産 和泉陶邑窯出土銘片をめぐる」『大谷女子大学紀要』1-13 大谷女子大学
- 53 1978 「陶邑窯跡群」 p.758-763,774-788 『大阪府史』第1巻 大阪府
- 54 1979 「陶邑Ⅳ」『大阪府文化財調査報告書31』 (財)大阪文化財センター
- 55 1979 『光明池第1号窯跡発掘調査概要』 和泉市教育委員会
- 56 1979 中村 浩「陶邑の生活と生産について1 その概観的スケッチ」『摂河泉文化資料』16 摂河泉地域研究会

- 57 1979 中村 浩「須恵器による古墳の年代」『考古学ジャーナル』164 ニューサイエンス社
- 58 1980 中村 浩「陶邑と生産と生活について」『摂河泉文化資料』23 摂河泉地域史研究会
- 59 1981 中村 浩「須恵器の生産と流通」『考古学研究』110 考古学研究会
- 60 1981 中村 浩『和泉陶邑窯の研究—須恵器生産の基礎的考察』 柏書房
- 61 1982 「陶邑V」『大阪府文化財調査報告書33』 (財)大阪文化財センター
- 62 1982 石部正志「大阪南部須恵器窯跡群と泉北ニュータウン」『ヒストリア』96 大阪歴史学会
- 63 1982 『泉北丘陵内遺跡発掘調査概要—池田寺跡、須恵器窯跡、豊田遺跡—』大阪府教育委員会
- 64 1982 和田晴吾「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』 平凡社
- 65 1982 田辺昭三「初期須恵器について」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』 平凡社
- 66 1982 檜崎彰一「日本古代の陶硯—とくに分類について—」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』 平凡社
- 67 1982 西村 康「陶邑・猿投・牛頸—須恵器生産の進展—」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 文化財論叢』 同朋舎
- 68 1983 「谷山池周辺窯跡群」『府中遺跡群発掘調査概要III』 和泉市教育委員会
- 69 1983 『TG41号窯発掘調査概要—泉北ニュータウン内椀池地内』 大阪府教育委員会
- 70 1983 中村 浩「古代末—中世末における窯業生産の一形態 堺市美木多瓦窯跡群を中心として」『藤沢一夫先生古稀記念 考古学論叢』 古代を考える会
- 71 1983 竹内理三編『27 大阪府 大阪府地名大辞典』角川日本地名大辞典 角川書店
- 72 1984 『記された世界—大阪府下出土の墨書土器・文字瓦と木簡展—』 大阪府立泉北考古資料館
- 73 1984 芝野圭之助「飯蛸壺形土器をめぐる諸問題」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』 (財)大阪文化財センター
- 74 1984 「大野池地区224号窯 1982年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』創刊号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
- 75 1984 芝野圭之助「陶邑をめぐる諸問題」『青海波』創刊号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
- 76 1985 「C7号窯」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要IV』 和泉丘陵内遺跡調査会
- 77 1985 「四ツ池遺跡—YOB87・88— 陶邑・陶器山地区250号窯—MT-250号窯—」『昭和59年度国庫補助事業発掘調査報告書』 堺市教育委員会
- 78 1986 「C7-2,C7-3窯(陶邑谷山池地区) 1984年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議

- 79 1986 中村 浩「初期須恵器の窯跡—近畿地域とくに陶邑窯跡群および一須賀窯跡について—」
『考古学ジャーナル』259 ニューサイエンス社
- 80 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「陶邑古窯址群」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社
- 81 1986 『堺市の文化財』 堺市教育委員会

大平寺遺跡 266

- 82 1983 「大平寺遺跡発掘調査報告—堺市平井地点—」『堺市文化財調査報告13』 堺市教育委員会
- 83 1984 「大平寺遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書 I』（財）大阪文化財センター
- 84 1985 「大平寺遺跡」『春季特別展 堺の遺跡と出土品』 堺市博物館
- 85 1985 安里 進「須恵器の断面色層と6世紀の焼成技術」『考古学研究』127 考古学研究会
- 86 1986 渡辺昌宏「泉州の縄文時代」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議

田園遺跡 270

- 87 1983 『田園遺跡発掘調査中間報告書』 堺市教育委員会
- 88 1983 「田園II」『堺市文化財調査報告19』 堺市教育委員会
- 89 1985 「田園遺跡」『春季特別展 堺の遺跡と出土品』 堺市博物館

辻之遺跡 267

- 90 1983 石田 修、十河稔郁「堺市辻之遺跡の調査」『考古学ジャーナル』214 ニューサイエンス社
- 91 1983 井藤 徹「大阪府 1982年度の考古学界の動向」『考古学ジャーナル』218 ニューサイエンス社
- 92 1984 「辻之遺跡 1982年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』創刊号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
- 93 1985 「辻之遺跡」『春季特別展 堺の遺跡と出土品』 堺市博物館

鶴田池東遺跡 160

- 94 1980 山中淳喜「鶴田池東遺跡の調査」『摂河泉文化資料』21 摂河泉地域史研究会
- 95 1980 『西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会
- 96 1982 『鶴田池東遺跡発掘調査概要II—府道松原・泉大津線建設に伴う—』 大阪府教育委員会
- 97 1984 『記された世界—大阪府下出土の墨書土器・文字瓦と木簡展—』 大阪府立泉北考古資料館

- 98 1984 芝野圭之助「飯蛸壺形土器をめぐる諸問題」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
(財)大阪文化財センター
- 99 1986 渡辺昌宏「泉州の縄文時代」『青海波』第3号 泉州の自然と歴史を守る連絡会議
- 陶器千塚 130
- 100 1971 「陶器千塚」p.101-102『堺市史 続編』第1巻 堺市
- 101 1978 「陶器千塚」p.784,911-912,940-941『大阪府史』第1巻 大阪府
- 102 1984 『四ツ池遺跡第85地区 陶器千塚29号墳』堺市教育委員会
- 103 1985 「陶器千塚29号墳 1983年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』第2号 泉州の自然
と文化財を守る連絡会議
- 104 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「陶器千塚」『大阪府の地名Ⅱ』日本歴史地名大系28 平凡社
- 豊田遺跡 278
- 105 1982 『泉北丘陵内遺跡発掘調査概要一池田寺跡、須恵器窯跡、豊田遺跡一』大阪府教育委員
会
- 西浦橋遺跡 161
- 106 1980 『西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 107 1981 『西浦橋遺跡発掘調査概要一府道松原・泉大津線建設に伴う発掘調査一』大阪府教育委
員会
- 108 1983 「西浦橋遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告12』堺市教育委員会
- 109 1983 広瀬和雄「古代の開発」『考古学研究』118 考古学研究会
- 110 1983 井藤 徹「大阪府 1982年の考古学界の動向」『考古学ジャーナル』218 ニューサイエン
ス社
- 111 1984 「西浦橋遺跡 1982年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』創刊号 泉州の自然と文
化財を守る連絡会議
- 112 1984 「西浦橋遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』(財)大阪文化財センター
- 113 1984 芝野圭之助「飯蛸壺形土器をめぐる諸問題」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
(財)大阪文化財センター
- 114 1984 『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ一西浦橋遺跡一』(財)大阪文化財セン
ター
- 115 1985 安里 進「須恵器の断面色層と6世紀の焼成技術」『考古学研究』127 考古学研究会

- 116 1986 渡辺昌宏「泉州の縄文時代」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
西山城跡 289
- 117 1978 「陶邑II」『大阪府文化財調査報告書29』 (財)大阪文化財センター
野々井遺跡 275
- 118 1978 「野々井遺跡」p.181『大阪府史』第1巻 大阪府
- 119 1978 「陶邑II」『大阪府文化財調査報告書29』 (財)大阪文化財センター
- 120 1986 渡辺昌宏「泉州の縄文時代」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
- 121 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「野々井遺跡」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社
野々井南遺跡 277
- 122 1978 「陶邑II」『大阪府文化財調査報告書29』 (財)大阪文化財センター
菱木遺跡 249
- 123 1971 「菱木の銅鐸」p.40-42『堺市史 続編』第1巻 堺市
- 124 1979 森井貞雄「畿内出土の銅鐸とその関連資料(1)」『摂河泉文化資料』14 摂河泉文庫
- 125 1983 竹内理三編「菱木遺跡」『27 大阪府 大阪府地名大辞典』角川日本地名大辞典 角川書店
- 126 1986 「袈裟禪文銅鐸 堺市菱木出土」『大阪府の銅鐸図録』大阪府立泉北考古資料館
菱木下遺跡 162
- 127 1983 井藤 徹「大阪府 1982年の考古学界の動向」『考古学ジャーナル』218 ニューサイエンス社
- 128 1984 「記された世界—大阪府下出土の墨書土器・文字瓦と木簡展—」大阪府立泉北考古資料館
- 129 1984 「菱木下遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』(財)大阪文化財センター
- 130 1984 芝野圭之助「飯蛸壺形土器をめぐる諸問題」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』
(財)大阪文化財センター
- 131 1985 『都市計画道路松原泉大津線建設に伴う 菱木下遺跡発掘調査概要・1—堺市菱木所在—』
大阪府教育委員会
- 132 1985 尾上 実「大阪南部の中世土器—和泉型瓦器椀—」『中近世土器の研究』日本中世土器研究会
- 133 1986 「菱木下遺跡 1984年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議

檜尾塚原古墳群 146

- 134 1978 「檜尾古墳群」 p.784,913,943 『大阪府史』第1巻 大阪府
135 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「檜尾塚原古墳群」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社

平井遺跡 263

- 136 1985 「平井遺跡」『堺の遺跡と出土品』 堺市博物館

深田橋遺跡 152

- 137 1973 「陶邑・深田」『大阪府文化財調査抄報』第2輯 大阪府教育委員会
138 1980 米田敏幸「畿内内陸部の塩と古代社会—古墳時代中期社会の復元的考察—」『摂河泉文化資料』23 摂河泉地域史研究会
139 1982 川西宏幸「形容詞を持たぬ土器」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』 平凡社

万崎遺跡 159

- 140 1979 佐久間貴士「縄文時代の大阪」『摂河泉文化資料』18 摂河泉地域史研究会
141 1981 「万崎遺跡発掘調査報告—市立福泉小学校分離校用地内—」『堺市文化財調査報告8』 堺市教育委員会
142 1984 芝野圭之助「飯蛸壺形土器をめぐる諸問題」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』(財)大阪文化財センター
143 1985 「万崎遺跡」『春季特別展 堺の遺跡と出土品』 堺市博物館
144 1986 渡辺昌宏「泉州の縄文時代」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議

万崎池遺跡 163

- 145 1980 「<摂河泉と各地のニュース>万崎池遺跡」『摂河泉文化資料』23 摂河泉地域史研究会
146 1984 『府道松原・泉大津線建設に伴う 万崎池遺跡発掘調査概要—堺市大平寺所在—』 大阪府教育委員会
147 1984 「万崎池遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』(財)大阪文化財センター
148 1984 芝野圭之助「飯蛸壺形土器をめぐる諸問題」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』(財)大阪文化財センター

山田遺跡 138

- 149 1959 「山田遺跡の住居址とその附近」『和泉考古学』4 大阪府立泉大津高校地歴部
150 1976 真鍋昌宏「堺市山田遺跡出土遺物の整理について」『摂河泉文化資料』3 北村文庫会
151 1978 「山田遺跡」 p.599,777 『大阪府史』第1巻 大阪府

2. 高石市

大園遺跡 8

- 152 1974 『大園遺跡・豊中遺跡範囲確認調査概要—高石市取石・和泉大津市豊中所在—』大阪府文化財調査概要1973-11 大阪府教育委員会
- 153 1975 『大園遺跡発掘調査概報1』 大園遺跡調査会
- 154 1975 『大園遺跡発掘調査概要II』大阪府文化財調査概要1974-15 大阪府教育委員会
- 155 1976 『大園遺跡発掘調査概要III』大阪府文化財調査概要1975 大阪府教育委員会
- 156 1976 『大園遺跡発掘調査概要』 高石市教育委員会
- 157 1976 『大園遺跡発掘調査概報2』 大園遺跡調査会
- 158 1976 「大園遺跡の発掘調査について」『大阪府教育委員会月報』28-3 大阪府教育委員会
- 159 1977 『大園遺跡発掘調査概要』 高石市教育委員会
- 160 1977 『泉大津市助松団地開発予定地内埋蔵文化財試掘調査報告書』(財)大阪文化財センター
- 161 1978 広瀬和雄「大園遺跡の集落構成—古墳時代の—資料」『摂河泉文化資料』10 摂河泉文庫
- 162 1978 広瀬和雄「古墳時代の集落類型—西日本を中心として—」『考古学研究』97 考古学研究会
- 163 1978 池上・四ツ池遺跡を守る連絡会議事務局「池上・四ツ池・大園遺跡と泉州における保存運動の課題」『考古学研究』97 考古学研究会
- 164 1978 「大園遺跡」p.130,181,182,542,558,599,777,809『大阪府史』第1巻 大阪府
- 165 1978 『大園遺跡発掘調査概要』 高石市教育委員会
- 166 1978 『大園遺跡・古池北遺跡発掘調査概要—高石市西取石・泉大津市豊中所在—』大阪府教育委員会
- 167 1979 藤並行三「大阪府下における開発計画と集落遺跡の保存」『考古学研究』100考古学研究会
- 168 1979 小笠原好彦「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』100 考古学研究会
- 169 1979 『大園遺跡発掘調査概要』 高石市教育委員会
- 170 1979 『大園遺跡・助松地区第1次発掘調査概要』 豊中・古池遺跡調査会
- 171 1979 野上丈助「大阪府 特集地域考古学界の動向II」『考古学ジャーナル』169 ニューサイエンス社
- 172 1980 森 茂「古墳時代泉州の漁撈について」『摂河泉文化資料』22 摂河泉文庫
- 173 1980 『大園遺跡発掘調査概要』 高石市教育委員会

- 174 1980 『大園遺跡・古池北遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会
- 175 1979 小笠原好彦「古代寺院に先行する掘立柱建物集落」『考古学研究』111 考古学研究会
- 176 1981 『大園遺跡発掘調査概要』 高石市教育委員会
- 177 1981 『大園遺跡発掘調査概要V—府道松原・泉大津線建設予定地内—』 大阪府教育委員会
- 178 1981 『大園遺跡発掘調査概要VI—第2阪和国道建設に伴う発掘調査—』 大阪府教育委員会
- 179 1982 「大園遺跡」『府中遺跡群発掘調査概要II』 和泉市教育委員会
- 180 1982 『大園遺跡発掘調査概要』 高石市教育委員会
- 181 1982 『大園遺跡発掘調査概要VII—府道松原・泉大津線建設予定地内—』 大阪府教育委員会
- 182 1982 和田晴吾「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』 平凡社
- 183 1982 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 文化財論叢』 同朋舎
- 184 1983 広瀬和雄「古代の開発」『考古学研究』118 考古学研究会
- 185 1983 近藤義郎『前方後円墳の時代』日本歴史叢書 岩波書店
- 186 1983 「大園遺跡」『府中遺跡群発掘調査概要III』 和泉市教育委員会
- 187 1983 『大園遺跡』 高石市教育委員会
- 188 1983 「大園遺跡」『泉大津市史』第2巻 考古資料編 泉大津市史編纂委員会
- 189 1983 竹内理三編「大園遺跡」『27 大阪府 大阪府地名大辞典』角川日本地名大辞典 角川書店
- 190 1983 都出比呂志「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』116 考古学研究会
- 191 1984 『記された世界—大阪府下出土の墨書土器・文字瓦と木簡展—』 大阪府立泉北考古資料館
- 192 1984 芝野圭之助「飯蛸壺形土器をめぐる諸問題」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』
(財)大阪文化財センター
- 193 1984 『大園遺跡発掘調査概要』 高石市教育委員会
- 194 1984 「大園遺跡」『和泉市の文化財』 和泉市教育委員会
- 195 1985 「大園遺跡」『府中遺跡群発掘調査概要V』 和泉市教育委員会
- 196 1986 渡辺昌宏「泉州の縄文時代」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
- 197 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「大園遺跡」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社
- 198 1986 「泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報」『泉大津市文化財調査報告12』 泉大津市教育委員会
- 199 1986 「大園遺跡」『高石市史』第2巻 史料編I 高石市
- 200 1986 橋本久和「畿内の黒色土器(1)」『中近世土器の基礎研究II』 日本中世土器研究会

大園古墳 16

- 201 1975 広瀬和雄「和泉北部における古墳群の動向—地域における政治関係についての基礎的諸考察—」『大園遺跡発掘調査概要II』大阪府文化財調査概要1974-15 大阪府教育委員会
- 202 1978 「大園古墳」p.741『大阪府史』第1巻 大阪府
- 203 1980 石部正志他「帆立貝形古墳の築造企画」『考古学研究』106 考古学研究会
- 204 1986 「大園古墳」『高石市史』第2巻 史料編I 高石市

水源地遺跡 5

- 205 1980 『伽羅橋遺跡・伽羅橋東遺跡・水源地遺跡発掘調査報告』高石市教育委員会
- 206 1984 神谷正弘「大阪府高石市水源地遺跡の初期須恵器を中心として」『第2回近畿地方埋蔵文化財担当者研究会資料』(財)大阪文化財センター
- 207 1984 芝野圭之助「飯蛸壺形土器をめぐる諸問題」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』(財)大阪文化財センター
- 208 1985 『水源地遺跡発掘調査報告』高石市水道部
- 209 1986 「水源地遺跡」『高石市史』第2巻 史料編I 高石市

3. 泉大津市

穴師遺跡 6

- 210 1984 芝野圭之助「飯蛸壺形土器をめぐる諸問題」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』(財)大阪文化財センター
- 211 1986 「泉大津市文化財発掘調査概報4」『泉大津市文化財調査報告12』泉大津市教育委員会

池上曾根遺跡 10

- 212 1954 「和泉町池上弥生式遺跡」『和泉考古学』1 大阪府立泉大津高校地歴部
- 213 1961 「和泉市池上弥生式遺跡」『和泉考古学』5 最近の調査による和泉の古代遺跡 大阪府立泉大津高校地歴部
- 214 1961 「大阪府池上弥生遺跡の調査」『古代学研究』28 古代学研究会
- 215 1965 「第1章 原始社会 池上弥生遺跡」『和泉市史』第1巻 大阪府和泉市役所
- 216 1967 『和泉市池上弥生式遺跡発掘調査概報』大阪府教育委員会
- 217 1967 石部正志「文化財保護運動の危機と紀元節復活」『考古学研究』51 考古学研究会
- 218 1968 石部正志「和泉の古窯址群と三大弥生遺跡の現状—「泉州文化財を守る連絡会議」の歩み」『考古学研究』56 考古学研究会

- 219 1968 池上・四ツ池遺跡を守る協議会事務局「池上・四ツ池遺跡を守る運動—中間報告—」『考古学研究』58 考古学研究会
- 220 1969 「津島・四ツ池・池上・宮の原など」『考古学研究』59 考古学研究会
- 221 1969 池上・四ツ池遺跡を守る協議会「緊急段階をむかえ池上・四ツ池遺跡の保護運動を一層つよめよう」『考古学研究』59 考古学研究会
- 222 1969 石部正志「畿内弥生文化の成立と発展に関する若干の問題提起」『考古学研究』60 考古学研究会
- 223 1969 「池上・四ツ池遺跡発掘調査概要—第二阪和国道内遺跡調査会中間報告—」『大阪府教育委員会月報』21-5 大阪府教育委員会
- 224 1969 「池上・四ツ池遺跡発掘調査概要—第二阪和国道内遺跡調査会報告—」『大阪府教育委員会月報』21-8 大阪府教育委員会
- 225 1969 池上・四ツ池遺跡を守る協議会「池上・四ツ池遺跡の発掘と保存運動のとりくみ」『考古学研究』61 考古学研究会
- 226 1969-1970『池上・四ツ池遺跡1-23』 第二阪和国道内遺跡調査会
- 227 1970『池上・四ツ池』 第二阪和国道内遺跡調査会
- 228 1970 池上・四ツ池遺跡を守る協議会事務局「全国民の力で池上・四ツ池遺跡の完全保存をかちとろう」『考古学研究』63 考古学研究会
- 229 1970 池上・四ツ池遺跡を守る協議会「池上・四ツ池にブルトーザー入る」『考古学研究』64 考古学研究会
- 230 1970 池上・四ツ池遺跡を守る協議会「当局今夏より「第二阪和国道建設」強行の構え」『考古学研究』65 考古学研究会
- 231 1971 「登呂遺跡をしのぐ弥生時代の大集落跡—池上遺跡（和泉市池上町）発掘調査の概要」『大阪府教育委員会月報』23-7 大阪府教育委員会
- 232 1971『第二阪和国道内遺跡発掘調査報告書4—昭和46年度—』 第二阪和国道内遺跡調査会
- 233 1971『四ツ池・池上遺跡発掘調査概要—堺市浜寺船尾町・和泉市池上町所在—』大阪府文化財調査概要1970-6 大阪府教育委員会
- 234 1971 池上・四ツ池遺跡を守る協議会事務局「重要性が完全に立証された池上=曾根・四ツ池遺跡の近況」『考古学研究』71 考古学研究会
- 235 1972 池上・四ツ池遺跡を守る協議会「宅地化の波から池上・曾根遺跡を守ろう」『考古学研究』74 考古学研究会

- 236 1973 『第二阪和国道内遺跡発掘調査報告書1・2・3—昭和43・44・45年度—』 第二阪和国道内遺跡調査会
- 237 1973 『池上遺跡発掘調査概要II』 大阪府教育委員会
- 238 1974 『池上遺跡調査概要その1』 大阪府教育委員会
- 239 1974 泉州文化財を守る連絡会事務局「池上・四ツ池遺跡をめぐる情勢」『考古学研究』80 考古学研究会
- 240 1974 酒井龍一「石庖丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究』82 考古学研究会
- 241 1974 『池上遺跡発掘調査概要III』 大阪府教育委員会
- 242 1975 『池上遺跡発掘調査概要V—泉大津市曾根町所在府道松ヶ浜・曾根線—』 大阪府教育委員会
- 243 1976 『池上遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会
- 244 1976 藤並行三「池上＝曾根遺跡保存運動の現状と課題」『考古学研究』88 考古学研究会
- 245 1976 池上・四ツ池遺跡を守る協議会「池上＝曾根遺跡その後と課題」『考古学研究』89 考古学研究会
- 246 1977 『池上遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会
- 247 1977 石神 怡「池上弥生ムラの変遷」『考古学研究』92 考古学研究会
- 248 1977 安田喜憲「「倭国乱」期の自然環境」『考古学研究』92 考古学研究会
- 249 1977 酒井龍一「池上遺跡 そのムラと生活 上」『摂河泉文化資料』5 摂河泉文庫
- 250 1977 酒井龍一「池上遺跡 そのムラと生活 2」『摂河泉文化資料』6 摂河泉文庫
- 251 1978 『池上遺跡 第4分冊の1・2木器編』 (財)大阪文化財センター
- 252 1978 辻尾栄市「池上遺跡踏査予報」『郵政考古会報資料』4 大阪郵政考古会
- 253 1978 池上・四ツ池遺跡を守る協議会事務局「池上・四ツ池・大園遺跡と泉州における保存運動の課題」『考古学研究』97 考古学研究会
- 254 1978 酒井龍一「池上遺跡 そのムラと生活 3」『摂河泉文化資料』9 摂河泉文庫
- 255 1978 酒井龍一「銅鐸・その内なる世界」『摂河泉文化資料』10 北村文庫会内摂河泉文庫
- 256 1978 『池上曾根遺跡発掘調査概要—和泉市池上町・泉大津市曾根町所在—』 大阪府教育委員会
- 257 1978 酒井龍一「池上遺跡 そのムラと生活 4」『摂河泉文化資料』12 摂河泉文庫
- 258 1978 「池上遺跡」p.309,312,525,534,544,547,598,791『大阪府史』第1巻 大阪府
- 259 1979 『池上遺跡発掘調査概要—和泉市池上町・泉大津市曾根町所在—』 大阪府教育委員会

- 260 1979 『池上遺跡 第3分冊の1・2石器編』 (財)大阪文化財センター
- 261 1979 藤並行三「大阪府下における開発計画と集落遺跡の保存」『考古学研究』100 考古学研究会
- 262 1979 石神 怡「池上遺跡について」『考古学研究』100 考古学研究会
- 263 1979 森井貞雄「畿内出土の銅鐸とその関連資料(1)」『摂河泉文化資料』14 摂河泉文庫
- 264 1979 酒井龍一「池上遺跡 そのムラと生活 5」『摂河泉文化資料』17 摂河泉文庫
- 265 1979 酒井龍一「池上遺跡 そのムラと生活 6」『摂河泉文化資料』18 摂河泉文庫
- 266 1979 佐久間貴士「縄文時代の大阪」『摂河泉文化資料』18 摂河泉文庫
- 267 1979 『池上遺跡発掘調査概要X I (第二阪和国道建設に伴う発掘調査)』 大阪府教育委員会
- 268 1979 野上丈助「大阪府 特集 地域考古学界の動向II」『考古学ジャーナル』169 ニューサイエンス社
- 269 1980 『池上遺跡発掘調査概要X II一和泉市池上町・泉大津市曾根町・森町所在一』 大阪府教育委員会
- 270 1980 『池上遺跡一仮称池上小学校建設に伴う発掘調査概要一』 仮称池上小学校予定地内遺跡調査会
- 271 1980 『池上遺跡 第2分冊 土器編』 (財)大阪文化財センター
- 272 1980 『池上・四ツ池遺跡一第6分冊 自然遺物編一』 (財)大阪文化財センター
- 273 1981 『池上遺跡発掘調査概要X III一和泉市池上町・泉大津市曾根町・森町所在一』 大阪府文化財調査概要1981 大阪府教育委員会
- 274 1982 金関 恕「神を招く鳥」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』 平凡社
- 275 1982 和田晴吾「弥生・古墳時代の漁具」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』 平凡社
- 276 1982 『池上・曾根遺跡発掘調査概要X IV』 大阪府教育委員会
- 277 1982 『池上遺跡一遺跡南部における調査一』 大阪府教育委員会
- 278 1982 泉州の自然と文化財を守る連絡会議「池上・曾根遺跡を守る緊急アヒール」『考古学研究』114 考古学研究会
- 279 1983 『池上・曾根遺跡発掘調査概要X V』 大阪府教育委員会
- 280 1983 井藤 徹「大阪府 特集 1982年の考古学界の動向」『考古学ジャーナル』218 ニューサイエンス社
- 281 1983 「池上遺跡」『泉大津市史』第2巻 考古資料編 泉大津市史編纂委員会
- 282 1983 竹内理三編「池上遺跡」『27 大阪府 大阪府地名大辞典』角川日本地名大辞典 角川書店

- 283 1983 都出比呂志「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』116 考古学研究会
- 284 1983 近藤義郎『前方後円墳の時代』日本歴史叢書 岩波書店
- 285 1983 広瀬和雄「古代の開発」『考古学研究』118 考古学研究会
- 286 1984 「池上曾根遺跡」『府中遺跡群発掘調査概要IV』 和泉市教育委員会
- 287 1984 「池上曾根遺跡」『和泉市の文化財』 和泉市教育委員会
- 288 1984 『池上遺跡発掘調査概要XVI』 大阪府教育委員会
- 289 1984 芝野圭之助「飯蛸壺形土器をめぐる諸問題」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』
(財)大阪文化財センター
- 290 1985 「池上曾根遺跡」『府中遺跡群発掘調査概要V』 和泉市教育委員会
- 291 1985 「池上曾根遺跡 1983年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』第2号 泉州の自然と
文化財を守る連絡会議
- 292 1985 井藤暁子『土器から見た池上曾根遺跡』 池上曾根遺跡博物館建設運動実行委員会
- 293 1985 「池上曾根遺跡発掘調査概要XVII」『大阪府文化財調査概要1984年度』 大阪府教育委員会
- 294 1985 都出比呂志「環濠集落の構造と盛行期」『講座考古地理学4 村落と開発』 学生社
- 295 1985 「泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報3」『泉大津市文化財調査報告10』 泉大津市教育委員
会
- 296 1985 酒井龍一「III. 弥生時代」『図説 発掘が語る日本史 4 近畿編』 新人物往来社
- 297 1985 石神 怡「環濠集落としての池上曾根遺跡」『特別展市制30周年 黄金塚・施福寺経塚の遺
宝一和泉の考古一』 和泉市久保惣記念美術館
- 298 1986 渡辺昌宏「泉州の縄文時代」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
- 299 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「池上曾根遺跡」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社
- 300 1986 「破碎銅鐸片 池上遺跡出土」『大阪府の銅鐸図録』 大阪府立泉北考古資料館
- 301 1986 「泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報4」『泉大津市文化財調査報告12』 泉大津市教育委員
会
- 大園遺跡 14 (高石市を参照)
- 七ノ坪遺跡 9
- 302 1961 「泉大津高校北門前出土の土師器 和泉市池上弥生式遺跡」『和泉考古学』5 最近の調査
による和泉の古代遺跡 大阪府立泉大津高校地歴部
- 303 1969 『七ノ坪遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会

- 304 1974 『七ノ坪遺跡発掘調査概要—泉大津市豊中所在—』大阪府文化財調査概要1973-7 大阪府教育委員会
- 305 1975 「七ノ坪遺跡発掘調査概要」『泉大津市文化財調査概要1』 泉大津市教育委員会
- 306 1975 中井貞夫「泉大津市七ノ坪遺跡出土の土師質甗」『大阪文化誌』4 (財)大阪文化財センター
- 307 1978 「七ノ坪遺跡」p.542『大阪府史』第1巻 大阪府
- 308 1979 小笠原好彦「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」『考古学研究』100 考古学研究会
- 309 1982 川西宏幸「形容詞を持たぬ土器」『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』 平凡社
- 310 1982 「七ノ坪遺跡発掘調査概要II」『泉大津市文化財調査概要7』 泉大津市教育委員会
- 311 1983 広瀬和雄「古代の開発」『考古学研究』118 考古学研究会
- 312 1983 「七ノ坪遺跡」『泉大津市史』第2巻 考古資料編 泉大津市史編纂委員会
- 313 1983 井藤 徹「大阪府 特集 1982年の考古学界の動向」『考古学ジャーナル』218 ニューサイエンス社
- 314 1983 竹内理三編「七ノ坪遺跡」『27 大阪府 大阪府地名大辞典』角川日本地名大辞典 角川書店
- 315 1984 『七ノ坪遺跡発掘調査概要III』 大阪府教育委員会
- 316 1984 芝野圭之助「飯蛸壺形土器をめぐる諸問題」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』 (財)大阪文化財センター
- 317 1985 「七ノ坪遺跡 1983年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』第2号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
- 318 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「七ノ坪遺跡」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社
豊中遺跡 8
- 319 1961 「泉大津市豊中出土の石器類 和泉の弥生式土器と石器」『和泉考古学』5 最近の調査による和泉の古代遺跡 大阪府立泉大津高校地歴部
- 320 1973 『豊中・古池遺跡発掘調査概要I』 豊中・古池遺跡調査会
- 321 1974 『大園遺跡・豊中遺跡範囲確認調査概要』 大阪府教育委員会
- 322 1974 『豊中・古池遺跡発掘調査概要 そのII』 豊中・古池遺跡調査会
- 323 1974 『古池北遺跡発掘調査概要—泉大津市豊中所在—』大阪府文化財調査概要1973 大阪府教育委員会

- 324 1975 『要池遺跡発掘調査概要 I 一泉大津市豊中所在一』大阪府文化財調査概要1974-6 大阪府教育委員会
- 325 1976 『豊中遺跡発掘調査概要』 泉大津市教育委員会
- 326 1976 『豊中・古池遺跡発掘調査概要その3』 豊中・古池遺跡調査会
- 327 1977 安田喜憲 「「倭国乱」期の自然環境」『考古学研究』92 考古学研究会
- 328 1978 『大園遺跡・古池北遺跡発掘調査概要一高石市西取石・泉大津市豊中所在一』 大阪府教育委員会
- 329 1978 「豊中遺跡」 p.542,544,791 「古池遺跡」 p.312 「古池北遺跡」 p.312 『大阪府史』第1巻 大阪府
- 330 1978 「豊中遺跡発掘調査概要II」『泉大津市文化財調査概要3』 泉大津市教育委員会
- 331 1979 藤並行三 「大阪府下における開発計画と集落遺跡の保存」『考古学研究』100 考古学研究会
- 332 1979 「豊中遺跡発掘調査概要III」『泉大津市文化財調査概要4』 泉大津市教育委員会
- 333 1980 森 茂 「古墳時代泉州の漁撈について」『摂河泉文化資料』22 摂河泉文庫
- 334 1980 『大園遺跡・古池北遺跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会
- 335 1980 「豊中遺跡発掘調査概要IV」『泉大津市文化財調査概要5』 泉大津市教育委員会
- 336 1981 「豊中遺跡」『府中遺跡群発掘調査概要』 和泉市教育委員会
- 337 1981 「古池遺跡発掘調査概要 I」『泉大津市文化財調査概要6』 泉大津市教育委員会
- 338 1982 菅原正明 「畿内における土釜の製作と流通」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 文化財論叢』 同朋舎
- 339 1984 芝野圭之助 「飯蛸壺形土器をめぐる諸問題」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書 I』 (財)大阪文化財センター
- 340 1983 「泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報 1 (豊中遺跡発掘調査概要V)」『泉大津市文化財調査報告 8』 泉大津市教育委員会
- 341 1983 「豊中遺跡」『泉大津市史』第2巻 考古資料編 泉大津市史編纂委員会
- 342 1983 「古池遺跡」『泉大津市史』第2巻 考古資料編 泉大津市史編纂委員会
- 343 1983 竹内理三編 「豊中遺跡」『27 大阪府 大阪府地名大辞典』角川日本地名大辞典 角川書店
- 344 1984 『記された世界一大阪府下出土の墨書土器・文字瓦と木簡展一』 大阪府立泉北考古資料館

- 345 1984 「泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報 2」『泉大津市文化財調査報告 9』 泉大津市教育委員会
- 346 1985 「泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報 3」『泉大津市文化財調査報告10』 泉大津市教育委員会
- 347 1986 「泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報 4」『泉大津市文化財調査報告12』 泉大津市教育委員会
- 348 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「豊中遺跡」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社

4. 和泉市

池上曾根遺跡 7 (泉大津市を参照)

池田寺遺跡 137

- 349 1980 広瀬和雄「池田寺遺跡における 7, 8 世紀の集落構成」『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会 (第 2 回) 資料』 (財) 大阪文化財センター
- 350 1982 『泉北丘陵内遺跡発掘調査概要—池田寺跡、須恵器窯跡、豊田遺跡—』 大阪府教育委員会
- 351 1984 「池田寺遺跡」『和泉の文化財』 和泉市教育委員会
- 352 1986 広瀬和雄「中世への胎動」『岩波講座日本考古学 6 変化と画期』 岩波書店

池田山遺跡 14

- 353 1978 「池田山遺跡」p.525『大阪府史』第 1 巻 大阪府
- 354 1981 小笠原好彦「古代寺院に先行する掘立柱建物集落」『考古学研究』111 考古学研究会
- 355 1983 広瀬和雄「古代の開発」『考古学研究』118 考古学研究会

和泉国府跡 85

- 356 1965 「和泉清水と和泉国府—和泉市国府町—」『大阪府教育委員会月報』17-10 大阪府教育委員会
- 357 1966 『和泉国府跡発掘調査概要』 大阪府教育委員会
- 358 1966 「和泉国府跡発掘調査概要」『大阪府教育委員会月報』18-5 大阪府教育委員会
- 359 1983 竹内理三編「和泉国府」『27 大阪府 大阪府地名大辞典』角川日本地名大辞典 角川書店
- 360 1984 「和泉国府」『和泉市の文化財』 和泉市教育委員会
- 361 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「和泉国衙跡」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社

和泉国分寺跡 59

- 362 1984 「和泉国分寺」『和泉市の文化財』 和泉市教育委員会
363 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「和泉国分寺」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社

和泉寺跡 36

- 364 1965 「和泉寺」『和泉市史』第1巻 大阪府和泉市役所
365 1983 「和泉寺跡」『府中遺跡群発掘調査概要III』 和泉市教育委員会
366 1984 『和泉市の文化財』 和泉市教育委員会
367 1985 「和泉寺 和泉地方における瓦の系譜（試案）」『春季特別展 堺の遺跡と出土品』 堺市博物館
368 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「和泉寺」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社

上代遺跡 64

- 369 1984 「上代遺跡」『府中遺跡群発掘調査概要IV』 和泉市教育委員会

大園遺跡 83 (高石市を参照)

大野池遺跡 11

- 370 1961 「和泉市大野池出土の石鏃 和泉の弥生式土器と石器」『和泉考古学』5 最近の調査による和泉の古代遺跡 大阪府立泉大津高校地歴部

貝吹山古墳 4

- 371 1965 「貝吹山古墳」『和泉市史』第1巻 大阪府和泉市役所
372 1970 小野山節「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』63 考古学研究会
373 1971 「貝吹山古墳」p.64 『堺市史 続編』第1巻 堺市
374 1975 広瀬和雄「和泉北部における古墳群の動向—地域における政治関係についての基礎的諸考察—」『大園遺跡発掘調査概要II』大阪府文化財調査概要1974-15 大阪府教育委員会
375 1978 「貝吹山古墳」p.563,597,741 『大阪府史』第1巻 大阪府
376 1982 「貝吹山古墳」『府中遺跡群発掘調査概要II』 和泉市教育委員会
377 1984 「貝吹山古墳」『和泉市の文化財』 和泉市教育委員会
378 1985 「貝吹山古墳」『府中遺跡群発掘調査概要V』 和泉市教育委員会
379 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「貝吹山古墳」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社

上町遺跡 65

- 380 1975 『上町遺跡発掘調査概要』 和泉市教育委員会
381 1978 「上町遺跡」p.309,313,542,544,791 『大阪府史』第1巻 大阪府

- 382 1985 『上町遺跡発掘調査概要—府道大阪和泉泉南線歩道設置工事に伴う調査—』 大阪府教育委員会

観音寺（信太寺跡） 3

- 383 1965 「第2章 古代社会 信太寺」『和泉市史』第1巻 大阪府和泉市役所
- 384 1976 藤沢一夫「和泉信太寺と寺名刻印屋瓦」『大阪文化誌』5 (財)大阪文化財センター
- 385 1979 『信太寺跡発掘調査概要』 和泉市教育委員会
- 386 1979 野上丈助「大阪府 特集 地域考古学界の動向II」『考古学ジャーナル』169 ニューサイエンス社
- 387 1982 「信太寺跡」『府中遺跡群発掘調査概要II』 和泉市教育委員会
- 388 1982 『観音寺遺跡発掘調査報告書』 大阪府教育委員会
- 389 1984 「信太寺跡」『和泉市の文化財』 和泉市教育委員会
- 390 1984 『記された世界—大阪府下出土の墨書土器・文字瓦と木簡展—』 大阪府立泉北考古資料館
- 391 1984 芝野圭之助「飯蛸壺形土器をめぐる諸問題」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』 (財)大阪文化財センター
- 392 1985 「信太寺 和泉地方における瓦の系譜（試案）」『春季特別展 堺の遺跡と出土品』 堺市博物館
- 393 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「信太寺跡」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社

観音寺山遺跡 40

- 394 1955 「観音寺山弥生式遺跡」『和泉考古学』2 大阪府立泉大津高校地歴部
- 395 1961 「和泉市観音寺山弥生遺跡 和泉の弥生式土器と石器」『和泉考古学』5 大阪府立泉大津高校地歴部
- 396 1965 「第1章 原始社会 観音寺山弥生遺跡」『和泉市史』第1巻 大阪府和泉市役所
- 397 1968 『大阪府和泉市観音寺山弥生集落調査概要』 大阪府教育委員会
- 398 1968 石部正志「和泉の古窯址群と三大弥生遺跡の現状—「泉州文化財を守る連絡会議」の歩み—」『考古学研究』56 考古学研究会
- 399 1969 観音寺山調査団 「観音寺山弥生遺跡発掘調査概要」『ヒストリア』52 大阪歴史学会
- 400 1969 石部正志「畿内弥生文化の成立と発展に関する若干の問題提起」『考古学研究』60 考古学研究会
- 401 1978 「観音寺山遺跡」p.209,525,542,545,581,598,832 『大阪府史』第1巻 大阪府

- 402 1983 都出比呂志「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』116 考古学研究会
- 403 1983 竹内理三編「観音寺山遺跡」『27 大阪府 大阪府地名大辞典』角川日本地名大辞典 角川書店
- 404 1984 「観音寺山遺跡」『和泉市の文化財』和泉市教育委員会
- 405 1984 芝野圭之助「飯嶋壺形土器をめぐる諸問題」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ』(財)大阪文化財センター
- 406 1985 都出比呂志「環濠集落の構造と盛行期」『講座考古地理学4 村落と開発』学生社
- 407 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「観音寺山遺跡」『大阪府の地名Ⅱ』日本歴史地名大系28 平凡社
黒鳥山荘遺跡 37
- 408 1958 「信太山出土の古銭」『和泉考古学』別冊 土木工事の破壊に伴う考古学調査報告 第1冊
泉大津高校社会科、生徒自治会地歴クラブ
- 向代古墳群 91
- 409 1985 「B27号古墳」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅳ』和泉丘陵内遺跡調査会
- 410 1985 「B28号古墳」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅳ』和泉丘陵内遺跡調査会
- 411 1985 「B29号古墳」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅳ』和泉丘陵内遺跡調査会
- 412 1985 「B30号古墳」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要Ⅳ』和泉丘陵内遺跡調査会
- 413 1986 「和泉向代古墳群 1984年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
- 黄金塚古墳 2
- 414 1954 『和泉黄金塚古墳』綜芸舎
- 415 1954 三木文雄「黄金塚古墳と亀塚古墳」『Museum』28 東京国立博物館
- 416 1962 「黄金塚古墳の調査」『大阪府の文化財』大阪府教育委員会
- 417 1963 角山幸洋「和泉黄金塚古墳出土の絹」『古代学研究』34 古代学研究会
- 418 1965 「第2章 古代社会 黄金塚」『和泉市史』第1巻 大阪府和泉市役所
- 419 1967 都出比呂志「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』51 考古学研究会
- 420 1968 野上丈助「古墳時代における甲冑の変遷とその技術史的意義」『考古学研究』56 考古学研究会
- 421 1970 小野山節「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』63 考古学研究会
- 422 1971 森 浩一『黄金塚』中央公論美術出版
- 423 1971 「黄金塚古墳」p.50-51,70 『堺市史 続編』第1巻 堺市

- 424 1974 小林謙一「甲冑製作技術の変遷と工人の系統(上)」『考古学研究』80 考古学研究会
- 425 1975 野上丈助「甲冑製作技法と系譜をめぐる問題点・上」『考古学研究』84 考古学研究会
- 426 1975 森 浩一「和泉黄金塚古墳についての補遺」『橿原考古学研究所論集 創立35周年記念』 橿原考古学研究所
- 427 1975 広瀬和雄「和泉北部における古墳群の動向—地域における政治関係についての基礎的諸考察—」『大園遺跡発掘調査概要II』大阪府文化財調査概要1974-15 大阪府教育委員会
- 428 1978 田中彩太「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」『考古学研究』98 考古学研究会
- 429 1978 小沢一雅「前方後円墳の形態研究とその計数的方法の試み」『考古学研究』98 考古学研究会
- 430 1978 「黄金塚古墳」p.587-596,599『大阪府史』第1巻 大阪府
- 431 1979 梶 国男「コンピューターを使った前方後円墳の類似度研究を読んで—小沢論文の疑点と相似図形の考察」『考古学研究』101 考古学研究会
- 432 1980 『和泉黄金塚古墳』 東京堂出版
- 433 1982 高木繁司「黄金塚古墳出土の円体方孔銭について」『古代学研究』97 古代学研究会
- 434 1983 竹内理三編「黄金塚古墳」『27 大阪府 大阪府地名大辞典』角川日本地名大辞典 角川書店
- 435 1984 「黄金塚古墳」『和泉市の文化財』 和泉市教育委員会
- 436 1985 神谷正弘「古墳時代革盾 復元試作について」『大阪文化誌』18 (財)大阪文化財センター
- 437 1985 『特別展市制30周年 黄金塚・施福寺経塚の遺宝—和泉の考古—』 和泉市久保惣記念美術館
- 438 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「黄金塚古墳」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社
- 信太千塚古墳群 33
- 439 1954 「信太山丘陵の古墳群」『和泉考古学』1 大阪府立泉大津高校地歴部
- 440 1958 「信太千塚」『和泉考古学』別冊 大阪府立泉大津高校地歴部
- 441 1960 泉大津高校地歴部「大阪府信太山古墳群の狐山古墳の測量」『古代学研究』24 古代学研究会
- 442 1961 「信太千塚概要 和泉の古墳文化」『和泉考古学』5 最近の調査による和泉の古代遺跡 大阪府立泉大津高校地歴部
- 443 1961 「信太千塚60号墳 和泉の古墳文化」『和泉考古学』5 最近の調査による和泉の古代遺跡 大阪府立泉大津高校地歴部

- 444 1961 「信太千塚57号墳出土土筒埴輪」『和泉考古学』5 最近の調査による和泉の古代遺跡 大阪府立泉大津高校地歴部
- 445 1961 「信太千塚52号墳 和泉の古墳文化」『和泉考古学』5 最近の調査による和泉の古代遺跡 大阪府立泉大津高校地歴部
- 446 1961 「信太千塚48,49,50号墳 和泉の古墳文化」『和泉考古学』5 最近の調査による和泉の古代遺跡 大阪府立泉大津高校地歴部
- 447 1961 「信太千塚55号墳 和泉の古墳文化」『和泉考古学』5 最近の調査による和泉の古代遺跡 大阪府立泉大津高校地歴部
- 448 1961 「信太山出土の子供用陶棺 和泉の古墳文化」『和泉考古学』5 最近の調査による和泉の古代遺跡 大阪府立泉大津高校地歴部
- 449 1961 「信太千塚の危機 和泉の古墳文化」『和泉考古学』5 最近の調査による和泉の古代遺跡 大阪府立泉大津高校地歴部
- 450 1963 『和泉信太千塚の記録』 和泉市市史編纂委員会 和泉市文化財保護委員会
- 451 1965 「第2章 古代社会 信太千塚、玉塚、鍋塚」『和泉市史』第1巻 大阪府和泉市役所
- 452 1973 吉田恵二「埴輪生産の復原一技法と工人一」『考古学研究』75 考古学研究会
- 453 1978 「信太千塚古墳群」p.741,784,855,914-916『大阪府史』第1巻 大阪府
- 454 1983 竹内理三編「信太山古墳群」『27 大阪府 大阪府地名大辞典』角川日本地名大辞典 角川書店
- 455 1984 「信太千塚古墳群」『和泉市の文化財』 和泉市教育委員会
- 456 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「信太千塚古墳群」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社

信太山遺跡

- 457 1954 「信太山丘陵出土の石器」『和泉考古学』1 大阪府立泉大津高校地歴部
- 458 1961 「和泉市信太山採集石器 和泉の弥生式土器と石器」『和泉考古学』5 最近の調査による和泉の古代遺跡 大阪府立泉大津高校地歴部
- 459 1966 宮川 徠「大阪府信太山遺跡の調査とその意義」『古代学研究』42・43 古代学研究会
- 460 1978 「信太山遺跡」p.306『大阪府史』第1巻 大阪府
- 461 1986 「信太山遺跡」『泉州の遺跡』一(財)大阪府埋蔵文化財協会 昭和60年度発掘調査成果展
一 (財)大阪府埋蔵文化財協会
- 462 1986 渡辺昌宏「泉州の縄文時代」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議

陶邑窯跡群 86 (堺市を参照)

禪寂寺(阪本寺跡) 38

- 463 1965 「第2章 古代社会 禪寂寺」『和泉市史』第1巻 大阪府和泉市役所
- 464 1966 『禪寂寺(坂本寺)跡調査概要』 大阪府教育委員会
- 465 1984 「禪寂寺(坂本寺)」『和泉市の文化財』 和泉市教育委員会
- 466 1984 『記された世界一大阪府下出土の墨書土器・文字瓦と木簡展一』 大阪府立泉北考古資料館
- 467 1985 「坂本寺 和泉地方における瓦の系譜 (試案)」『春季特別展 堺の遺跡と出土品』 堺市博物館

惣ヶ池遺跡 17

- 468 1961 「和泉市ソウガ池の弥生式土器 和泉の弥生式土器と石器」『和泉考古学』5 最近の調査による和泉の古代遺跡 大阪府立泉大津高校地歴部
- 469 1965 「第1章 原始社会 信太山惣ヶ池遺跡」『和泉市史』第1巻 大阪府和泉市役所
- 470 1966 「惣の池遺跡」『信太山遺跡調査概報』 信太山遺跡調査団
- 471 1969 石部正志「畿内弥生文化の成立と発展に関する若干の問題提起」『考古学研究』60 考古学研究会
- 472 1970 泉州文化財を守る連絡会議事務局「信太山惣の池弥生遺跡の破壊も許してはならない」『考古学研究』63 考古学研究会
- 473 1970 『鶴山地区信太山遺跡(その2)調査概報』 和泉市教育委員会
- 474 1978 「惣の池遺跡」p.525,546,598 『大阪府史』第1巻 大阪府
- 475 1983 竹内理三編「惣の池遺跡」『27 大阪府 大阪府地名大辞典』角川日本地名大辞典 角川書店
- 476 1984 「惣ヶ池遺跡」『和泉市の文化財』 和泉市教育委員会
- 477 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「惣の池遺跡」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社

太之坊池火葬墓 21

- 478 1966 「太之坊池火葬墓」『信太山遺跡調査概報』 信太山遺跡調査団

寺門古墳・古墓 77

- 479 1984 「寺門古墳群」『和泉市の文化財』 和泉市教育委員会

豊中遺跡 86 (泉大津市を参照)

聖神社境内 1号墳 9

480 1984 「聖神社古墳群」『和泉市の文化財』 和泉市教育委員会

481 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「聖神社古墳群」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社

聖神社 2号墳 8

482 1984 「聖神社古墳群」『和泉市の文化財』 和泉市教育委員会

483 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「聖神社古墳群」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社

府中遺跡 75

484 1976 『府中遺跡発掘調査概要』 和泉市教育委員会

485 1978 『府中遺跡発掘調査概要II』 和泉市教育委員会

486 1978 「伯太遺跡」p.312,542,791 「府中遺跡」p.542 『大阪府史』第1巻 大阪府

487 1979 佐久間貴士「縄文時代の大阪」『摂河泉文化資料』18 摂河泉地域史研究会

488 1980 森 茂「古墳時代泉州の漁撈について」『摂河泉文化資料』22 摂河泉地域史研究会

489 1980 『府中遺跡発掘調査概要III』 和泉市教育委員会

490 1980 『府中遺跡発掘調査概要IV』 和泉市教育委員会

491 1981 『府中遺跡群発掘調査概要』 和泉市教育委員会

492 1982 『府中遺跡群発掘調査概要II』 和泉市教育委員会

493 1983 『府中遺跡群発掘調査概要III』 和泉市教育委員会

494 1984 『記された世界一大阪府下出土の墨書土器・文字瓦と木簡展一』 大阪府立泉北考古資料館

495 1984 『府中遺跡群発掘調査概要IV』 和泉市教育委員会

496 1985 『府中遺跡群発掘調査概要V』 和泉市教育委員会

497 1985 『府中遺跡発掘調査概要一府道と泉中央線拡幅工事に伴う発掘調査一』 大阪府教育委員会

498 1986 渡辺昌宏「泉州の縄文時代」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議

499 1986 「府中遺跡 1984年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議

菩提池西古墳

500 1966 「菩提池西古墳」『信太山遺跡調査概報』 信太山遺跡調査団

丸笠山古墳 22

501 1965 「第2章 古代社会 丸笠山古墳」『和泉市史』第1巻 大阪府和泉市役所

- 502 1975 広瀬和雄「和泉北部における古墳群の動向―地域における政治関係についての基礎的諸考察―」『大園遺跡発掘調査概要II』大阪府文化財調査概要1974-15 大阪府教育委員会
- 503 1976 「丸笠山古墳」『大阪府教育委員会月報』28-10 大阪府教育委員会
- 504 1978 「丸笠山古墳」p.741『大阪府史』第1巻 大阪府
- 505 1984 「丸笠山古墳」『和泉市の文化財』和泉市教育委員会
- 506 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「丸笠山古墳」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社
- 万町遺跡 81
- 507 1985 「万町遺跡 1983年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』第2号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
- 万町北遺跡 89
- 508 1984 「万町北遺跡 1982年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』創刊号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
- 509 1984 「万町北遺跡」『和泉市の文化財』和泉市教育委員会
- 510 1985 「万町北遺跡」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要IV』和泉丘陵内遺跡調査会
- 511 1985 「万町北遺跡 1983年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』第2号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
- 512 1986 渡辺昌宏「泉州の縄文時代」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
- 513 1986 「万町北遺跡 1984年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
- 道田池古墳群 18
- 514 1966 「道田池1号墳」『信太山遺跡調査概報』信太山遺跡調査団
- 515 1966 「道田池2号墳」『信太山遺跡調査概報』信太山遺跡調査団
- 516 1966 「道田池3号墳」『信太山遺跡調査概報』信太山遺跡調査団
- 517 1966 「道田池4号墳」『信太山遺跡調査概報』信太山遺跡調査団
- 518 1978 「道田池古墳群」p.915,943『大阪府史』第1巻 大阪府
- 519 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「道田池古墳群」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社
- 明王院跡（池田寺跡） 42
- 520 1965 「第2章 古代社会 池田寺」『和泉市史』第1巻 大阪府和泉市役所
- 521 1978 「池田寺」p.913『大阪府史』第1巻 大阪府
- 522 1979 「<摂河泉と各地のニュース>池田寺院跡」『摂河泉文化資料』17 摂河泉地域史研究会

- 523 1981 「池田寺跡」『府中遺跡群発掘調査概要』 和泉市教育委員会
- 524 1984 『記された世界一大阪府下出土の墨書土器・文字瓦と木簡展一』 大阪府立泉北考古資料館
- 525 1985 「池田寺 和泉地方における瓦の系譜（試案）」『春季特別展 堺の遺跡と出土品』 堺市博物館
- 526 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「池田寺跡」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社
- 明神原古墳 48
- 527 1985 「明神原古墳」『和泉丘陵内遺跡発掘調査概要IV』 和泉丘陵内遺跡調査会
- 和気遺跡 76
- 528 1978 広瀬和雄「古墳時代の集落類型—西日本を中心として—」『考古学研究』97 考古学研究会
- 529 1978 「和気遺跡」p.542『大阪府史』第1巻 大阪府
- 530 1979 『和気』 和気遺跡調査会
- 531 1981 『和気II』 和気遺跡調査会
- 532 1982 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集 文化財論叢』 同朋舎
- 533 1983 竹内理三編「和気遺跡」『27 大阪府 大阪府地名大辞典』角川日本地名大辞典 角川書店
- 534 1984 「和気遺跡」『和泉市の文化財』 和泉市教育委員会
- 535 1984 芝野圭之助「飯蛸壺形土器をめぐる諸問題」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』(財)大阪文化財センター
- 536 1985 『和気遺跡発掘調査概要報告書』 大阪府教育委員会
- 537 1985 福岡澄男「VI. 平安—江戸時代」『図説 発掘が語る日本史 4 近畿編』 新人物往来社
- 538 1986 渡辺昌宏「泉州の縄文時代」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
- 539 1986 「和気遺跡 1984年度泉州における発掘調査の成果」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議

5. 岸和田市

石塚古墳 110

- 540 1979 「第5章 遺跡各説 石塚」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会

イナリ古墳 93

- 541 1979 「第5章 遺跡各説 イナリ古墳」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会

馬塚古墳 43

- 542 1979 「第5章 遺跡各説 馬塚古墳」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会

岡山遺跡 136

- 543 1973 「岡山遺跡」『泉南丘陵地区 遺跡に関する分布調査報告書』 (財)元興寺仏教民俗資料
研究所

- 544 1973 「西山遺跡」『泉南丘陵地区 遺跡に関する分布調査報告書』 (財)元興寺仏教民俗資料
研究所

- 545 1976 「市内出土遺物図録 玉谷 哲所蔵資料」『岸和田市史紀要』2 岸和田市史編纂委員会

- 546 1978 「西山遺跡」p.181,307『大阪府史』第1巻 大阪府

- 547 1979 「第5章 遺跡各説 西山遺跡」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会

岡山御坊跡 96

- 548 1973 「岡山御坊跡」『泉南丘陵地区 遺跡に関する分布調査報告書』 (財)元興寺仏教民俗
資料研究所

- 549 1985 玉谷 哲「岡山御坊跡」『日本城郭大系』12 大阪・兵庫 新人物往来社

岡山矢取遺跡 48

- 550 1976 「市内出土遺物図録 玉谷 哲所蔵資料」『岸和田市史紀要』2 岸和田市史編纂委員会

- 551 1978 「岡山矢取遺跡」p.543『大阪府史』第1巻 大阪府

- 552 1979 「第5章 遺跡各説 岡山矢取遺跡」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会

お立場古墳 42

- 553 1979 「第5章 遺跡各説 お立場古墳」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会

上フジ遺跡 168

- 554 1985 「付章 府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要一府道磯之上
山直線建設工事に伴う試掘調査概要一』 大阪府教育委員会

軽部池西遺跡 162

- 555 1985 『軽部池西遺跡試掘調査概要報告書・II一府道磯之上山直線建設に伴う試掘調査一』 大
阪府教育委員会

- 556 1985 「付章 府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要一府道磯之上
山直線建設工事に伴う試掘調査概要一』 大阪府教育委員会

- 557 1986 「軽部池西遺跡」『泉州の遺跡』一 (財)大阪府埋蔵文化財協会 昭和60年度発掘調査成果
展一 (財)大阪府埋蔵文化財協会

- 558 1986 渡辺昌宏「泉州の縄文時代」『青海波』第3号 泉州の自然と文化財を守る連絡会議
- 狐塚古墳 118
- 559 1979 「第5章 遺跡各説 狐塚古墳（岡山狐塚古墳）」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会
- 儀平山古墳 78
- 560 1978 「儀平山古墳」p.917『大阪府史』第1巻 大阪府
- 561 1979 「第5章 遺跡各説 儀平山古墳」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会
- 楠本神社古墳 97
- 562 1976 「市内出土遺物図録 玉谷 哲所蔵資料」『岸和田市史紀要』2 岸和田市史編纂委員会
- 563 1979 「第5章 遺跡各説 楠本神社古墳」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会
- 黒石遺跡 171
- 564 1985 「付章 府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要—府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要—』大阪府教育委員会
- 小金塚古墳 44
- 565 1978 「小金塚古墳」p.917『大阪府史』第1巻 大阪府
- 566 1979 「第5章 遺跡各説 小金塚古墳」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会
- 重の原遺跡 49
- 567 1976 「市内出土遺物図録 玉谷 哲所蔵資料」『岸和田市史紀要』2 岸和田市史編纂委員会
- 568 1979 「第5章 遺跡各説 重ノ原遺跡」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会
- 569 1981 「重の原遺跡」『岸和田の文化財 写真集（市内出土瓦）V』岸和田市教育委員会
- 重の原古墳 45
- 570 1976 「市内出土遺物図録 玉谷 哲所蔵資料」『岸和田市史紀要』2 岸和田市史編纂委員会
- 571 1979 「第5章 遺跡各説 重ノ原古墳」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会
- 芝ノ垣外遺跡 174
- 572 1985 「付章 府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要—府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要—』大阪府教育委員会
- 高山古墳 115
- 573 1979 「第5章 遺跡各説 高山古墳」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会

田治米廃寺 37

- 574 1976 「市内出土遺物図録 玉谷 哲所蔵資料」『岸和田市史紀要』2 岸和田市史編纂委員会
575 1981 「田治米廃寺」『岸和田の文化財 写真集（市内出土瓦）V』 岸和田市教育委員会

田治米宮内遺跡 38

- 576 1976 「市内出土遺物図録 玉谷 哲所蔵資料」『岸和田市史紀要』2 岸和田市史編纂委員会
577 1978 「田治米宮内遺跡」 p.543 『大阪府史』第1巻 大阪府
578 1979 「第5章 遺跡各説 田治米宮内遺跡」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会

土居城跡 102

- 579 1985 玉谷 哲「土居城」『日本城郭大系』12 大阪・兵庫 新人物往来社

土井ノ木遺跡 176

- 580 1985 「付章 府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要—府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要—』 大阪府教育委員会

どぞく遺跡 51

- 581 1973 「どぞく遺跡」『泉南丘陵地区 遺跡に関する分布調査報告書』（財）元興寺仏教民俗資料研究所
582 1976 「市内出土遺物図録 玉谷 哲所蔵資料」『岸和田市史紀要』2 岸和田市史編纂委員会
583 1978 「どぞく遺跡」 p.547 『大阪府史』第1巻 大阪府
584 1979 「第5章 遺跡各説 どぞく遺跡」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会

箱谷古墳 144

- 585 1973 「箱谷古墳」『泉南丘陵地区 遺跡に関する分布調査報告書』（財）元興寺仏教民俗資料研究所

東山古墳 55

- 586 1973 「東山古墳」『泉南丘陵地区 遺跡に関する分布調査報告書』（財）元興寺仏教民俗資料研究所
587 1976 「市内出土遺物図録 玉谷 哲所蔵資料」『岸和田市史紀要』2 岸和田市史編纂委員会
588 1978 「三田東山古墳」 p.917 『大阪府史』第1巻 大阪府
589 1979 「第5章 遺跡各説 東山古墳」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会

馬子塚古墳 54

- 590 1976 「市内出土遺物図録 玉谷 哲所蔵資料」『岸和田市史紀要』2 岸和田市史編纂委員会
591 1978 「馬子塚古墳」 p.596 『大阪府史』第1巻 大阪府

- 592 1979 「第5章 遺跡各説 馬子塚古墳」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会
- 593 1982 『特別展 大阪府の埴輪』 大阪府立泉北考古資料館
- 594 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「馬子塚古墳」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社
- 松尾池尻埴輪窯跡 40
- 595 1976 「市内出土遺物図録 玉谷 哲所蔵資料」『岸和田市史紀要』2 岸和田市史編纂委員会
- 596 1979 「第5章 遺跡各説 松尾池尻埴輪遺跡」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会
- 摩湯山古墳 53
- 597 1954 「摩湯山古墳とその遺跡」『和泉考古学』1 大阪府立泉北津高校地歴部
- 598 1960 森 浩一「大阪府岸和田市摩湯山古墳出土の古墳遺物」『古代学研究』26 古代学研究会
- 599 1975 広瀬和雄「和泉北部における古墳群の動向—地域における政治関係についての基礎的諸考察—」『大園遺跡発掘調査概要II』大阪府文化財調査概要1974-15 大阪府教育委員会
- 600 1978 「摩湯山古墳」p.596『大阪府史』第1巻 大阪府
- 601 1979 「第5章 遺跡各説 摩湯山古墳」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会
- 602 1982 『特別展 大阪府の埴輪』 大阪府立泉北考古資料館
- 603 1983 竹内理三編「摩湯山古墳」『27 大阪府 大阪府地名大辞典』角川日本地名大辞典 角川書店
- 604 1986 直木孝次郎、森 杉夫編「摩湯山古墳」『大阪府の地名II』日本歴史地名大系28 平凡社
- 水込遺跡 170
- 605 1985 「付章 府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要—府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要—』大阪府教育委員会
- 三田遺跡 165
- 606 1976 「市内出土遺物図録 玉谷 哲所蔵資料」『岸和田市史紀要』2 岸和田市史編纂委員会
- 607 1985 『三田遺跡試掘調査概要—府道磯之上山直線建設工事に伴う試掘調査概要—』大阪府教育委員会
- 608 1986 「三田遺跡—A地区—B地区—」『泉州の遺跡』—(財)大阪府埋蔵文化財協会 昭和60年度発掘調査成果展—(財)大阪府埋蔵文化財協会
- 609 1986 渡辺昌宏他「三田遺跡発掘調査」『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会(第14回)資料』(財)大阪文化財センター
- 三田古墳 56
- 610 1979 「第5章 遺跡各説 三田古墳」『岸和田市史』第1巻 岸和田市史編纂委員会

三田墓地 137

- 611 1973 「三田墓地」『泉南丘陵地区 遺跡に関する分布調査報告書』(財)元興寺仏教民俗資料
研究所

山直北遺跡 164

- 612 1985 「付章 府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要—府道磯之上
山直線建設工事に伴う試掘調査概要—』大阪府教育委員会

山直中遺跡 173

- 613 1985 「付章 府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要—府道磯之上
山直線建設工事に伴う試掘調査概要—』大阪府教育委員会

山ノ内遺跡 163

- 614 1985 「付章 府道磯之上山直線予定地内分布調査の結果」『三田遺跡試掘調査概要—府道磯之上
山直線建設工事に伴う試掘調査概要—』大阪府教育委員会

補遺

堺市

陶邑窯跡群 246

- 615 1966 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 平安学園考古学クラブ
616 1970 田辺昭三「陶邑の変貌」『古代の日本』5 角川書店
617 1971 田辺昭三「須恵器の誕生」『日本美術工芸』390 日本美術工芸社
618 1980 中村 浩『須恵器』考古学ライブラリー5 ニューサイエンス社
619 1981 田辺昭三『須恵器大成』角川書店
620 1984 檜崎彰一監修『日本陶磁の源流—須恵器出現の謎を探る』柏書房

第三章 A地区の調査成果

第一節 A地区の調査経過と概要

1 位置と調査経過（図版2～5 写真図版2～9）

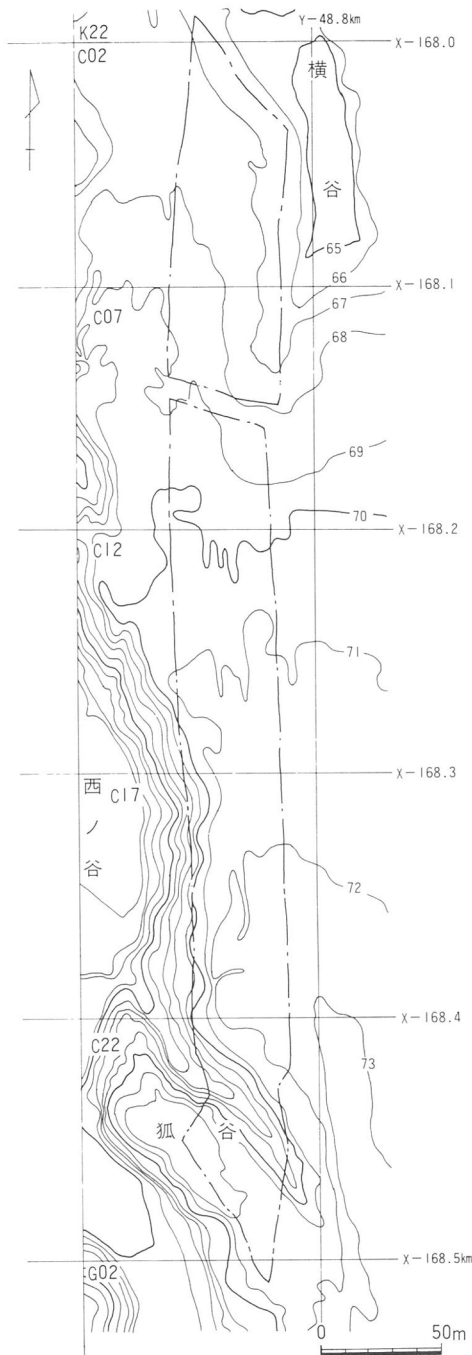
A地区は、信太山丘陵の一支丘上に位置する。この支丘は、信太山丘陵の中央部を父鬼街道にそって北へ伸びる幅広い台地から北西に分岐する舌状台地である。東西の幅は約150m、南北の延長は約600mを測り、上面の標高は65～72mである。西、南側は、鶴田池より南に伸びる通称西ノ谷に画され、比高15mを測る急峻な斜面をなしている。一方北、東側は、西ノ谷より派生した通称横谷に画され、南に至るほど傾斜はゆるやかとなる。また、南端部は、通称狐谷と称する幅約40mの小開析谷で分断される。調査トレンチは丘陵を縦断する形で設けられ、大E 4-4-K22区から大D 4-16-G02区に及ぶ。K22～C12区北半は、丘陵先端の東側へ下る平坦面、C12区南半～C17区は丘陵背稜部と一部西側段丘崖、C22区は狐谷（図版1-2）周辺に該当し、南側に向かって徐々に高度を増している。C22区の一部はB地区に含まれる。

調査以前の現状は、南北に里道が走り、その西側は土手と塹壕跡が随所に残り、東側は射撃場として広範囲に地均しされていた。また狐谷周辺は雑木林が残存して調査は北から100m単位で進め、昭和61年3月15日に終了した。

検出された遺構総数は1556個に及ぶ。その時期別の内分けは、近・現代144（塹壕93、道路15、溜池11、その他25）古墳時代6（須恵器窯体1、灰原1、土壘4）時期不明1406である。

近・現代の遺構（写真図版3～9）は、第1、2層上面から掘込まれ、埋土は、暗褐色土（10YR3/3）を混じえるブロック土をなすものが多い。大多数を占める塹壕は、調査区全面に分布し、切り合いも随所に見られ、形態的にも円、ドーナツ状、稲妻形、溝状など多様である。これらは信太山に陸軍演習地が営けられた明治時代以降の所産である。

古墳時代の遺構は、開拓谷の斜面に設けられた須恵器登窯と、それに伴う灰原、及び台地上で検出された土壘がある。土壘は第3層上面及び地山面に掘り込まれて、埋土は明黄褐色土（2.5Y6/8）で炭粒を含む点が共通している。また数は他の時期の遺構に比して著しく少ないが、C17区を除く調査区に分散して一基ずつ認められる。形態は不定形で須恵器を完



第3図 A地区微地形図（等高線の単位はm）

形で包含する例があるが、性格は不明である。本来、台地上に散在していたものが、後世の削平で消滅した公算も強い。時期は古墳時代中期後葉で、4号窯と同時期である点に注意される。

時期不明の遺構は、上記以外を全て含む。掘り込み面は明瞭でないが、K22～C02区北半では確実に第3層の下面で検出されるものがある。一方、唯一遺物として焼土塊を出土した162-00は第3層上面から掘り込まれている。

これらの埋土は明黄褐色細砂混シルト(10YR6/6)で、均質に埋積する。分布は調査地全域に及ぶ。平面形状は、円、楕円、長方形、不定形、溝状を呈し、規模は径1m以下で、深さ0.3m未満の浅いものである。時期の決め手となる遺物は全く出土を見ないが、掘り込み面から第3層の時期に遡るものも含まれる。また性格は、樹根の跡といった人為物以外のものがかなり含まれると考えられる。

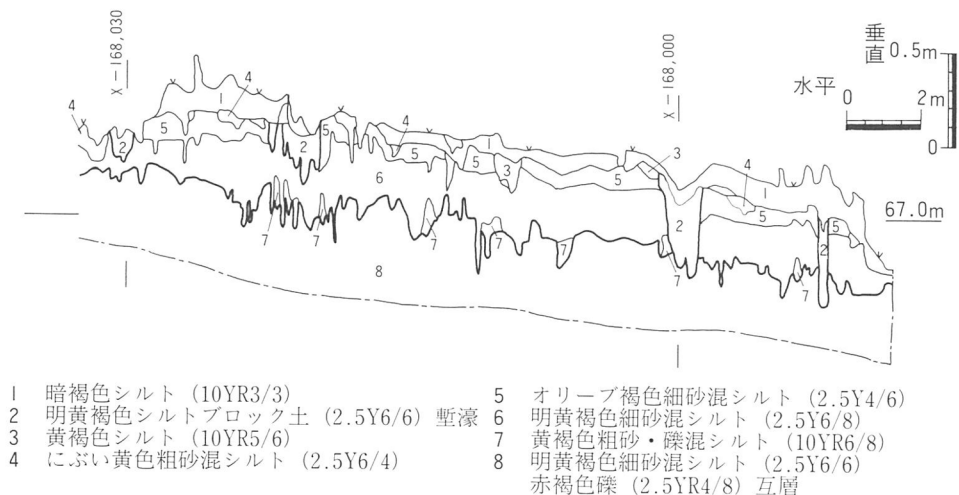
2 基本層序（第4図 図版12）

調査区の層位は5層に大別される。第1層表土は、暗褐色(10YR3/3)腐蝕土で、厚さ10cm前後を測る。第2層は、オリーブ褐色(2.5Y4/6)シルトで、厚さ20cmより薄い。部分的に炭化物を含み灰色化する。C12区以北に断続的に分布する。遺構の切り合いから、古墳中期以降、近代以前の堆積層である。第

3層は明黄褐色(2.5Y6/8)シルトで、残り

の最も良い箇所では厚さ40cmを測る。後世の削平を受けたC22区南半を除き、全面に広がる。C02区でこの層中より旧石器の出土を見た他、新しい遺物を含まず、また古墳時代中期の土壌基盤面となることから、時期はかなり遡ると予想される。第4層は、明黄褐色(10YR6/8)の粗砂混シルトで、第5層の漸移層として断続的に見られる。第5層地山は、赤褐色(2.5YR4/8)こぶし大の礫を含む水平堆積のシルト層でラミナが明瞭に残る。平地の部分は地表から地山面に至る深度は、約20~30cmを測りほぼ一定している。

C22区の谷底部分は、約10cm厚さの表土の下に2.7mの厚さの土砂が堆積している。この土砂は上から1.0mまでは重機で排除したが、断面で土砂の流入方向を観察すると上から約1.0mあまりの土砂(第1層)は北斜面からの流入である。この層の成立は直下の層の年代から中世以降であることが明確である。灰原は基本的に3枚の土層から成り立っている。最も古い層と上部2層との間に粘土と砂が互層になった部分があり、谷底へ土砂の流入が著しい時期がある。谷底に堆積した層は上層とは逆に南斜面からの土砂の流入が顕著である。この層は遺物を含んでいないが層位関係から、古墳時代の須恵器を含む層より古いことは明らかである。古墳時代から鎌倉時代の間は堆積が緩やかで有機質の層が堆積するが、それ以降は何枚かの薄い粘土層を間層にしているが、明確な有機質層の堆積は認められないため堆積に要した時間は比較的短い可能性がある。



第4図 A地区西壁土層図(部分)

第二節 遺構（第5・6図）

1 土 壙

A 240-00（第6・7図 写真図版10・27）

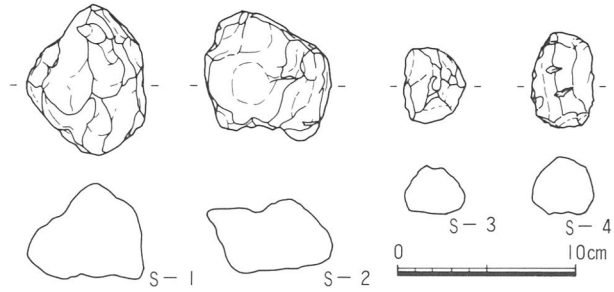
C02ST 区に位置する。平面は三カ月形を呈し、長さ3.3m、幅1.5m、深さ0.18mを測る。西端は後世の溝で切られる。西壁はなだらかに落ち、底面はほぼ平坦である。埋土の上層はにぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土で、底面近くに薄く炭粒を含む明黄褐色（10YR6/6）粘質土が堆積する。埋土中には、須恵器、土師器の細片が含まれる。また、土壙の壁に貼り付いた状態で須恵器の杯身、壺が出土している。完形の杯身は東北部、他は西部において検出した。ただし、壺は西北部に位置していた。これらの遺物は陶邑編年におけるI期4・5段階の特色を備え、5世紀後葉に比定される。土壙の性格としては、規模と完形の須恵器を含む点から土壙墓の可能性も指摘されよう。以下に、出土遺物の概要を述べることとする。

出土遺物331～334は、須恵器杯身である。口径10.0cm、器高4.9cmを測る。口縁端部は内傾し、弱い段をもつ。また、受口部内面に稜をもつ。外面は回転ヘラケズリがなされ、受口直下にはカキ目が残る。内面は回転ナデ調整である。明オリーブ灰色（5GY7/1）を呈し、径0.5～1mm大の長石粒と黒色微粒を含み、焼きはやや軟らかい。332は、20%程度の破片で、復原口径11.5cmを測る。口縁端面はやや丸みのある内傾する面をもつ。オリーブ灰色（10Y5/2）を呈し、黒色微粒を含む。焼きは硬い。333は、1/2程度の破片で、復原口径11.1cmを測る。口縁立ち上がりは、かなり内傾する。端面は上方にやや突出し内傾する明瞭な面をもつ。灰白色（7.5Y7/1）を呈し黒色微粒を含む。焼きは普通である。334は、壺口縁で70%程度の破片である。復原口径16.0cmを測る。頸部はゆるく外反し、口縁部は垂直に伸び、外面に凹線を巡らす。頸部には上方に沈線を伴う低い断面三角突帯を巡らし、その上方に8条/0.8cm、下方に14条/1.4cmの櫛描波状文を施す。表面の色調は暗青灰色（5B4/1）、断面は浅黄色（2.5Y7/4）呈し微細な黒色粒を含む。焼きは硬い。

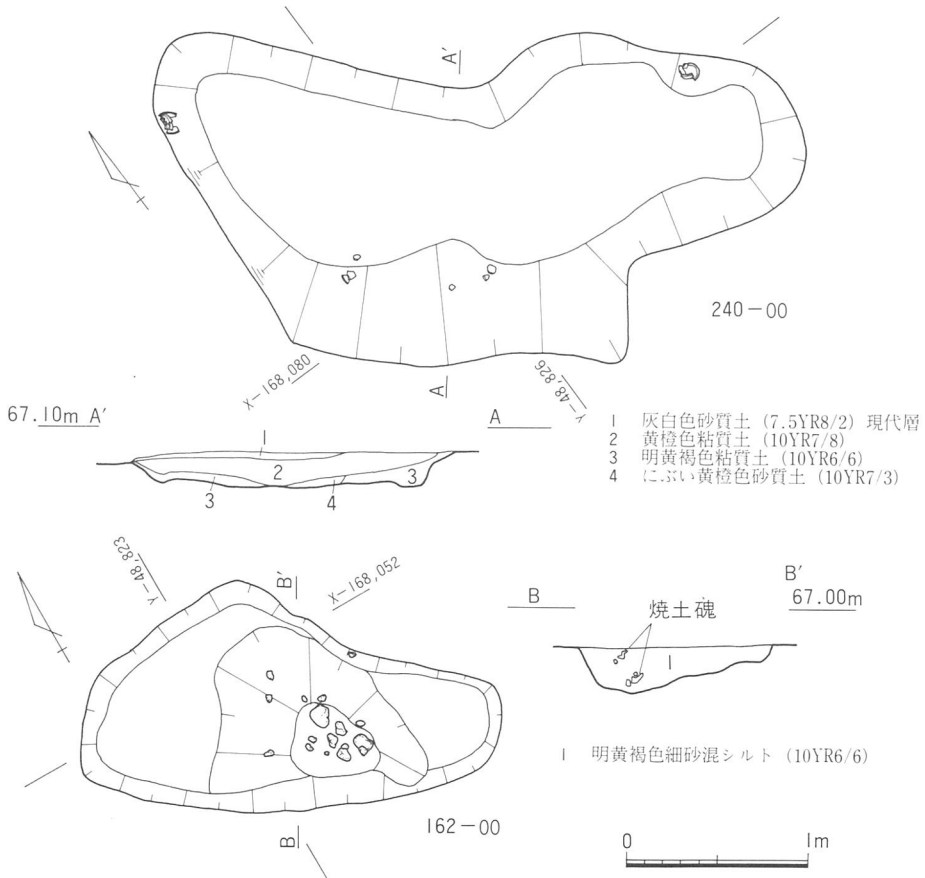
B 162-00（第5・6図 写真図版11・27）

C02NT 区に位置する。平面は不整な三角形を呈す。長さ2.25m、幅1.25m、深さ0.25mを測る。底面の中央が長さ1.1m、幅0.8mにわたり落ち込む。埋土は、明黄褐色シルト（10YR6/6）である。落ち込み内には、加熱を受けたと見られる礫が20個余り集中していた。時期の判る遺物は出土せず、また炉とする決め手も見出せなかった。

礫は、総重量682gを測る。いずれも不定形な塊状を呈し、表面は凹みをもつが概ね平滑である。大・小2種あり、S-1は長さ13.8cm、幅7.5cm、重さ193g、S-2は、長さ16.5cm、幅10.0cm、重さ175.4gを測る大型品、S-3は、長さ8.1cm、幅5.2cm、重さ27.5g、S-4は、長さ10.5cm、幅6.8cm、重さ57.4gを測る小型品である。表面は、部分的に黄橙色(10YR7/4)、橙色(7.5YR7/6)に変色し、内部はにぶい黄橙色(10YR7/4)を呈している。



第5図 162-00出土礫

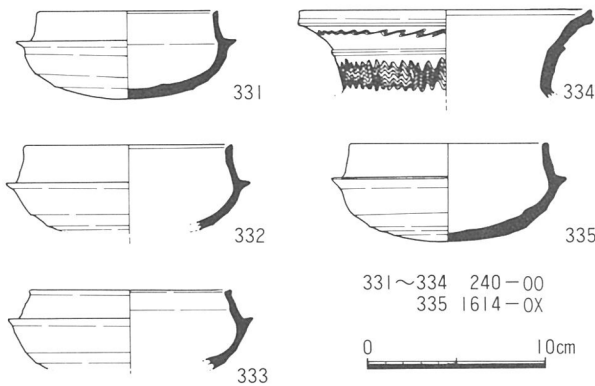


第6図 162・240-00遺構図

C その他 (1614-OX)

C12TK 区に位置し、西側への傾斜面に設けられている。西壁断面で遺構の落ちを確認したのみで、平面的形状は不明である。第3層上面より掘り込まれる。断面に現われた規模は、長さ2.1m、深さ0.12mを測り、底には、深さ0.11mのピット状の落ちを伴う。埋土はにぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂混シルトである。

出土遺物335(第7図 写真図版27)は、須恵器杯身で、約60%を残す。復原口径11.0cm、



器高5.5cmを測る。全体にやや厚みをもつ。口縁の端面は水平で平坦である。外面回転ヘラズリ、内面の見込部分には不定方向のナデ調整を施す。色調は、表面は暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)、断面は暗灰色(N3/0)を呈している。胎土には黒色、石英、砂粒を含む。焼成は良好で硬い。

第7図 遺構出土土器

2 須恵器窯跡(図版14 写真図版12~16)

4号窯(1481-OK)

須恵器を焼成した窯跡と推定できる遺構を検出した。1481Aは谷の北斜面にある南北に長い土壙状の浅い凹みで淡い赤褐色(2.5YR6/8)焼土と明黄褐色(10YR6/8)砂礫が入り混じった層が堆積している。南東部を1480(現代瓦を含む)に切られている。1481の堆積層の中には須恵器甕の破片、窯体片と思われる焼けた塊が数片含まれているため、窯跡の底の部分とは断定できないが、この遺構の延長線上の谷底に灰原が存在するため窯跡と密接に関係する遺構であることは明らかである。

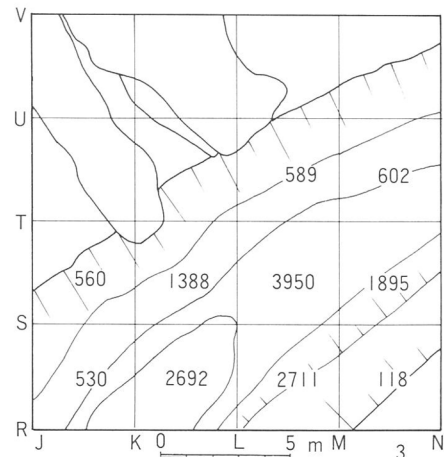
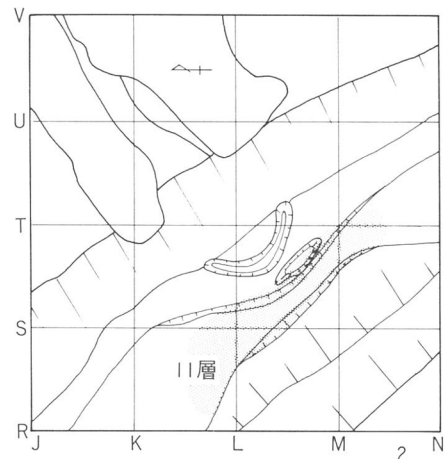
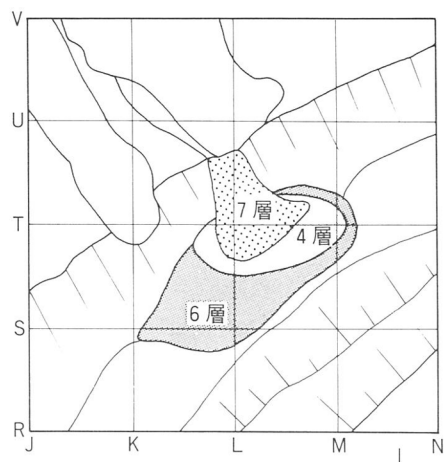
灰原(1481B)は1481Aの部分から谷底へ広がる、灰、炭、焼土、須恵器を含む層である。遺物の分布はIR、JQ、JR、JS、KQ、KR、KS、LQ、LR、LS、LT、MR、MS、MT、NTなどの地区にまたがる。遺物の数量(第8図、破片数)から見ると数量的な分布の中心はLSでありKR、LR、MS、KSがこれに続く数値を示している。

灰原の中央付近の土層断面(第9図 写真図版15・16)をもとに、谷部分の土層堆積状況を説明する。谷底の部分は約1m、斜面部分10~50cmを重機で排土した。1481周辺は10

cm余りの厚さの表土を排除すると直に地山となる。谷底の部分は黄橙色シルト(10YR7/8)の砂混じりの泥土が堆積している。これを全て排除した段階で灰を含む灰色シルト(第2層)(5Y6/1)を検出した。掘り進むにつれて、有機質の黒褐色泥土層を確認し、この中に13~14世紀頃の須恵器の鉢、青磁などを検出したため、2層は古い須恵器を含んでいるが中世より新しい層であることが確認できた。第3層は灰原のあるLS、MS付近でくびれて細くなり流路状になっている。この状態を断面図で把握すると第9図のようになる。

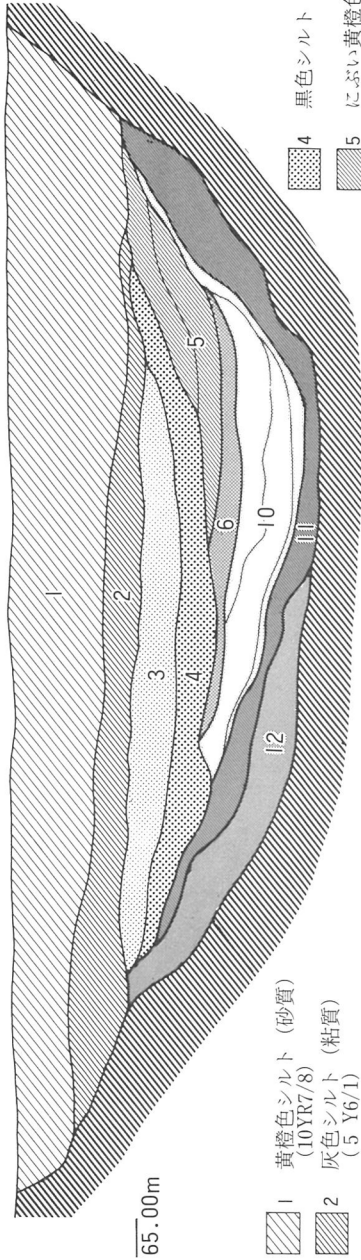
第9層は第10層を基盤にして人工的に半円形に盛土したものである。この層は版築状に積み重ねられた5枚の層から成り立っている。層中に焼土、須恵器を含むため、窯構築時の工事ではなく、修復時に形成された層である。第6層はこの第9層の上面を覆っている。この層は4層と色は同一であるが炭を多く含み、第6層の下部は多量の灰を含んでいる。この第6層を排除した状態が第8図-2である。この段階では谷の上流側と下流側を結ぶ流路らしい部分と、第9層の盛土が特徴的である。

第10層は上半部(第9図)に植物遺体を含む砂層、泥土層が堆積している。これらの層は土の粒径のそろった均一な土層である。第10層の下部(第9図)は上層とは異なり礫と粗い砂の入り混じった層である。この層は灰層(第6層)の分布範囲より狭い範囲にしか存在しない。従って、この層は第9層と呼んで



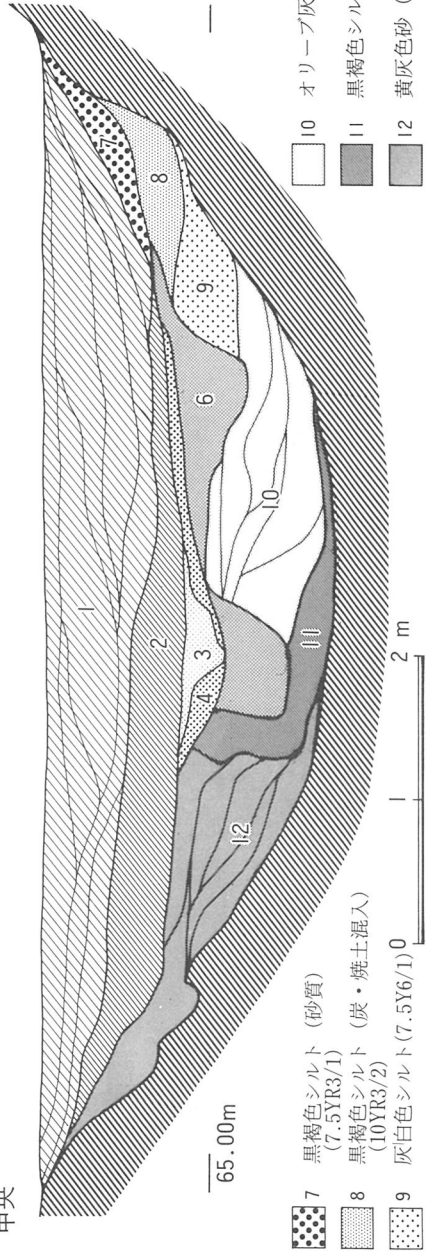
第8図 灰原の広がりと言物の数量分布

西壁



- 1 黄褐色シルト (砂質)
(10YR7/8)
- 2 灰色シルト (粘質)
(5 Y6/1)
- 3 黒色シルト
(10YR1.7/1)
- 4 黒色シルト (2.5Y2/1)
- 5 にぶい黄褐色シルト (10YR7/2)
- 6 黒色シルト (10YR2/1)
(炭・灰・焼土混入)

中央



- 7 黒褐色シルト (砂質)
(7.5YR3/1)
- 8 黒褐色シルト (炭・焼土混入)
(10YR3/2)
- 9 灰白色シルト (7.5Y6/1)0
- 10 オリーブ灰色砂礫 (10Y6/2)
- 11 黒褐色シルト (砂質) (2.5Y3/1)
- 12 黄灰色砂 (小礫含む) (2.5Y5/1)

第9図 1481-OK 灰原土層断面

いる施設を構築するための埋め立て工事の結果成立したものであると推定することが可能である。第11層を肩にした溝状の部分（第8図）は第10層成立の結果、上流側が沼状になったため排水を目的とした施設の可能性がある。いずれにしても、谷を横断するように埋め立てた結果、それより上流の部分は低湿地状になった事は明らかで灰原の第7層に対応する有機質の黒褐色泥土層の堆積やその中に含まれている自然木や加工木の存在はこの間の事情を示すものである。

第11層は谷底の南側肩口に存在する。この層は灰原下層に相当する。南側が垂直に立ちあがる事実をどのように考えるかが問題である。これが流出したものであれば、JP、JQ、KP、KQなどの地域に流出した遺物の堆積が認められるはずであるが、これらの地区を掘って確認したが、各地区とも遺物の量が数十片程度しか検出されなかった。この事実は2つの可能性を示している。第1は包含層の流出はなかったとする仮説、第2は流出もしくは灰層の削平があったが灰層の規模が大きくないため、下流まで広く分布するにはいたらなかったとする仮説である。単純に第11層の流出を想定すれば南側が垂直に立ちあがることの説明が困難である。ここでは、灰層は本来規模の大きいものではなかったと考えている。第11層は、下部に植物遺体（木葉など）を含み、灰原形成の初期の段階の層である。灰原の中心的な層である第4層、第6層、第11層は土色および土質が良く似ていることと、これらの層が境界を接しているため、面として接している部分を完全に掘り分けることが重要な課題であった。今回の調査では、この点については十分注意をした。

第三節 遺物

I 4号窯（I481-OK）出土遺物

A 杯蓋（図版21 写真図版17）

天井部の形態は丸味のある蓋（B地区の分類によるB形態）と平坦な蓋（B地区の分類によるA形態）に区分できる。口径が同じ場合、天井部の丸い蓋は器高が高くなるが口縁端部から稜線までの高さに大きな差はない。

天井部の下端には稜線がめぐる。この稜線は端部があまり鋭くはないが入念に調整されている。杯蓋の最大径が口縁部であるものが多いが、稜の部分は最大径に近い数値を示す。

杯蓋の口径は12cm以下および13cmを越えるものは少なく、大半は12cmから13cmの範囲内におさまる。口径と器高については第2図および計測の項で触れる。

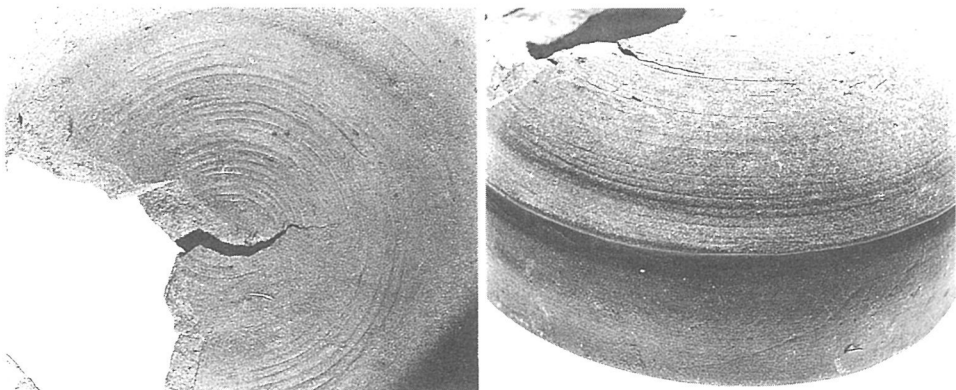
口縁部の形態は端部を丸くおさめるもの（B地区の^(注1)a形態）と平端面をなすもの（B地

区の b1形態)と平坦で凹面をなすもの(B地区 b2形態)と面が内傾するもの(B地区 c1形態)および内傾し凹面があるもの(B地区 c2形態)がある。数量の多いのは平端面を有する杯蓋である。口縁端部の形と天井部の形には特別な相関関係はない。

杯蓋の胎土は3群に大別できる。巻末の表で個別の遺物について補足しているが胎土の項の記号はここで説明するものと同一である。第I群は緑灰色(7.5GY6/1)～灰白色(10Y8/1)を呈し、気泡が多く海綿状になるものが多い。また黒色の粒子を胎土中に含むものもある。第II群は灰白色(N7/1)～少し褐色味を帯た灰白色(7.5Y7/1)を呈する。黒色の粒子、白色の粒子を含む。この胎土に属する蓋にも気泡のあるものが認められる。第III群は暗青灰色(10BG6/1)～灰色(5Y6/1)を呈する。混入物をわずかに含むが精良なものが多い。天井部の形態は丸みを帯びたものと平坦なものがあるがこれは、杯身と同様の傾向である。口縁の形態と天井部の形態には特別な関係は認められない。

成形にはロクロを使用する。口縁部や稜線の部分には入念なヨコナデ^(注2)(回転ナデ)が施される。天井部は約2/3の範囲に及ぶ回転ヘラケズリを施す。ヘラケズリは幅が狭く入念である。焼け歪みが著しいため図示していないが、ヘラケズリ、回転ナデ調整の前にカキ目を施した痕跡(第10図)を確認できるものが2個ある。B地区の2号窯も含め、この地域のカキ目は調整の段階だけではなく、成形の段階にも応用されていた可能性があり、注目する必要がある。ヘラケズリ、回転ナデによるロクロ回転の方向は観察した個体では全て反時計回りである。

杯蓋の中に便宜的に含めたが、口径の小さい15、16は杯蓋以外の器形の可能性がある。15はヨコナデ(回転ナデ)、ヘラケズリとともに粗略である。16は回転ナデによる成形の後天井部に回転を利用しないヘラケズリを施す。



第10図 杯蓋(部分)

B 杯身 (図版21 写真図版18)

口縁部の形は5群に分類できる。これは杯蓋の形及びB地区の分類と同一である。b1が圧倒的に多い。立ち上がり部はわずかに内傾する。受け部を小さく作る。調整は入念であるが端部はあまり鋭くない。底部は平坦な26、27と丸味を帯びた18、19、25などの形態に大別できる。丸味を帯びた底部は18、25のようにふくらみを有するものと20、23のようなふくらみの少ないものがある。ふくらみの少ない底は口径の小さいものに認められる。

ヘラケズリは幅が狭いが入念に施されている。ロクロの回転が弱いいためか杯身を始めとする各器形に見られるヘラケズリの痕跡は鋭さはない。底部をヘラケズリする範囲はあまり広くない。底部内面にはロクロを使用しないナデ調整が認められる。胎土は杯蓋同様3群に大別できるが、焼成不十分で土師器のような黄褐色～淡赤褐色を呈する杯身もある。口径の小さい杯身(図版18-28)は第4層、第6層から出土しているが数量は20個体にも満たない。形態上は後続する型式の要素があり、この灰原の須恵器群の中の新しい要素と推定している。杯の胎土は杯蓋と同様の傾向を示している。

C 有蓋高杯 (図版21 写真図版21・22)

有蓋高杯の蓋(29-32)は杯蓋につまみをつけたものであり、形態、手法とも杯蓋と同一である。身の方は通常の杯身に脚をつけたものである。底部に回転カキ目のあるものがないものがあり、その比率は1:3である。回転カキ目のない有蓋高杯の杯部の破片は形態、手法とも杯身と同一であるため小破片の場合識別が不可能である。脚部の端部は肥厚するもの(33、34)あまり肥厚しないもの(35)があるが、肥厚するものが多い。透かしは3方向にあり、円形、方形、菱形、半月形がある。外側から突き刺すように孔をあけているため、粘土が内側に盛り上がる。胎土は杯蓋、杯身と同じである。蓋も脚部も不明であるが、杯部に波状文を有するもの(第28図-371)が1例ある。

D 無蓋高杯 (図版21 写真図版22)

通常の杯蓋に有蓋高杯の脚部をつけたもの(36)が1例だけある。

口縁部は丸く仕上げ、わずかに外反する。杯部の上半には鈍い稜線が2条巡る。稜線の下には波状文が1条巡る。波状文の下方はわずかな段になる。底部は回転ヘラケズリのままのものと回転カキ目を施すものがある。粘土紐を棒状にして耳をつくる。杯部の下半に付けるものは片耳、稜線、波状文からなる文様体に耳をつけるものは両耳である。

脚部の裾は丸くおさめる。透かしは四方にあり、片耳の37、38の透かしは面取りがあるが、39には面取りがない。内面には自然釉があつくかかっている。

E 壺・甕 (図版22～30 写真図版19、23～26)

須恵器の場合、壺・甕の呼称区分は不明瞭にならざるを得ないが、もとより「壺形土器」「甕形土器」の略称であり、その呼称も便宜的なものにすぎない。このため報告に際しては、甕・短頸壺・広口壺は従来の慣用に従い、残る外弯ぎみに口縁部が外反し端部が拡張



第11図 須恵器甕(83)

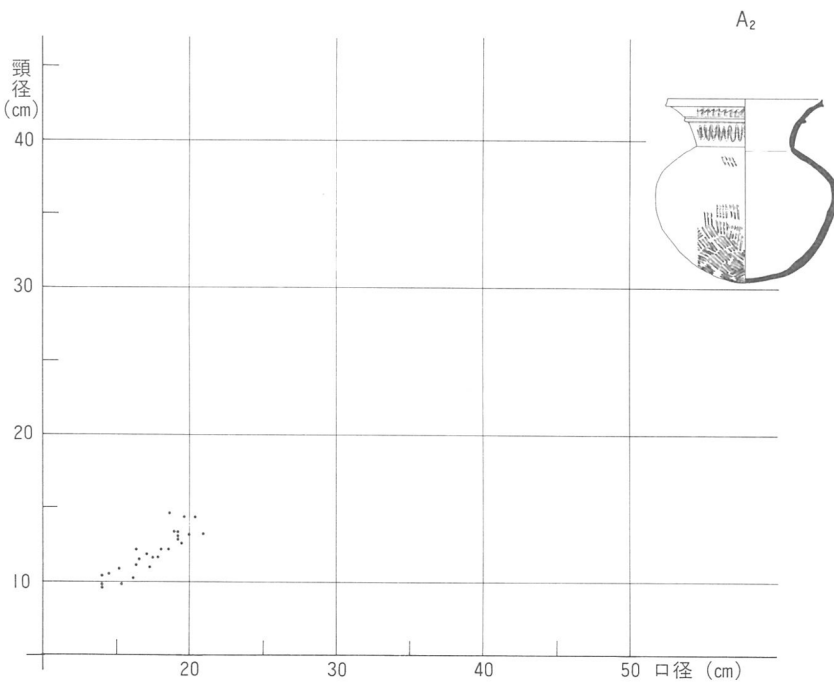
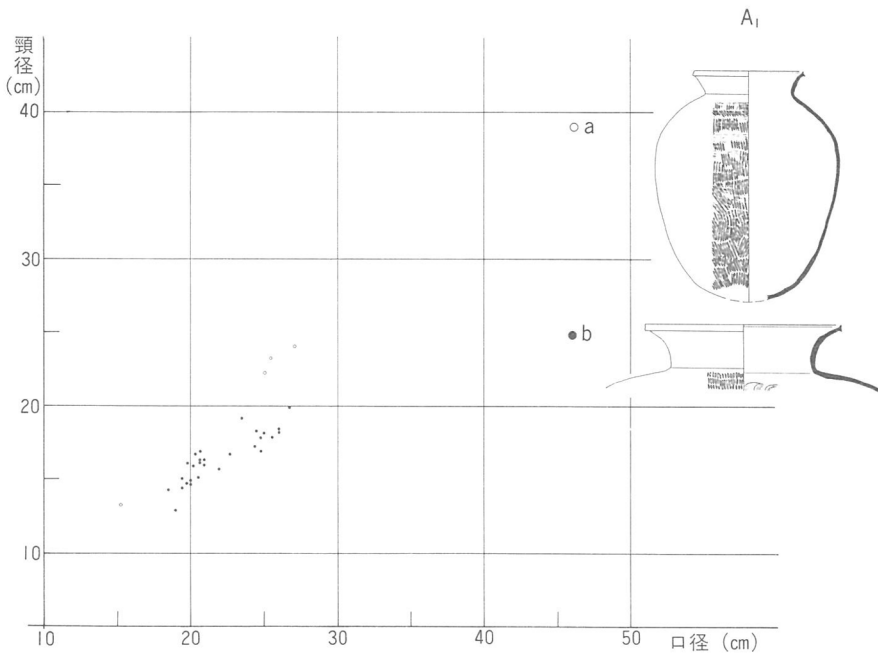


第12図 須恵器甕(85)

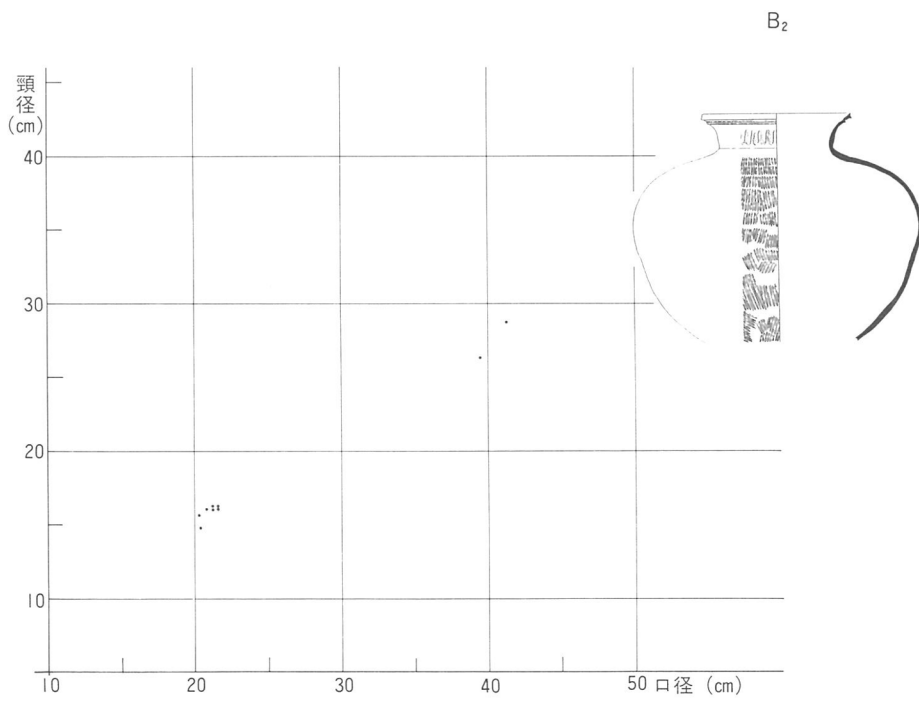
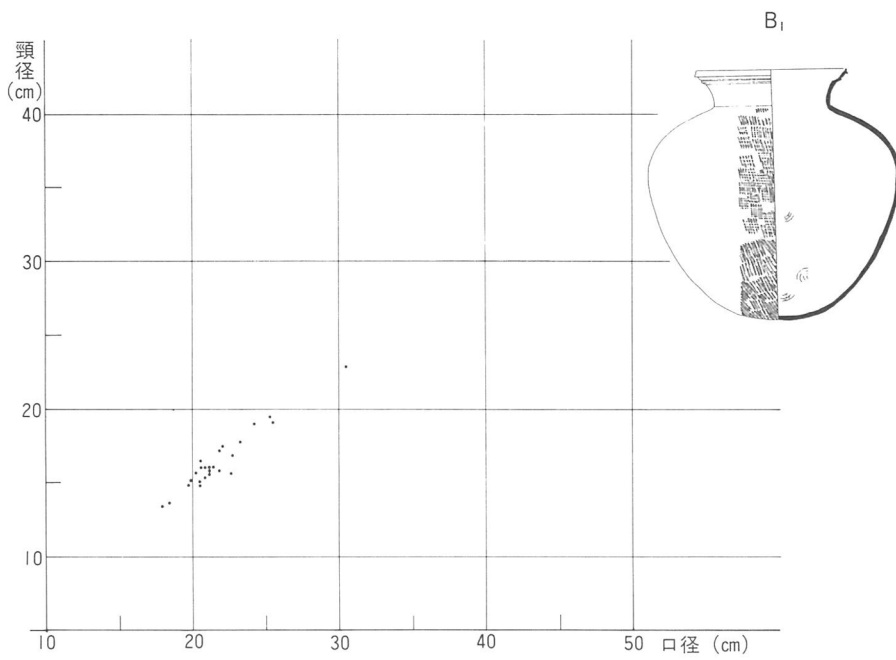
されて外端面が凹面をなすものについては、口縁端部直下の突帯の有無、口縁部における装飾の有無を基に甕 A1、A2、B1、B2の4類に大別した。形態・分量から更に細分されることは以下に述べるとおりである。後に報告されるB地区での形態分類との対応関係を付言すると甕-H類、短頸壺-F類、広口壺-G2類であり、A1～B2類についてはそのまま対応する。

各形態の破片計測結果は第20図のとおりであり、甕 A1～B2類第11図については口縁部が1/2以上残存する資料を基に口径、頸径の分布図を作製した(第13・14図)。

なお、出土した壺・甕に残るタタキ目は全て平行タタキか擬格子タタキであり、格子目タタキ是一片も確認できなかった。内面の当板痕は丁寧にナゲ消すが、同心円文が薄く残るものも若干ある。また、同心円文が残らないものの内面に凹凸が認められるものがあり、石又は砂袋の様なものを当板として使用している可能性もある。



第13図 壺・甕形態別法量表



第14図 壺・甕形態別法量表

短頸壺（図版22-50・51） 最大径をやや上位に有する偏平な球形胴に短く直立する口縁部をもつ。口縁端部は平坦で50は内外に肥厚する。成形、調整技法は甗と共通する。

広口壺（図版22-52~55） 最大径をやや上位に有する球形胴に外上方へ伸びる口縁部を有するもの。口縁部は外反したのち内湾ぎみに広がるもの（52、54）と屈曲が弱く直線的に伸びるもの（55）とがある。口縁端部は丸い。体部最大径付近に波線・波状文を施すもの（53、54）と無文のもの（55）がある。

成形、調整技法は甗に共通するが、54はカキ目を残す。

A1類（図版25-68~72、28-80、81） 口縁部が外反し、端部を上下に拡張して外端面が凹面をなし、装飾を付加せぬもの。口径・頸径指数（頸径/口径×100）が75前後を測るa類（69~72）と90前後を測るb類（68、80、81）に細分できる。

a類は、口縁部が直立、又は直立ぎみに外反して外上方にのびるもの（70、71）と、内湾ぎみに外反するもの（69、71）がある。端部は外傾（70）、直立（69、71）、内傾（72）する。口縁径は20cm前後と25cm前後にまとまりがみとめられ、体部での法量に対応すると思われる。

口頸は口縁部が短く外反し、端部は肥厚又は拡張して凹面をなす外端面とし、外端面は外傾する。法量に大小の2種あり、（小型のもの（68）は最大径をやや上位に有する長胴、丸底の体部で大型のもの（80、81）は幅広い倒卵形の体部を呈する。）b類は、胎土に4mm前後の礫の他、微砂粒を大量に含んでおり、胎土からも他の類との識別は容易である。焼成も大型のものは酸化炎焼成にとどまり、土師質を呈する。

成形・調整技法は、粘土紐巻き上げの後体部を平行擬格子タタキで成形し、回転カキ目を施すものがある。b類の大型のもの（80、81）は回転カキ目が部分的で圏線状である。口縁部は丁寧にヨコナデ調整するが、a類には口縁部を回転カキ目調整するものがあり、内面の当板痕は丁寧にナデ消しているが、薄く同心円文を残すものもある。

A2類（図版23-56~64） 口縁部は基部より外湾ぎみに外反して端部を拡張して外端面を凹面とし、口縁部中位に一条又は二条のヒネリ出し突帯を一带巡らせ波状文を施すもの。体部は球形胴を呈し、口径・頸径指数は70前後にまとまりを見せる。

口縁端部の拡張は上下に行うもの（56、57、61、64）、上方、又は下方のみ強く行うもの（59、60、62、63）があり、肥厚ぎみに平坦な外端面をなすもの（58）もある。突帯をはさんで上下に波状文を施すが、突帯より口縁端部にかけての屈曲が強い59は下段にのみ波状文を施す。56は体部にも波状文を施す。

体部まで復元できた資料では、体部径が30cm前後のものと20cm前後のものとの大小があり、口径に対応させると前者は18cm以上、後者は15cm前後を測る。しかし、口径だけの分布をみると明確には2群の境界を認める事ができない。

成形、調整技法は粘土紐巻き上げの後、体部を平行タタキで形成し、回転カキ目又はヨコナデを施す。底部は体部調整後にタタキだしており、底部内面には「突き出し」の痕跡が、認められるものがある。

B1類 口縁端部直下に突帯を巡らし装飾を施さないもの。口径から40cm以上の大型、30cm前後の中型、26cm以下の小型にわけられ、小型はさらに体部の法量から細分できる。

中型、大型のもの(82、83)は口縁部が基部より外湾したのち外上方へ長く伸び、端部は若干肥厚して外端面が外傾する凹面をなす。端部直下には鈍いヒネリだし突帯がめぐり、体部は肩の張る幅広の倒卵形を呈する。

小型のもの(75~79)の口縁部は短く外反したのち屈曲して外上方へ広がり、屈曲する部分には鈍い突帯がヒネリ出したものであり、B1類の中・大型のものとは形態を異にする。端部は上下、又は一方に拡張して外端面を外傾する凹面とする。体部は最大径が45cm前後を測るもの(75、76)と34cm前後を測るもの(77~79)と大小二種が認められる。しかし、いずれも復元できた資料では口径が21cm前後を測り、体部法量の大小が口径に対応しないことが分かる。ただ、体部まで復元できなかった資料に口径25cm前後を測るものがあり、口縁部から小型と一括した中で体部の法量がさらに細分化できる可能性がある。

成形・調整技法は粘土紐巻き上げののち体部を平行タタキで成形し、小型のものはさらに回転カキ目、又は回転ナデを施す。回転カキ目、回転ナデは圏線状に施されるもの(75、77)がある。78、79は体部調整後に底部を叩き出している。内面の当板痕は丁寧にナデ消されているが、薄く同心円文を残すものもあり、79では底部整形と対応するのか底部にのみ当板痕が認められる。

B2類(図版25-73、26-74、30-84、85) 口縁端部直下に突帯がめぐり、口縁部に突帯、波状文等の装飾が施されるものを一括する。小型と大型の2種あり、B1類での小型と中・大型品にそれぞれ基本的形態は共通する。

大型の84は口縁部が外湾ぎみに外反して外上方にのび、鈍いヒネリだし突帯を端部直下に巡らせ、端部は肥厚して外端面が凸面をなし、外端面には一条の沈線をめぐらせる。口縁部中位には沈線を一条めぐらし、上段に二帯の波状文を施している。85は口縁部が内湾ぎみに外反してのび、端部は肥厚して外端面が直立する凹面をなす。ヒネリ出し突帯は口

縁部を3分割するように端部直下と口縁部に3帯めぐり、中位突帯のみ2条1帯である。波状文は上中段に一帯ずつ巡らされている。

小型のものの形態はB1類小型に共通し、口縁部に幅広い波状文を一帯巡らせる。

成形調整技法もB1類とそれぞれ共通する。

壺・甕A1～B2類の4類に分けて報告したものについて総括するとA1-a類・B1類小型・B2類小型は口縁部・体部とも形態的に共通し、B1類中・大型・B2類大型も同様である。A2類は口縁部形態、容量を異にしており、底部に「突き出し」痕跡が認められる事からも、前三類とは機態・成形行程において差異が想定できる。A1-b類も口縁部形態・胎土に特色をもち、特殊な器形といえるだろう。

F 甕（図版22 写真図版19・20）

は大型と小型の二種あり。いわゆる横形甕は出土していない。

・小型甕（図版22-44～48） 口頸部が外反し屈曲して強い段をなし、段部に断面三角形の突帯を造り出し、外上方へ内湾ぎみに伸びる口縁部をもつ。端部は外方へつまみ出し、平端面をなすもの（44、48）と内傾する凹面をなすもの（45、46、47）がある。体部は肩が張らず底部の丸い球形、もしくは扁平な球形胴を呈するものが主体であるが、46のように比較的肩が張り口頸部が細く、段部の突帯が鋭いものもある。全て胴部最大径付近に一条二帯の浅い沈線と沈線間に波状文を施し、文様帯に円孔を外より内傾して穿つ。波状文は頸部、口縁部にも密に施されている。49は肩部に斜位の擬描刺突文をめぐらす体部が一回り小さい。破片のため明確でないが他の器種となる可能性がある。

成形調整技法は粘土紐巻き上げのち回転ナデを施し、底部にタタキ又は手持ち削りを認める。底部内面にはいわゆる「突き出し」の痕跡が明瞭であり、44は「突き出し」た部分に擬口縁が認められる。頸部付近の体部内面には指オサエの痕跡をとどめるものがあるが、多くは内外面とも丁寧な回転ナデ調整を施している。

・大型甕（図版22-40～43） 口縁部形態は小形甕に共通し、胴部最大径がやや上位にある丸底の体部を呈する。口縁端部は内傾する凹面（41、42）、又は明瞭な段（40、44）をなす。胴部最大径付近に波状文を施すが41、42は上下二条の沈線を省略する。肩の張りが比較的明瞭な4は頸部が他と比べ細く、突帯も鋭い。

成形、調整技法は小型甕と共通であるが、体部をタタキで成形したのちカキ目調整するものがある。底部にはタタキ目を残し、41では5分割して逆時計回りに施されているのが観察できる。体部内面の頸部付近にはシボリ痕跡、又はそれを消した指オサエが残る。

G 器台（図版24 写真図版25）

器台は確実に4個体以上存在する。完形に近いが焼け歪みの著しいもの（65、66）と鉢の部分だけが1/3残存する67とがある。歪みの著しい65、67は鉢の部分做强引に復元作図したため、口径、器高とも不安定である。

鉢の部分には上部を2条の稜線、下部を2条の凹線で区画した文様帯をつくり、間に波状文を2段施す。脚部には3段の透かしがある。65は上2段が長方形で、下1段が三角形で8方向に孔をあける。2本を単位とする凹線が3段に巡り、各々の凹線の間には上2段が三条、下1段に二条の波状文を施す。65の脚部は歪みがあるので復元作図が原形通りかどうかは多少疑問があるが、文様、透かしについては確認できる。三角形の8方向透かしが3段透かしと透かしの間は2本の凹線を一単位とし凹線の間が鈍い稜のようになっている。凹線の区画の間には波状文が最上段は4段、下2段は3段の波状文が施される。65と66は口縁端部は入念に調整されているが丸味を帯びている。

67は口縁端部、稜線は入念で65、66に比較すると鋭く調整されている。

鉢の上部に二条の稜線、中央に一条の稜線（上下に凹線を施した結果）がある。波状文は稜線の間には2段、下に1段施され、文様帯を形成している。65、66に比較して波状文は整っている。

65、66、67とも鉢の底部にはタタキ目が残る。鉢の部分にはカキ目を施し、この部分が文様帯となる。口縁は入念に回転ナデ調整を施す。

2 遺構以外の出土遺物（写真図版28・29）

ほとんど細片で、量的にもわずかであるが、時期的には、旧石器時代から近代に及ぶ。

旧石器時代では、国府型ナイフ形石器1点の他に、同時期と見られる石核1点、剥片3点、原礫1点がある。これらはいずれもサヌカイト製で第2、3層より出土し、分布はC02、17区の二箇所に分れる。

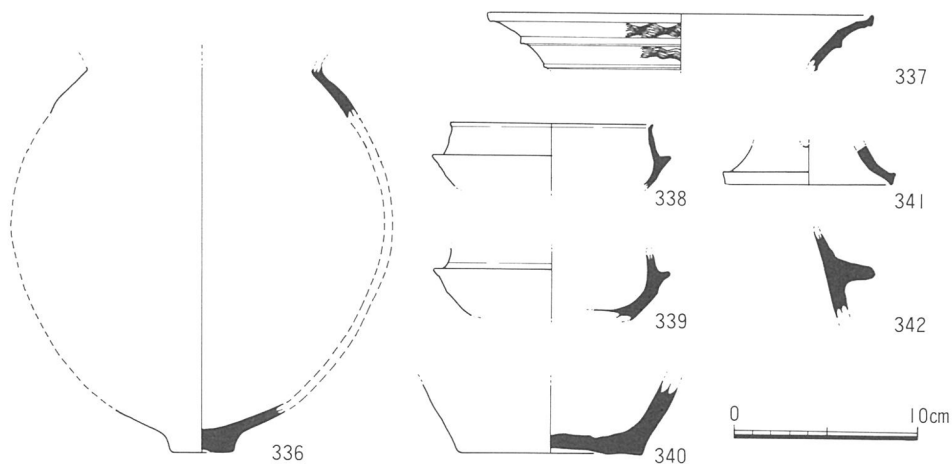
弥生時代は、後期の壺の細片が、C07、22区の第2層から出土している。

古墳時代は、須恵器、土師器、製塩土器がある。須恵器は、窯跡と同時期のものを含む。分布は全域に及ぶが、C02、17区に若干まとまりをみせる。土師器は、時期不明の細片である。製塩土器は灰原（1481-OK）付近の上層から出土している。

中世以降の遺物は、羽釜1点、瓦器24点、陶磁器26点、瓦76点、米軍占領時代のものと思われるワインのガロン瓶、薬夾2点がある。中世遺物は、大半がC24区の谷底から出土し、他にC02区にも僅かに認められる。

土器 336～342は、全て第2層出土である(第15図)。336は弥生土器の、底部と肩部の小破片である。底部はやや突出し、底面に輪台の凹みをもつ。外面はタタキ目、内面は簾状ハケ目を残す。肩部外面は指オサエ痕を残し、内面は細いハケ目を施す。橙色(5YR6/6)を呈し、径1mm程度のチャート、石英粒を含む。弥生後期に比定される。C02IP区より出土した。

337～341は須恵器で、337は甕口縁で2段の断面三角突帯と、7条/0.8cmの櫛描波状文を施す。暗青灰色(5PB4/1)を呈し黒色微粒を含む。C02UP区出土。338～339は杯身である。338はオリーブ灰色(10Y5/1)を呈し、黒色微粒を少量含む。C02SS区出土。339は、暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)を呈し、黒色微粒を含む。C02SR区出土。340は壺底部である。体部外面は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ、底面はやや凹み接地面には砂粒が付着する。暗オリーブ灰色(5GY4/1)を呈し、黒色、白色微粒を若干含み、堅緻である。C02RS区出土。341は高杯脚部で、円形透かし穴をもつ。オリーブ灰色(10Y5/1)を呈し、黒色微粒を少量含む。C07YQ区出土。336～338、340、341は、陶邑編年I型式3～5段階に比定され、5世紀後葉である。342は土師質羽釜の体部で、やや下向きの鏝をもつ。橙色(7.5YR6/6)を呈し、径1～4mmの石英粒を含む。C02NR区出土。

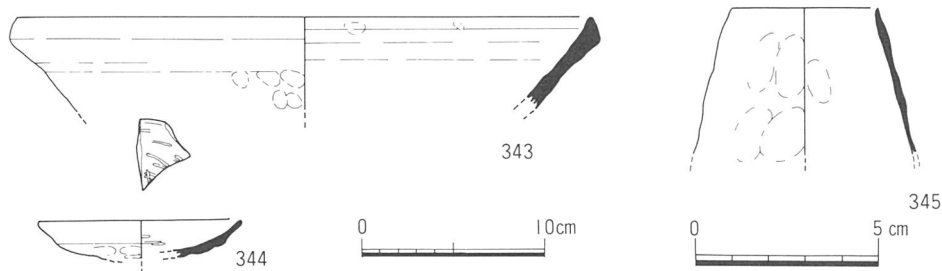


第15図 第2層出土土器

C22区出土遺物 灰原の上層(第2層)には、須恵器に混じって、中世期の遺物が少量出土している。瓦器は、椀と小皿(334)がある。小皿は底部がやや丸味をもち体部外面に指オサエを施し、上半部から口縁にかけて強くナデ稜を作る。内面には螺線形の粗なヘラミ

ガキを施す。椀は口径10cmに復原される小ぶりなもので、内面にヘラミガキを施す。口縁部のみに炭素が吸着している。須恵質練鉢（343）は、口縁部が断面三角形に外側に肥厚し、この部分が灰黒色を呈する「東播系練鉢」である。体部は灰色を呈しヨコナデが見られる。胎土中には黒色、白色の小砂粒を含む。青磁椀は、体部下半の細片で外面に浮き彫りによる蓮弁文様をもち、透明な緑色の釉を厚くかける。胎土は淡灰色を呈す。瓦質土製品は、平瓦片の周囲を荒く打ち欠いて円盤状に加工したもので、直径7cm、厚さ1.7cmを測る。表面は磨滅するが板ナデの跡を見る。胎土中には白色砂粒を含み、灰白色を呈し硬い。これらの遺物は13世紀後半から14世紀前半ごろの所産と考えられる。

製塩土器（345）は、C22LR区第4層より須恵器と共伴した。体部上半の小破片で、口径4cmを測り、器壁は、約1.5～3.0mmと薄く作られる。口縁が内傾する形態から丸底になると考えられる。表面、内部共浅黄色(2.5Y8/3)を呈し、焼成は硬緻である。外面には細かい布目状の圧痕、内面はヨコナデが見られる。胎土中には白色、赤色砂粒を含む。

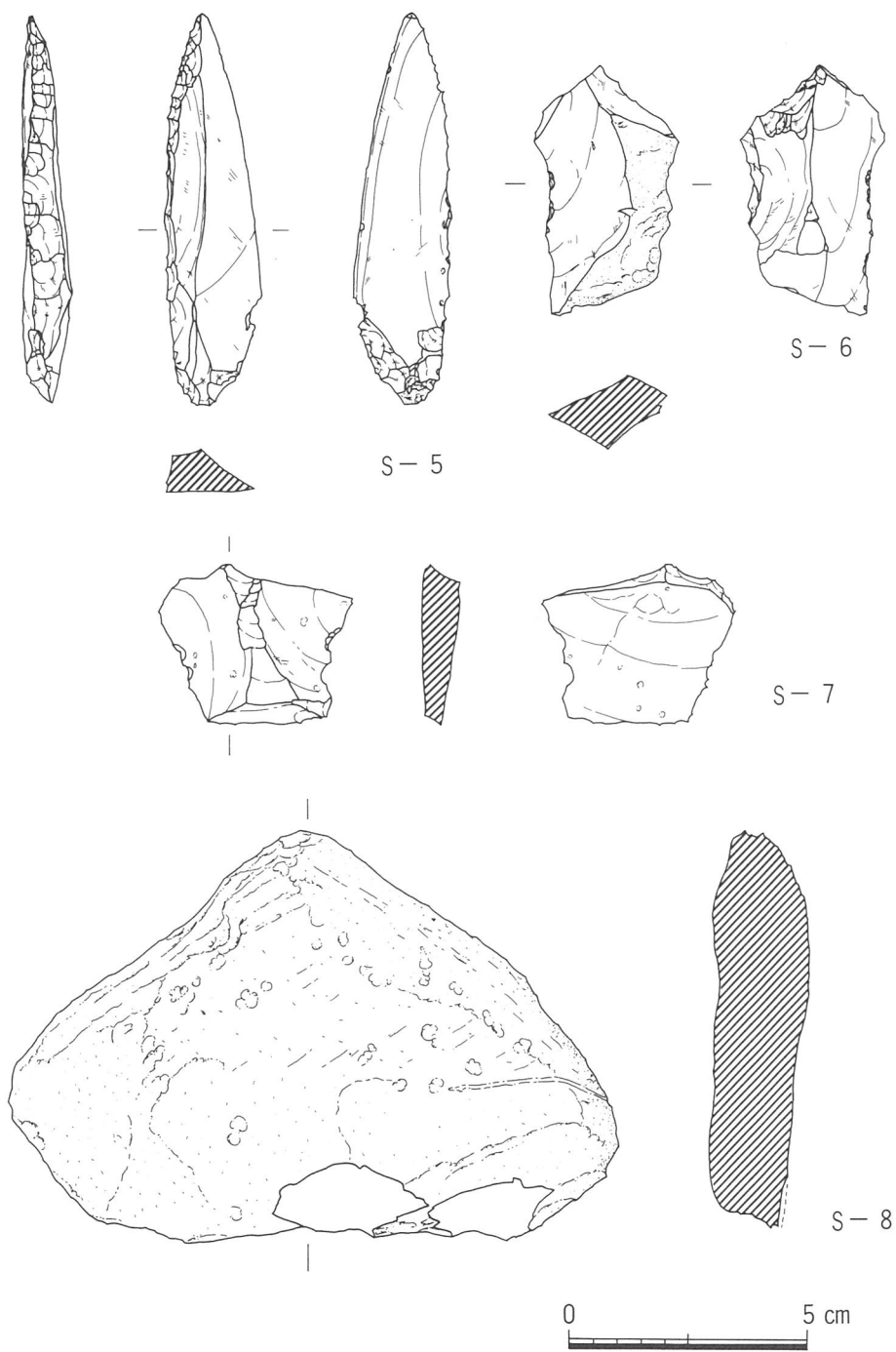


第16図 灰原上層出土土器

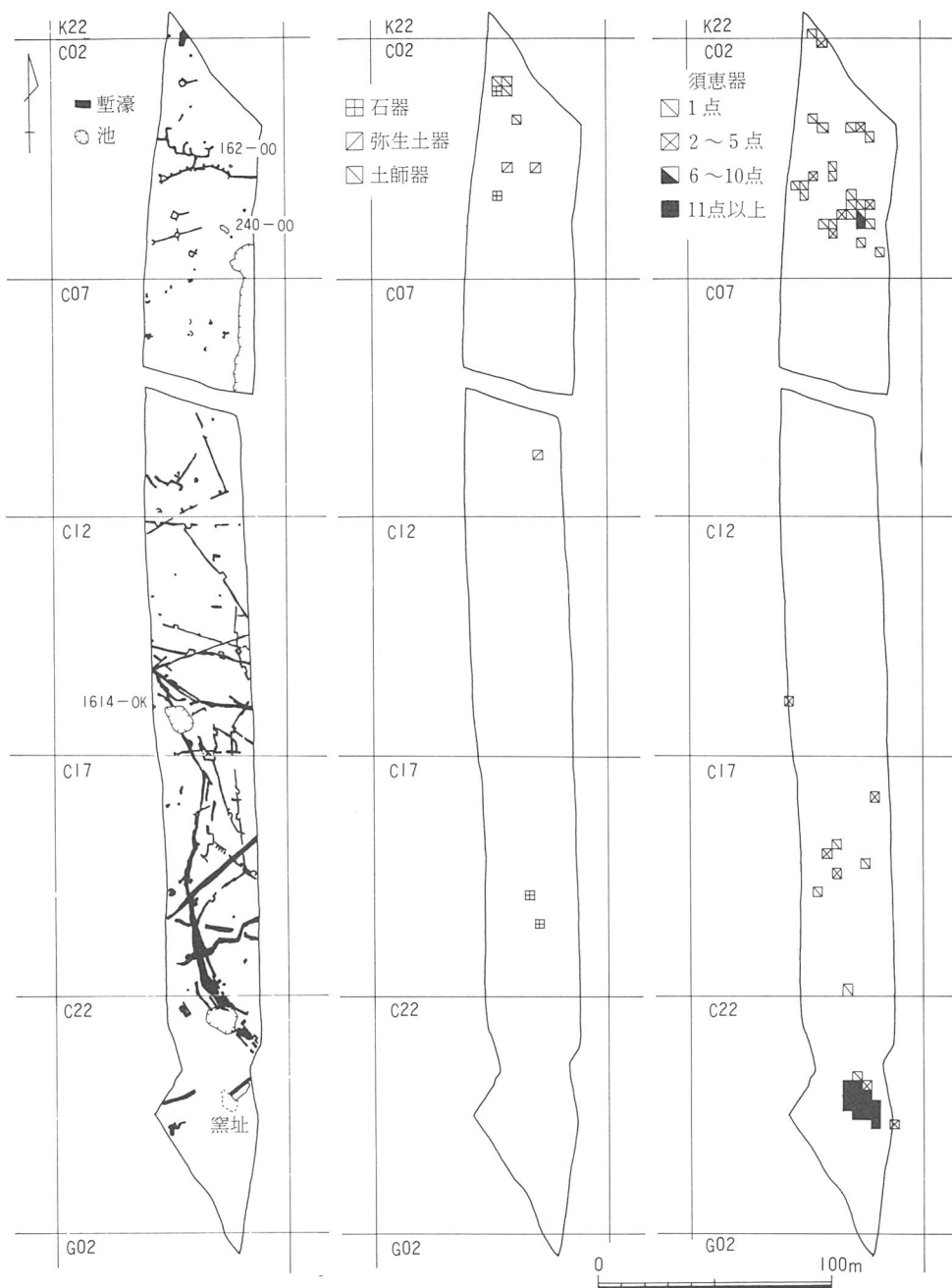
第17図 製塩土器

石器 S-5・6は第3層、S-7は第2層、S-8は現代遺構出土である。石質は全てサヌカイトである。

S-5は、国府型ナイフ形石器で、完形品である。長さ8.12cm、幅1.89cm、厚さ0.88cm、13.8gを測る。基部に自然面を残す。表面風化する。C02FN区出土。S-6は、石核である。長さ5.25cm、幅3.03cm、厚さ1.80cm、19.4gを測る。4つのネガティブな剥離面を認め、片側に自然面を残す。表面はやや風化する。C17OQ区出土。S-7は剥片である。長さ3.32cm、幅4.02cm、厚さ0.75cm、9.7gを測る。表面風化する。C02QN区出土。S-8は、自然礫である。後世の欠損を除き、加工は認められない。扁平で表面にアバタ状の凹みを多数もつ。長さ12.7cm、幅8.6cm、厚さ1.79cm、293gを測る。C17RR区、1368-OS出土。S-5は旧石器、国府文化期の所産である。他のものも風化の程度からそれに近い時期と推定される。



第18図 出土石器



第19図 遺構・遺物分布図

3 遺物の計測

遺物の出土量を量るためには様々な方法があるが、ここでは破片数を計測の基準とした。谷の部分以外の遺物の出土については、この章の第一節で説明したが、ここでは遺物が集中して出土した狐谷にある灰原の遺物を取り扱う。検出した破片数は第8図に一覧表として示した。窯跡の延長線上と推定されるKS、LSを中心にして6地区が1000片以上の分布を示している。これらの遺物分布数が多い地区は主要な遺物包含層である第4層、第6層、第11層などが重複している部分である。包含層の広がりについては、この章の第8図と比較すると理解できる。

層毎の数量は第20図に器形毎の数量を図示した。単に、破片の比較では甕が圧倒的に多い。層によって数量に差異があるが、各層とも杯、高杯、甕、壺などの破片の比率は良く似ている。甕は各層とも杯身の4倍以上の数値を示している。破片数で比較する限り甕は圧倒的に多いが、これが個体数とどのように対応するかについては別の角度から検討する必要がある。

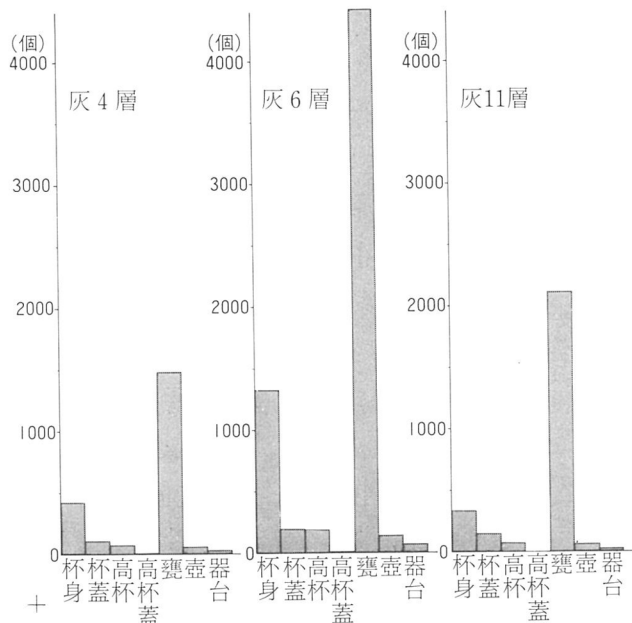
杯身、杯蓋については口径と器高を計測した。灰原の出土品で須恵器としては不良品として投棄されたものであるため、小さい破片では歪みが計測の際に誤差として記録されるため、計測には残存率の高いものを選定して使用した。口径、最大径は測定誤差が大きいことが予想されるので、測点が重ならないように注意して3回測定し、これを平均して口径、最大径とした。

杯蓋と杯身の口径と器高の関係を第21図に示した。最大の口径は20で最小の口径は27である。第21図と同一の資料を使用して杯身の口径、器高、立ち上がり部を1mm単位の度数分布で表したものが第22図である。これは第21図に比較して口径と度数分布の関係が明瞭である。ここでは、口径、器高、立ち上がり部のバラつきをみるために重複した内容であるが両方の表を作成した。「陶邑II」^(注3)では器高と立ち上がり部の比率が指数として使われているが、単に立ち上がり部と底部の高さを比較してみると口径、器高の平均値に比べて立ち上がり部の平均の偏差は極めて少ないことが第22図から明らかである。従って、杯身の器高を決定する要素としては受け部から下の底部が大きく影響していることが分かる。これは底部の形態と関連があり、丸みのある底部を有する杯は器高が高く、平坦な底部を有する杯は器高が低めであることが分かる。

灰原の各層は時間的に大きな差異はないと仮定して、器高、口径を計測した結果が第22図である。口径、器高にかなりのバラツキがあり、口径が小さく器高の低い杯は図版18の

27や28のような状態である。この形態は今回検出した灰原の土器群より新しい型式に認められるものであるが、数量が少ないこと、各灰層に含まれていることから、新しい型式の杯が混入したものではなく、この土器群の新旧の要素と考えることができる。

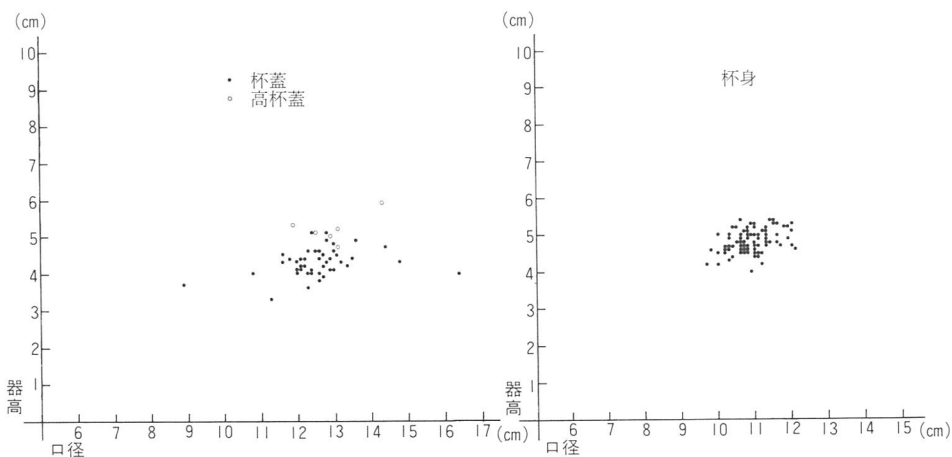
器高に比べて口径の方がバラツキが大きいのが、器高は立ち上がり部と底部（天井部）の2要素から構成されているので、杯については第22図に細部の計測結果を示した。



第20図 4-OK (1481-OK)

灰原出土遺物器形別出土破片数

口径と器高に比較すると、立ち上がり部は非常に正確に作られている。これは各部の中で最も入念に調整されていること、蓋と組み合わせになることと密接に関連した現象であろう。また立ち上がり部が正確に、標準的に作られているにもかかわらず、器高にバラツキがあるのは立ち上がり部より下、つまり底部に大きな差異がある。図示していないが杯蓋の天井部についても同様である。



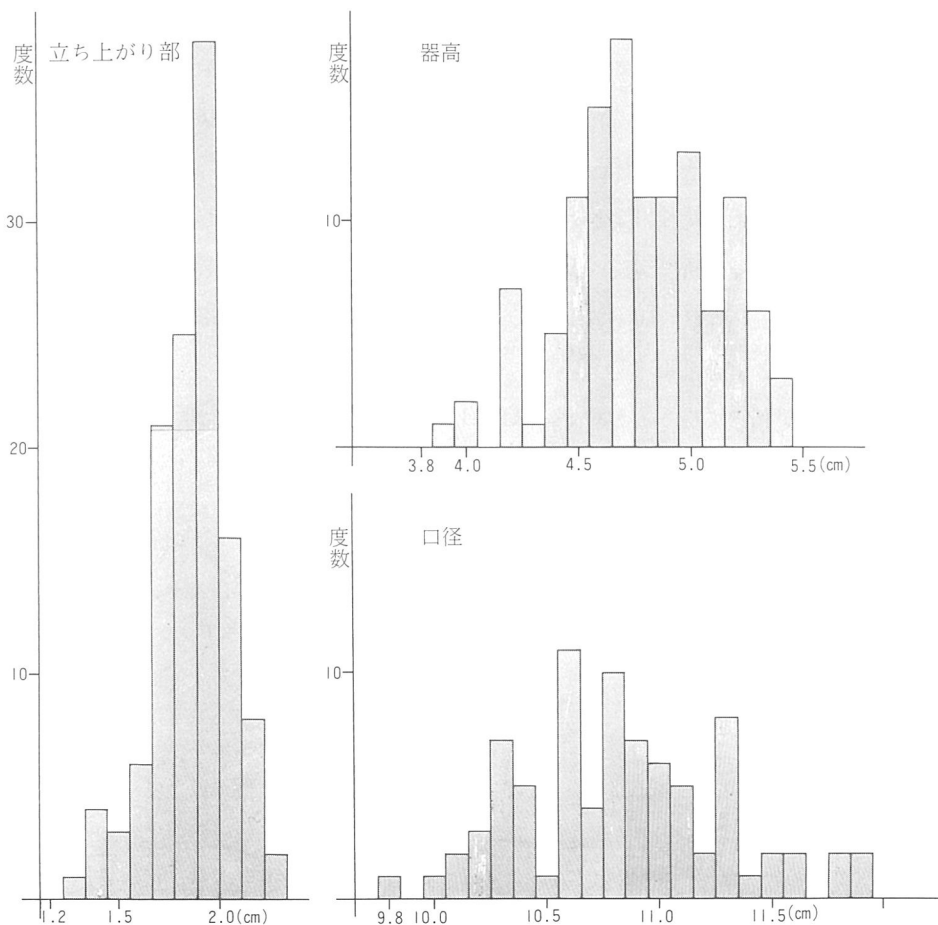
第21図 杯身・杯蓋の口径・器高測定グラフ

底部の丸いものと平坦な杯は第21図では口径が同一であれば上下の関係として表現されている。底部の形態の比較的平坦なものが器高の低い群を形成しているが、底部の丸い群と平坦な群の境界は明確ではない。

このような底部の丸い杯と平坦な杯は「陶色古窯址群Ⅰ」^(注4)の中で、後続する型式であるTK-208にも存在することが報告されている。

遺物の微細な計測と処理によって平均的な形態を数値によって示すことが可能であるが、この報告書で実施した計測処理は型式を細分するためのものではなく、群としての外郭を把握するための試みである。

数値による形態の表現と処理に至るには計測方法、計測精度など初歩的な段階での解決をせまられている問題がある。



第22図 口径・器高・立ち上がり部の度数分布

4 ヘラ記号 (写真図版30・31)

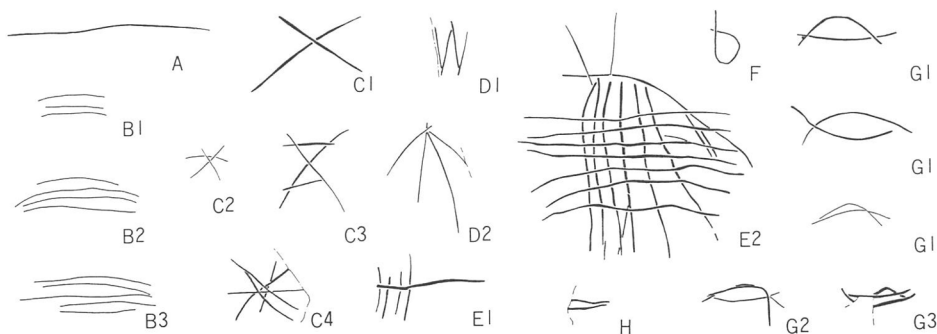
4号窯跡の灰原からは、ヘラ記号を記した須恵器が出土している。資料数は、接合の終了した破片で、182片を数える。それらの内容は、以下の通りである。

A ヘラ記号の種類

ヘラ記号は、全てが、ヘラ描沈線によって、焼成前に描かれている。形態から、17種類に分けられる。その内容は、直線状の線で描くものに、一本線からなるもの(A)と、三本の平行線からなるもの(B1)、四本の平行線からなるもの(B2)、五本の線からなるもの(B3)、斜めに二本の線が交差するもの(C1)、前者の交点の横に、別の直線が交差するもの(C2)、同様に、両側に交差するもの(C3)、五本の直線が中央で放射状に交差するもの(C4)、W形を呈するもの(D1)、四本の直線が一端で重なるもの(D2)、一本の直線に四本の短い平行線が直交するもの(E1)、格子形のもの(E2)がある。曲線で描くものに、水滴状のもの(F)、二本の弧線を両端で交差させたもの(G1)、(G1)と同様な形で片方を二重に描くもの(G2)、三本の弧線を舟形に交差させたもの(G3)がある。(G1)は、片方が直線(注5)的なものが多い。その他、全体が不明のもの(H)がある。

ヘラ記号に用いられる沈線の太さや深さには、図形によって使い分けが見られる。沈線の幅が1mm前後と太く、断面が鋭いV字形をなすものは(A)に、逆に幅が、0.2mm前後と極めて細く比較的鋭い線は(B)に、また、幅はまちまちだが、断面が浅いU字形で鋭さを欠くものは(G1)に集中している。(注6)

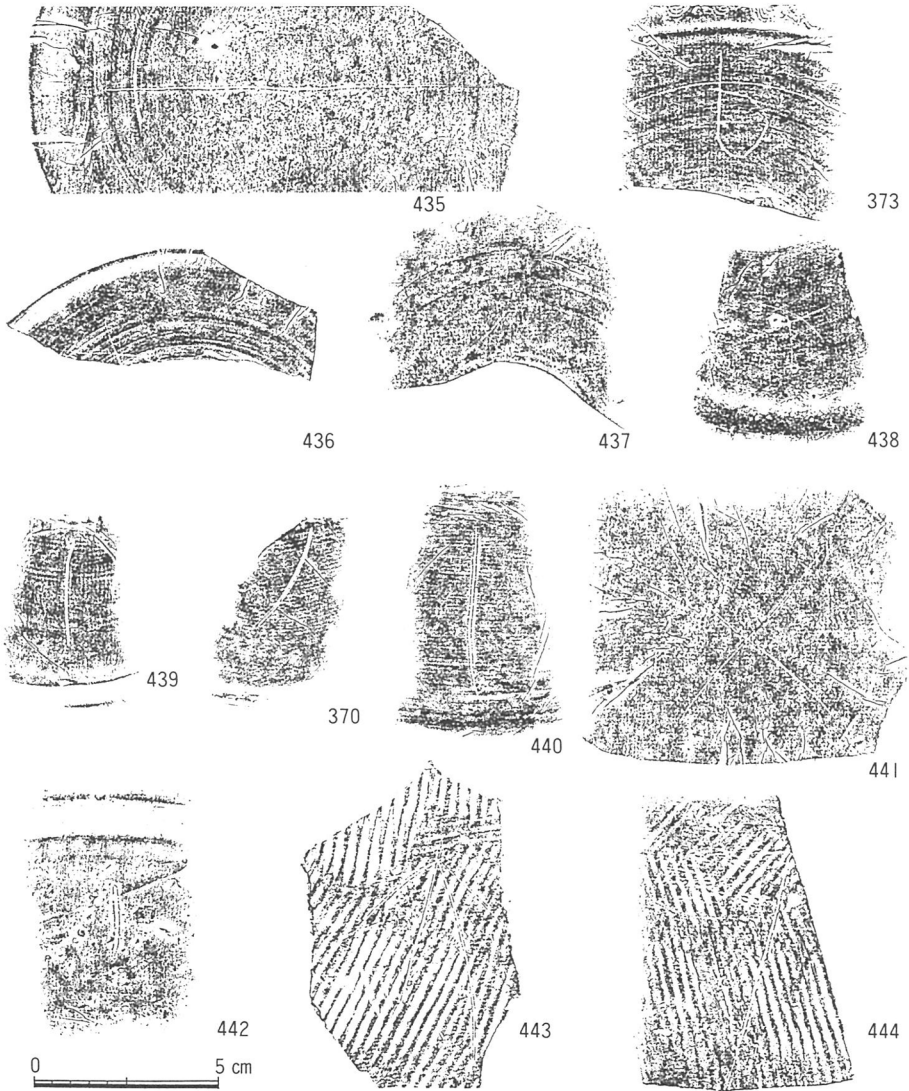
沈線の引き方が判明するものがある。(A)(B)では、断面の斜面が、進行方向に対し右に傾くことから、上から下へと縦に右手を動かしたと考えられる。また、(G1)は、2本とも横向きに左から右へと手を動かしており、直線状の線の方を先に引いている。同じ種類



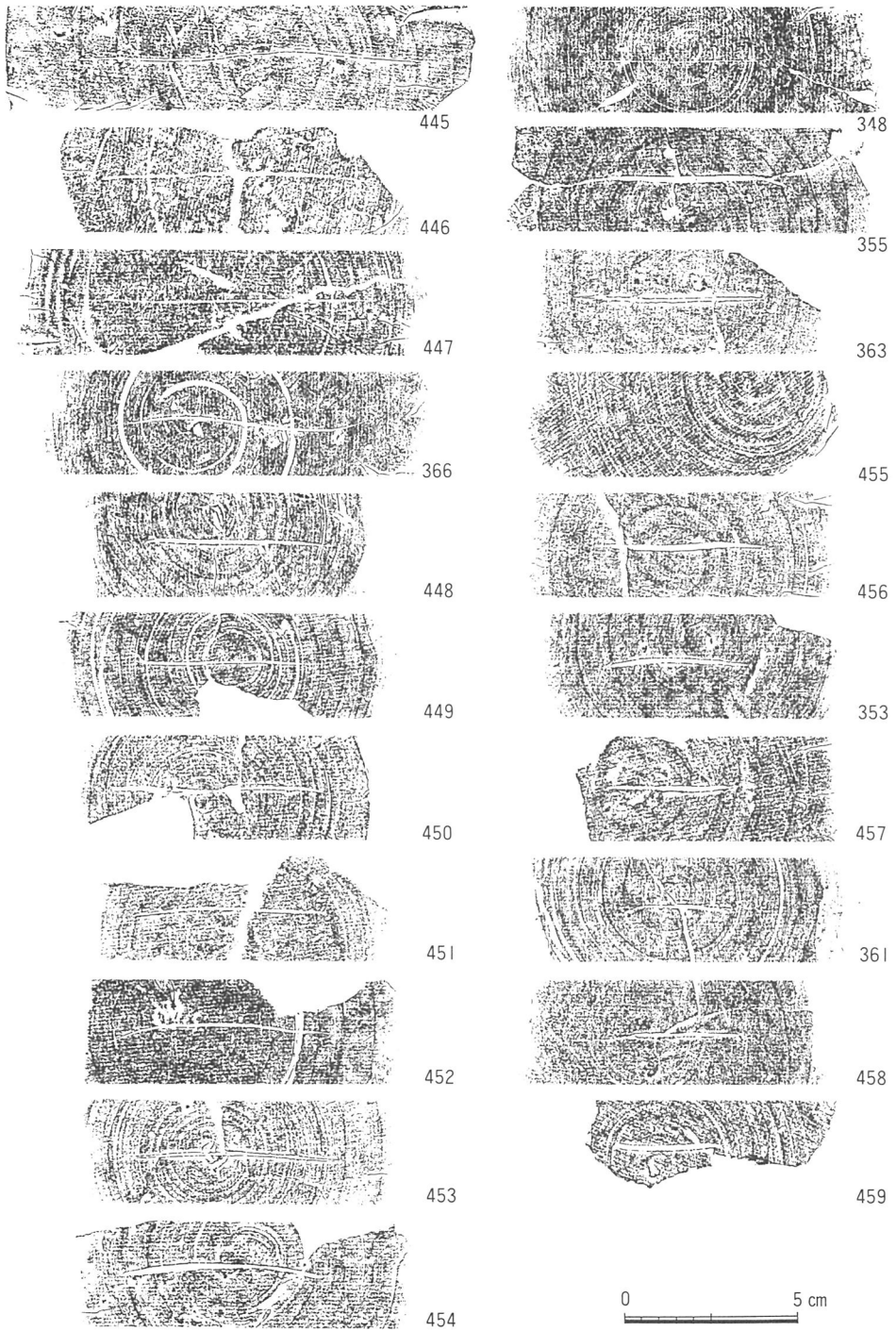
第23図 ヘラ記号の分類

のものは描き方も類似している。

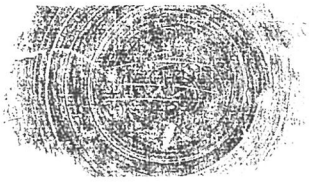
図形の種類毎の個数は、接合済みの個体数で、一条の直線からなるもの(A)が64個、弧線を交差させたもの(G1)が37個を数え、両者合せて全体の約8割に達する。逆に残りの内、12種類は、1例ずつしかなく、したがって、限られた種類が大半を占めていることが(注7)わかる。



第24図 ヘラ記号拓本



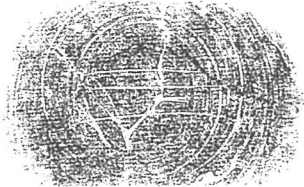
第25図 ヘラ記号拓本



460



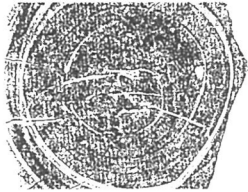
357



461



463



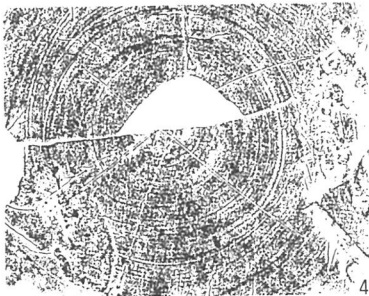
462



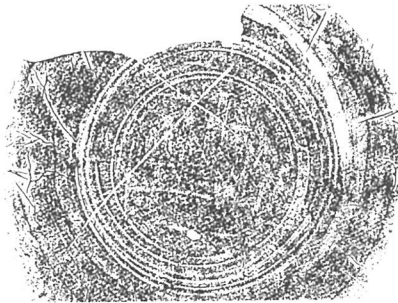
356



350



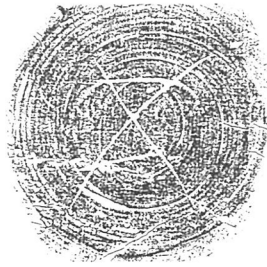
464



364

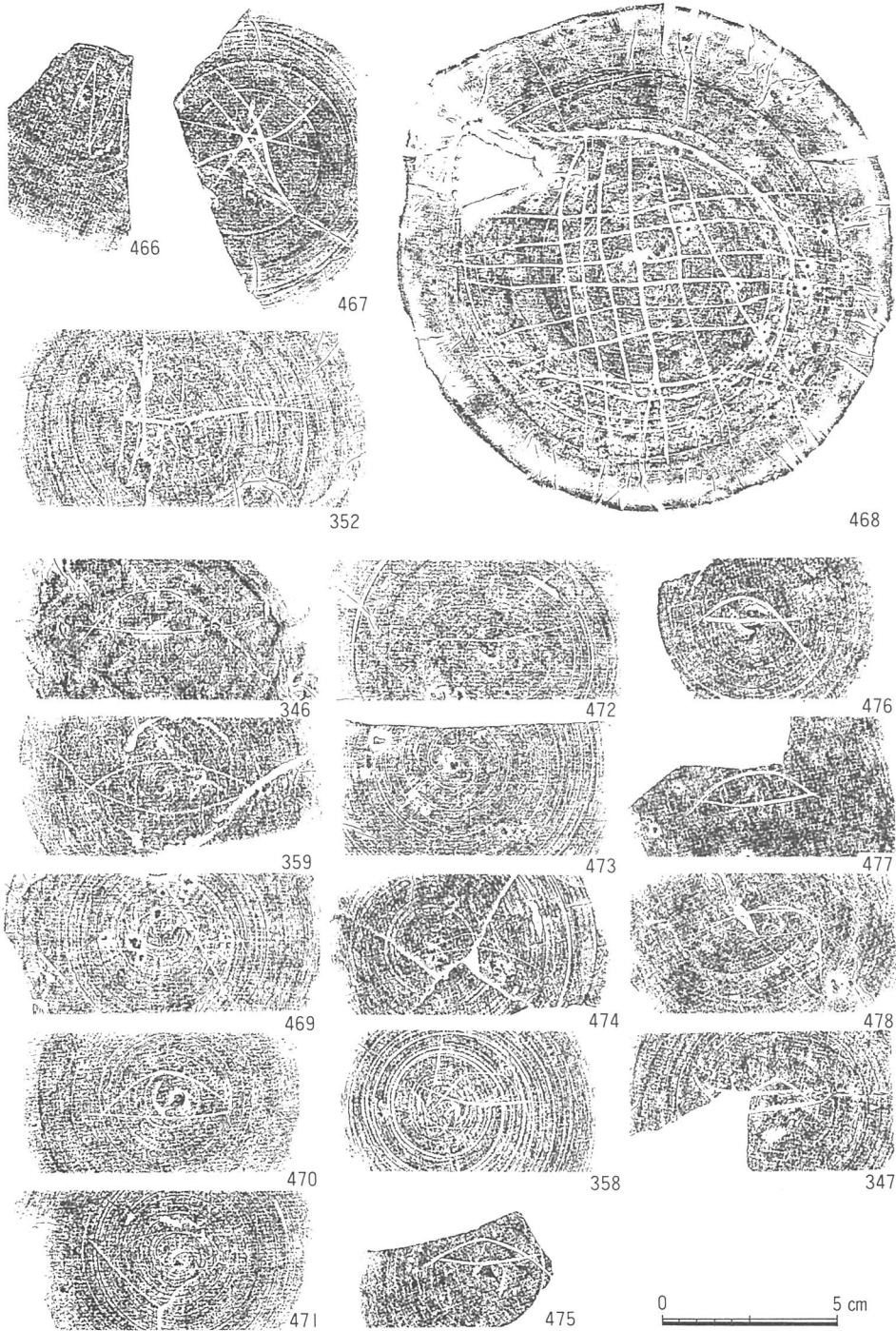


362

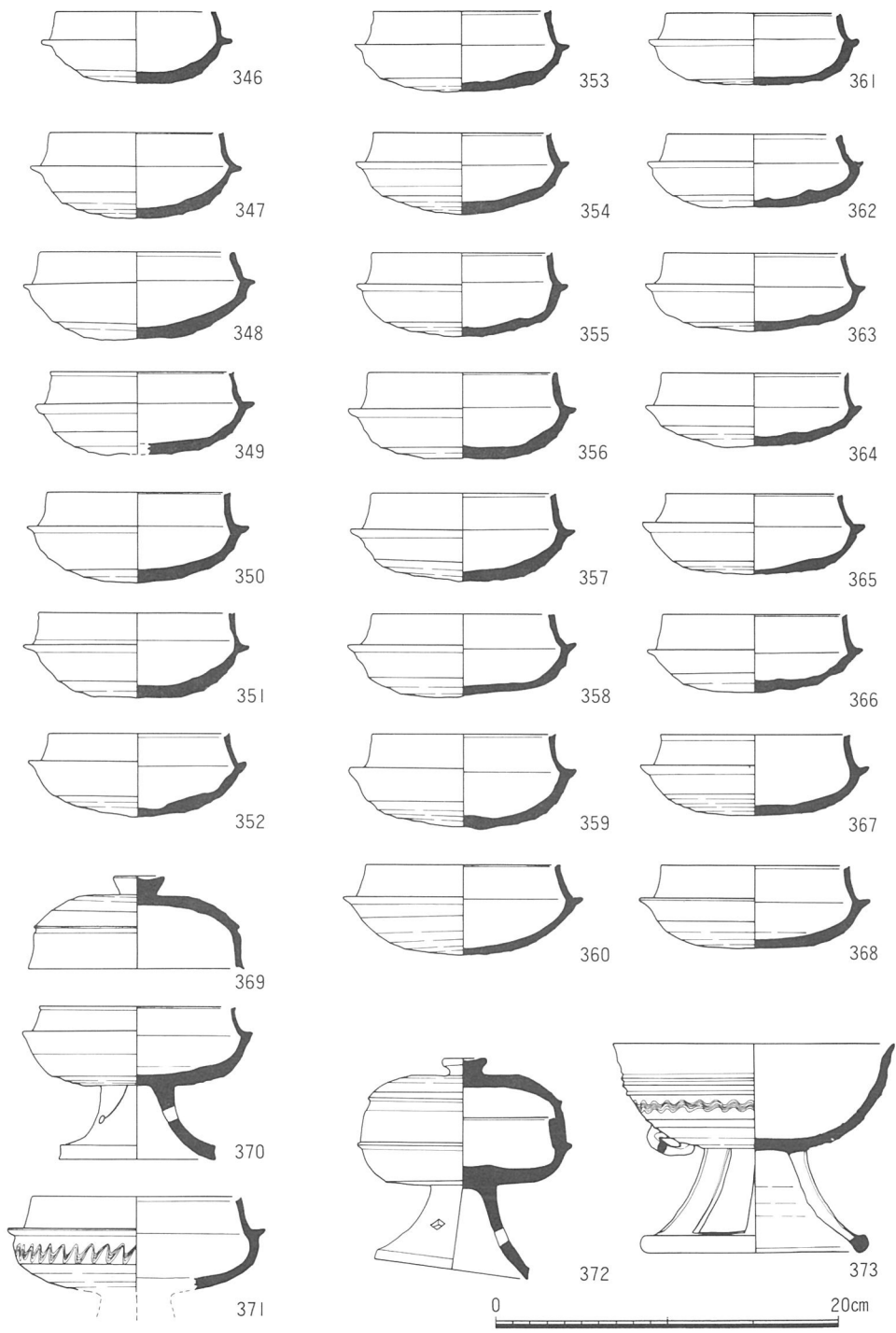


465

第26図 ヘラ記号拓本



第27図 ヘラ記号拓本



第28图 信太山4号窯 (1481-OK) 出土遺物

B ヘラ記号の施文器種と部位

ヘラ記号は、杯身、杯蓋、高杯、壺、甕にみられ、4号窯跡出土の内、^(注8) 器台を除いた大半の器種に見られる。量的には、杯身が、286個と、全体の96%を占める。杯身の場合、^(注9) ヘラ記号を持つ個数の割合は、杯身全体の23.2% (4.3個に1個) になると推定される。

(底部外面の回転ヘラケズリの中心部をもって個対数を算出した場合)。その他の器種では、ヘラ記号の施文率はより低いと考えられる。

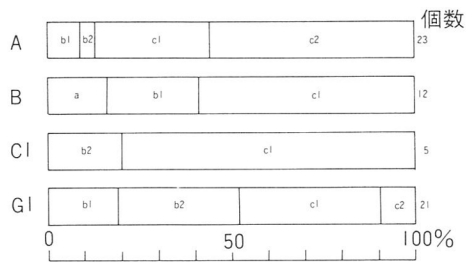
図形の中には、特定の器種にしか見られないものがある。即ち (F) は無蓋高杯、(C2) は有蓋高杯、(D1) は甕、(G1) は杯身に限られる。反対に、(A) (C1) のように、複数の器種にまたがるものもある。

ヘラ記号の付けられる位置は、杯身では底部外面の中央付近に限られる。類例は少ないが、杯蓋では、天井部外面、無蓋高杯では体部外面の下半と脚部外面、有蓋高杯では脚部外面、壺では底面、甕では頸部外面と胴部外面に見られる。各器種共に、内面に施した例は認められない。

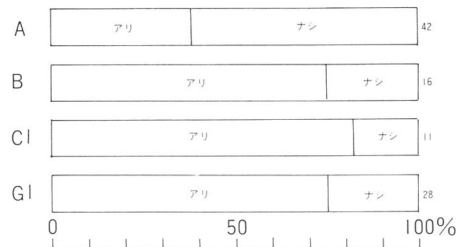
C 杯身の手法とヘラ記号の関係

ヘラ記号を、製作工人を区別するための記号であるとする見方がある。そうであるならば、杯身に現われた手法差とヘラ記号の種類との間になんらかの相関関係が認められることになる。この点を、類例の多い (A) (B1) (B2) (B3) (C1) (G1) を取り上げて検討した (第29図)。(B1) (B2) (B3) は、一括して (B) として扱った。なお、灰原の層位毎に比率を検討した結果、(B) の比率が、第11、6層より第4層では高いことが判明し、この点については注意した^(注10) (第30図)。

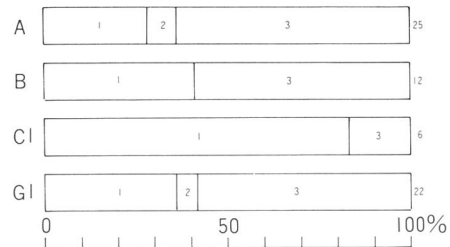
一方、対比する杯身の手法としては、任意に、1. 口縁端部の形態 2. 底部内面の仕上げ方 3. 底部の厚さ 4. 底部外面のヘラケズリの様相 5. 受口部の形態 6. 口径、器高値 7. 口縁部の傾き を選んだ。結論的には、1～4で、ヘラ記号との相関関係が認められた。個々の内容は、1では、(a) 端面が丸み (b1) 端面が水平で平坦 (b2) 端面が水平で凹線を巡らす (c1) 端面が1mm以上内傾し凹線なし (c2) c1と同様で凹線あり と4細分した。認められた関係は、ヘラ記号の (A) では口縁形態 c1、c2、特に c2が圧倒的に多いのに対し、(G1) では、b1、b2が多く、c2が少数に過ぎないこと、(B) では、aを含み、b2、c2を含まないことである。2では、見込部に最終的に不定方向のナデ調整を行うか否かを見た。(A) では、ナデるものは少なく、(G1) に多いことが窺える。3では、中心部の厚みを測った。



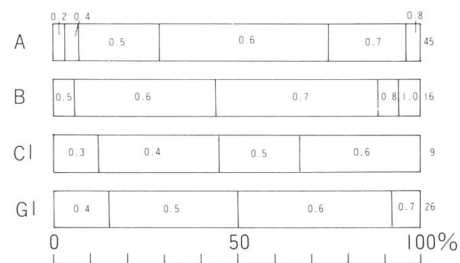
口縁形態



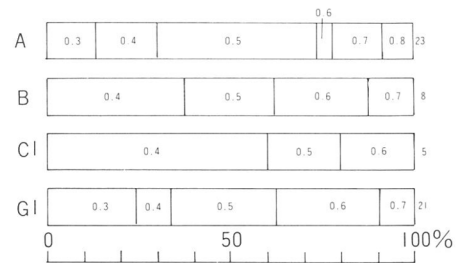
内面ナデ調整の有無



受口部形態

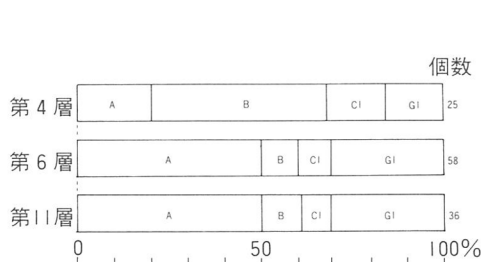


底部の厚み(単位cm)

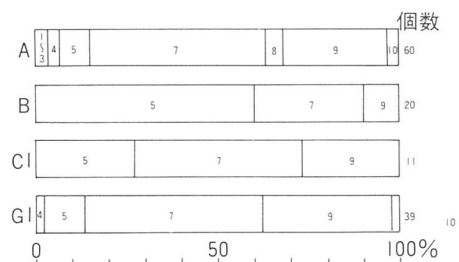


口縁部の傾き(単位mm)

第29図 ヘラ記号と杯身の手法との関係



グラフ内の文字はヘラ記号



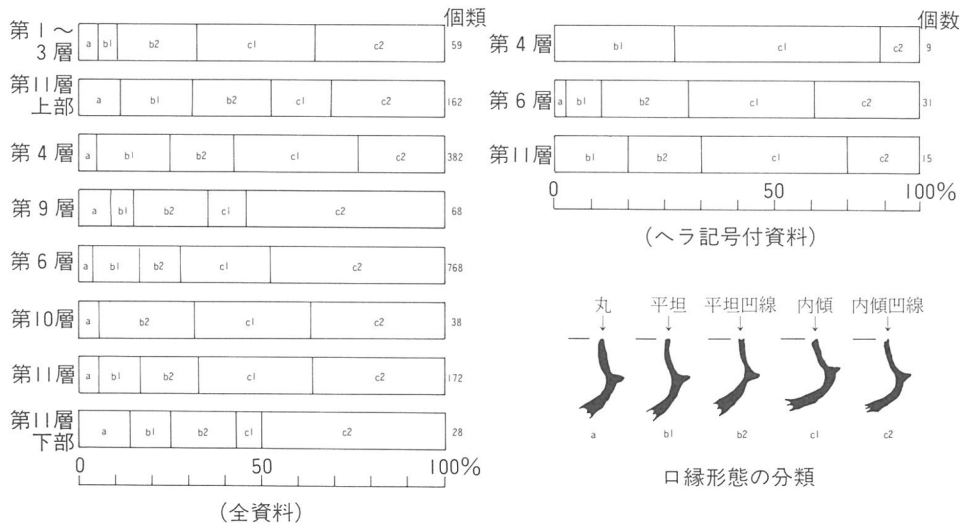
グラフ内の数字は層位

第30図 ヘラ記号と灰層の関係

(B) には、厚いものが多く、逆に (G1) は薄手であり、(A) は厚さにバラつきがあった。4 では、拓本に示されるように、(A) では、ケズリの単位面が平坦で、その境の稜線が明瞭であり、(G1) では、ケズリの方向にカキ目状の条痕が多数入り、稜線が不明確なものが多いことがわかる。相関関係の不明確なものでは、5～6がある。5 は、受口断面を a、三角形 b、上方に突出 c、水平に突出 の3分類した。6、7 は、いずれも図示した結果となった。

また、ヘラ記号をつけた個体が、そうでない個体と手法が異なるのか否か、前述した口縁形態の比較から層位毎に検討した結果、c2の比率に示されるように手法差は認められず、ランダムにつけられたものであることが分かった。

以上の結果から、杯身に見られた手法の差が、工人差を反映したものとすれば、ヘラ記号が、工人差を示すとする解釈が成り立つことを示している。しかし、それを断定するには、今回の成果では不十分で、なお、異なった解釈の余地があろう。



第31図 灰層と杯身の関係

5 燃料材 (図版31 写真図版32・33)

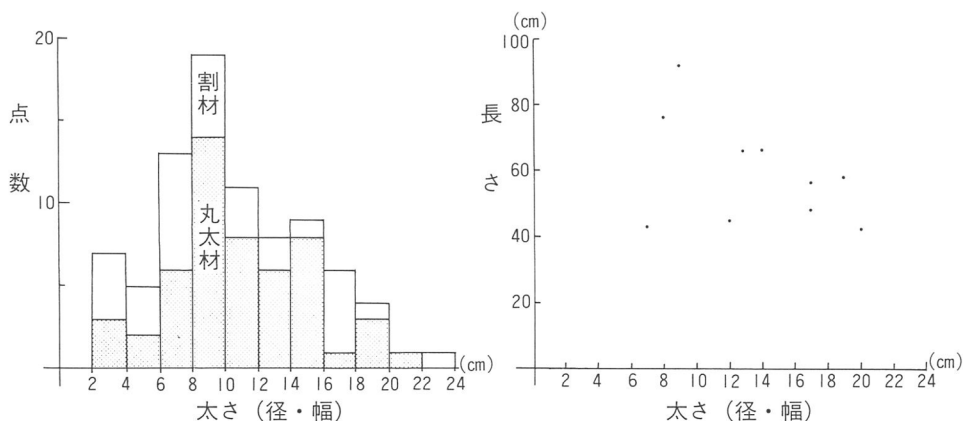
灰原1481-OX に伴って多数の木材が出土している。炭化の進む資料を含む事から、須恵器窯の操業に用いられた燃料(薪)である可能性が高い。このため出土した木材を燃料材と仮称する。燃料材と考え取り上げた資料は84点ある。観察事項は文末の表にまとめ、別に分布グラフを作製した(第32図)。

木取りは丸太材が6割強、分割材が4割弱を占める。太さは丸太材が4~20cm、割材が

4～25cmを測り、10cm前後の資料が多い。長さに就いては、炭化、折損のため旧状の知れる資料が少ないが、両端に加工痕をとどめ長さを確定できる資料は10点あり、それによると最短42cm、最長92cmを測る。10点中4点が45cm前後、4点が60cm前後にあり、ある程度長さを揃える意図があるのかもしれない。それを超える長さの資料は太さが10cm以下に限定できそうである。

炭化状態について話すと、全体が炭化するもの、炭化の度合いが一端、又は片面に偏るもの、全く炭化を示さぬものときまざままである。炭化が偏るものを焼成時における位置の反映と仮定すると、操業途中に焚口から燃料材を引き出す行為を考えざるを得ない。それが操業を中止せざるを得ない要因によっておこなわれたものか、興味ある問題である。

加工痕をとどめる資料は、一端のみにとどめるものを含め34点ある。工具痕が確認できる例では、全てフリウチ道具によるものであり、刃部の側縁痕跡をとどめる資料の存在からすると鎌の可能性は薄く、使用工具は斧に限定できる。加工面は樹面に対しほぼ直角に残るものと、斜角（斜位）に残るものがあり、斜角に残るものも一面、または二面加工にとどまる資料が多い。両端に加工痕を残す資料中には、両端が直角、または一端が直、他端が斜角を示す資料ばかりで、両端が斜角の加工面をもつ例はない。概して斜角をなす加工痕は加工対象木が立位であると縦斧が、横位であると横斧が想定でき、直角をなす資料はいずれの場合も縦斧が考えられる。今回出土した燃料材の両端に斜角をとどめる資料がなかった事、斜角をなす加工面が二面以下にとどまる事からは、伐採のみならず伐採後の分断にも縦斧の使用を考えてよいだろう。伐採から分断までの時間的経過を考えるために、両端に加工痕を残す燃料材について刃こぼれ痕を基に使用工具の限定を検討したが、同一



第32図 燃料材片の分布図

とも別工具とも指摘できる要素は見出せなかった。

分断された材木が燃料材として供される際生木であったか否かは判断が難しい。炭化を示さぬ径20cm前後の丸太材にヒビ割れは認められないが、径が小さいだけに乾燥していないとする。論拠が弱いと思われる。個々のデータについては下の表に示す。

No.	L	W (D)	木取り	木口形状	炭化状況
W-1	47	15	丸	焦・折	全
W-2	60	20	丸	両焦	全
W-3	45	20	丸	両焦	全
W-4	49	25	割	加・焦	木?
W-5	66	14	丸	両加	一端
W-6	58	20	割1/6	両加	弱
W-7	53	11	丸	加・焦	全強
W-8	46	12	丸	両焦	強
W-9	80	10	丸	折・加	片強
W-10	23	19	割1/6?	両焦	一面強
W-11	35	13	丸	加・焦	一面強
W-12	42	16	丸	折・加	
W-13	48	18	割1/2	両加	全弱
W-14	64	13	丸	加・焦	弱

第四節 まとめ

A地区の調査で検出することができた窯跡は、小規模ながら灰原を完全な形で検出することができた。灰原は約120m²の範囲におよび3枚の灰層から成り立っている。

この主要な層には第4層、第6層、第11層と命名している。各層には遺物が大量に含まれていたため、各層の遺物の取り上げには細心の注意を払ったが4層、6層、11層の遺物が相互に接合することが整理作業の段階で判明した。包含層の掘り分け精度の確認は検出した資料の正確さを規定するので、これについては、各層の一部が接触していることもあって、調査時の不手際によるものか本来このような状態で堆積していたのか確定することは困難であり、ここでは両方の可能性が存在することを認めざるをえない。

灰原には炭、灰、焼土をはじめとして大量の須恵器が出土したが、窯体の破片は数点出土しているに過ぎない。第10層の成立後、谷底を一度整備した痕跡は第9層の灰と焼土の混じった土を版築状につみあげた土層の存在によって説明がつくが、窯体片が谷底へ落下

していないのは、窯体は最近まで残存していたが、重機を使用する最近の土木工事によって窯体の跡形もないほど削り取られたものと思われる。重機を使用した掘削の跡は調査開始時点でも明瞭に確認できた。

灰原から検出した須恵器は杯身、高杯、杯蓋、高杯蓋、壺、甕、器台などがある。これらの須恵器は田辺編年による ON-46、中村編年による I-2 期に相当し、いわゆる初期須恵器の範疇に属するものである。

形態の特徴を簡単に表現すると、入念に成形してあるが端部はあまり鋭くない。しかし、器台では端部の形態が鋭い個体があり、新しい形態の要素も認められる。また成形の点では、ロクロの回転力が弱いためかヘラケズリの幅が狭く、削った痕跡も鋭くない。杯蓋や杯身に認められるカキ目手法は、調整の段階以前に施されカキ目の痕をそのまま残すものとカキ目の痕をヨコナデ調整によって消したように見える杯身もある。杯身、器台など個体差大きい器形があり、器台などのように新旧の要素と考えたほうが良いものもあるが、あまり時間の幅が大きくない土器群と見なすことができる。

注

注1 B地区の遺物と時期的に接近した遺物であるため、B地区の分類基準に合わせた。

注2 用字用語は文献49および「陶邑古窯址群I」に従った。

注3 文献49の一部が論文として発表されている。

武内孝之「土器形態による分類と統計処理」、「数理科学」No.170、1977年

注4 田辺昭三「陶邑古窯址群I」平安学園高等学校 1966年

注5 同一種類のヘラ記号で、平面的な長さや幅、沈線の太さの関係から細分可能なものがある。(A)は、①長さ2.5～5.0cm、太さ0.8～1.3mmの短くて太い沈線をもつもの、②長さ4.0～7.0cm、太さ0.2～1.0cmの中間的なもの、③長さ7.5～8.5cm、太さ0.2～1.0mmの長くて細い沈線のもの、(G1)は、①長さ3.5～4.5cm、幅1.0～2.5cm、太さ0.2～1.2mmの小形のもの、②長さ5.0～6.0cm、幅1.0～2.5cm、太さ0.2～1.0mmの中間的なもの、③長さ6.0～7.0cm、幅2.4～2.6cm、太さ0.2～0.5mmの大形で沈線の細いものに、各々3種類に分れる。

注6 沈線の太さとヘラ記号の種類が判明する資料は合計116個ある。内容は(A)は、太さ0.3mm 2個、0.4mm 3個、0.5mm 4個、0.6mm 1個、0.7mm 2個、0.8mm 5個、0.9mm 4個、1.0mm 6個、1.1mm 1個、1.2mm 8個、1.3、1.5～1.8mm各1個、(B1)は、0.2mm 2個、0.3mm 1個、(B2)は、0.1mm 1個、0.2mm 2個、0.3mm 1個、0.4mm 2個、(B3)は、0.3mm 3個、0.4mm 1個、(C1)は、0.2mm 2個、0.3mm 3個、0.5、0.7mm各1個、0.8mm 4個、0.9、1.0mm各1個、(C2)は、0.3mm 1個、(C3)は、1.0、1.2mm各1個 (C4)は、1.2mm 1個 (D1)は0.5mm 1個 (D2)は、0.7mm 1個 (E1)は、0.9mm 1個 (E2)は、1.0mm 1個 (F)は、0.9mm 1個 (G1)は、0.1mm 7個、0.2mm 12個、0.3mm 2個、0.4mm 3個、0.6mm 1個、0.7mm 2個、0.8mm 6個、0.9mm 2個、1.0、1.2mm各1個 (G2)は、0.3mm 1個 (G3)は、1.0mm 1個、(H)は、0.4、0.7mm各1個を数える。

- 注7 ヘラ記号の種類別の個数は、合計182個の内、(A) 71個 (B1) (B2) 各々10個 (B3) 3個 (C1) 16個、(C2) (C3) (C4) (D1) (D2) (E1) (E2) (F) 各々1個 (G1) 38個 (G2) (G3) 各々1個 (H) 2個その他種類不明のもの22個となる。
- 注8 器種別のヘラ記号の個数は、合計182個の内、杯身169個、杯蓋2個、高杯7個、壺1個、甕3個を算える。なお、杯身の場合に、ヘラ記号が完存しているもの、と欠損が小範囲に留まるものは各々58個、大部分が欠損し別の個体と接合する可能性があるものは53個である。また、器種別に見たヘラ記号の内訳は、杯身では、(A) 64個 (B1) (B2) 各々10個 (B3) 3個 (C1) 13個 (C3) (C4) (D1) (E1) (E2) 各々1個 (H) 2個 不明22個 杯蓋では、(A) 2個 高杯では (A) 3個 (C1) 2個 (C2) 1個 (F) 1個 壺では (C1) 1個 甕では、(D2) 1個となる。
- 注9 杯身で接合作業を行う以前の総破片数は、3416個あり、そのなかでヘラ記号を付けた破片と、それに接合可能な破片を加えた合計は268個を算え、全体の7.8%を占める。次に、個体数を示す指標となる、杯身の底部外面の回転ヘラケズリの中心点の個数は、全部で516個を算え(中心点の部分で割れたものは、90°以上の角度で残存するものを0.5個として算えたが、該当するものは少ない。)、その内ヘラ記号を付けたものは、119.5個で、全体の23.2% (即ち、4.3個に1個の割合でヘラ記号を持つ) を占める。前者との差は、接合作業の限界を示す。なお、重量に基づいて個体数を推定すると、灰原4号窯出土の杯身総重量6459gを、杯身完存品15個体の平均重量196.8gで徐して、328.2個になる。ヘラケズリの中心点で求めた値との差は、破片の回収率を多分に反影すると考えられる。
- 注10 資料数の多い第4、6、11層については、層位別の比較を行った。
- 注11 文献615、619
- 注12 文献49。

第四章 B地区の調査成果

第一節 B地区の概況

1 概 要

B地区は南北約500mにわたる調査区で、通称「西ノ谷」と呼ばれる開析谷と、それを挟む標高約70mの二箇所の丘陵部からなる。

「西ノ谷」は南北約4.5kmの長大な開析谷で、途中「鶴田池」・「大谷池」などの多くの溜池を擁しながら信太丘陵内を北流し、やがて現在の高石市「とのか」付近で平野部に開口する。

B地区はこの長大な開析谷の最上流部近くにあたるが、この付近では、嘗ての谷川は農業用水路として北東側丘陵に沿って付け替えられ、谷底部分は水田や水田を埋立てた更地の現況を呈していた。

丘陵部は旧陸軍から自衛隊の演習地として利用され続けたためか、地形の改変や攪乱が著しく、考古資料の遺存は希薄であったが、「西ノ谷」付近では北東側丘陵斜面で一基、南西側の丘陵斜面で三基の須恵器生産窯跡を検出することができた。これらの窯跡群は陶邑窯跡群の区分に従えば大野池支群に属する。

また谷底部分では当該須恵器窯の灰原のほか、瓦器などの中世土器を包含する地層の堆積が認められ、「西ノ谷」の埋没過程や、丘陵部の調査からは窺うことが困難な付近の歴史的景観の一端を知ることができる。

以下、「西ノ谷」埋没谷、丘陵部、各窯跡の順に報告を行っていく。

2 「西ノ谷」埋没谷の状況 (第33・34図 写真図版34~40)

現状ではほぼ埋没してしまっていたが、調査地付近の「西ノ谷」は、主谷部分(701-OX)と、主谷に注ぎ込む四つの小規模な支谷(11-OX・12-OX・702-OX・703-OX)から構成されていることが判明した。

これらの小規模支谷の丘陵斜面部分は、周辺丘陵部より流入した黄褐色系(10YR5/6)細礫混シルト質土が堆積しており遺物の出土も顕著でないが、本谷(701-OX)との合流点近くでは、本谷と同様に有機質分を多量に含む粘土層(以下有機質土と略す)の堆積が二層にわたり認められた。上層の有機質土は暗茶褐色(2.5GY3/1)を呈し、下層のそれは

黒褐色 (2.5GY2/1) を呈する。

灰原層を除けば、「西ノ谷」から出土した遺物のほとんどはこの両層からのものであるが、出土遺物の構成は上下の各有機質土に差異が認められる。そして、この出土遺物の差異は本谷・各支谷部分全てに共通しており、上下二層の有機質土は「西ノ谷」の埋没過程における「鍵層」ということができる。

第34図は各埋没谷の堆積土を基本的な土質で区分し、同時に出土遺物から判断される各層の年代観を示したものである。以下、第34図に基づき各埋没谷について記述するが、遺物の出土層位は第34図に示した各層の年代観を表す数字をもって層名とする。

A 11-OX (第33・34図 写真図版36)

南西側丘陵上部より東北方向に延び701-OX に合流する。現状ではほぼ完全に埋没していたが、発掘調査の結果、長さ約40m、最大幅約13m、最深部で深さ約1.4mの規模を測る小規模埋没谷であることが判明した。丘陵斜面部では断面形は浅い「U」字状をなし、傾斜もゆるやかであるが、701-OX との合流点付近は幅約2.5m、深さ約0.6mの規模で急に深くなっている。

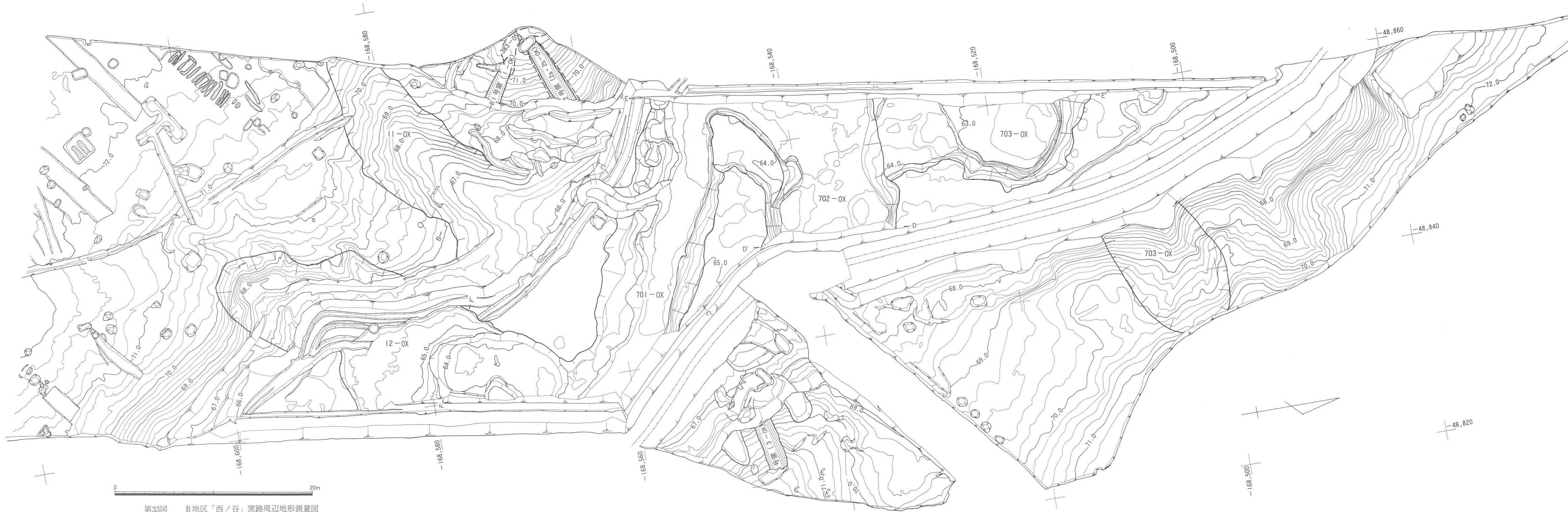
合流点付近では底面近くには2号窯(2a・2b-OK)の灰原が堆積し、その上には砂・シルト質土を介在させる二層の有機質土の堆積が認められる。一方、丘陵斜面部では底面上に、2号窯(2a・2b-OK)の灰原が流出することによって形成された遺物包含層が約10cmの厚さで堆積し、その後1号窯(1-OK)の灰原が堆積している。以降、シルト質土、細礫混シルト質土の順で埋没が進み、後者からは硯などの近世遺物の出土が見られる。

B 12-OX (第33・34図 写真図版37)

長さ34m以上、最大幅約15mを測り、南西側丘陵斜面から北西方向に伸び701-OX に合流する。水田面の拡張のため丘陵裾部がカットされているため12-OX の上部と下部は分断されており、下部での深さは約1.4mを測る。

12-OX の下部は底面から約30cmの厚さで無遺物層の礫・砂層が堆積し、その後、約80cmの厚さに有機質土層の堆積が認められ、この付近の水流作用は不活発で、澱んだ状態を長く続けていたことを示している。

有機質土は、色調と厚さ1mm程の薄い砂層の介在により六層に分層できるが、出土遺物の面からは二層に大別しうる。下層のそれは約35cmの厚さをもち、堆積過程で肩部からの砂・シルト層の流入が多く認められる。



第33图 B地区「西ノ谷」窠跡周辺地形測量図